

有価証券報告書

(金融商品取引法第24条第1項に基づく報告書)

事業年度	自	2019年10月1日
(第21期)	至	2020年9月30日

株式会社 T V E

E01716

目次

頁

表紙	
第一部 企業情報	1
第1 企業の概況	1
1. 主要な経営指標等の推移	1
2. 沿革	3
3. 事業の内容	4
4. 関係会社の状況	6
5. 従業員の状況	7
第2 事業の状況	8
1. 経営方針、経営環境及び対処すべき課題等	8
2. 事業等のリスク	11
3. 経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析	14
4. 経営上の重要な契約等	18
5. 研究開発活動	19
第3 設備の状況	20
1. 設備投資等の概要	20
2. 主要な設備の状況	20
3. 設備の新設、除却等の計画	20
第4 提出会社の状況	21
1. 株式等の状況	21
(1) 株式の総数等	21
(2) 新株予約権等の状況	21
(3) 行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の行使状況等	21
(4) 発行済株式総数、資本金等の推移	21
(5) 所有者別状況	22
(6) 大株主の状況	22
(7) 議決権の状況	23
2. 自己株式の取得等の状況	24
(1) 株主総会決議による取得の状況	24
(2) 取締役会決議による取得の状況	24
(3) 株主総会決議又は取締役会決議に基づかないものの内容	24
(4) 取得自己株式の処理状況及び保有状況	24
3. 配当政策	24
4. コーポレート・ガバナンスの状況等	25
(1) コーポレート・ガバナンスの概要	25
(2) 役員の状況	30
(3) 監査の状況	34
(4) 役員の報酬等	36
(5) 株式の保有状況	38
第5 経理の状況	41
1. 連結財務諸表等	42
(1) 連結財務諸表	42
(2) その他	69
2. 財務諸表等	70
(1) 財務諸表	70
(2) 主な資産及び負債の内容	79
(3) その他	79
第6 提出会社の株式事務の概要	80
第7 提出会社の参考情報	81
1. 提出会社の親会社等の情報	81
2. その他の参考情報	81
第二部 提出会社の保証会社等の情報	82

[監査報告書]

[内部統制報告書]

【表紙】

【提出書類】 有価証券報告書

【根拠条文】 金融商品取引法第24条第1項

【提出先】 近畿財務局長

【提出日】 2020年12月24日

【事業年度】 第21期（自 2019年10月1日 至 2020年9月30日）

【会社名】 株式会社TVE
（旧会社名 東亜バルブエンジニアリング株式会社）

【英訳名】 TVE Co., Ltd.
（旧英訳名 Toa Valve Engineering Inc.）
（注） 2019年12月24日開催の第20回定時株主総会の決議により、2020年10月1日から会社名及び英訳名を上記のとおり変更いたしました。

【代表者の役職氏名】 代表取締役 笹野 幸明

【本店の所在の場所】 兵庫県尼崎市西立花町五丁目12番1号

【電話番号】 06（6416）1184（代表）

【事務連絡者氏名】 取締役 管理本部長 飯田 明彦

【最寄りの連絡場所】 兵庫県尼崎市西立花町五丁目12番1号

【電話番号】 06（6416）1184（代表）

【事務連絡者氏名】 取締役 管理本部長 飯田 明彦

【縦覧に供する場所】 株式会社東京証券取引所
（東京都中央区日本橋兜町2番1号）

第一部【企業情報】

第1【企業の概況】

1【主要な経営指標等の推移】

(1) 連結経営指標等

回次		第17期	第18期	第19期	第20期	第21期
決算年月		(2016年9月)	(2017年9月)	(2018年9月)	(2019年9月)	(2020年9月)
売上高	千円	8,520,743	8,102,822	8,105,228	8,239,059	8,824,693
経常利益	千円	295,686	287,078	581,335	576,849	962,408
親会社株主に帰属する当期純利益	千円	231,993	184,243	480,040	714,372	678,443
包括利益	千円	226,528	317,339	534,399	592,712	605,098
純資産額	千円	7,114,505	7,363,417	7,839,864	8,293,305	8,804,351
総資産額	千円	10,794,271	10,731,244	10,775,374	11,702,270	12,084,099
1株当たり純資産額	円	3,120.20	3,222.01	3,415.83	3,631.05	3,845.59
1株当たり当期純利益	円	99.60	81.25	211.24	313.27	296.56
潜在株式調整後1株当たり当期純利益	円	—	—	—	—	—
自己資本比率	%	65.6	68.1	72.1	70.9	72.9
自己資本利益率	%	3.3	2.6	6.4	8.9	7.9
株価収益率	倍	10.6	15.5	6.0	3.8	6.1
営業活動によるキャッシュ・フロー	千円	3,219	1,355,619	△672,656	1,169,869	188,757
投資活動によるキャッシュ・フロー	千円	△94,279	△278,727	△346,181	△560,173	△303,766
財務活動によるキャッシュ・フロー	千円	△886,057	△629,929	△372,391	16,781	△211,454
現金及び現金同等物の期末残高	千円	3,652,677	4,109,411	2,717,959	3,330,102	3,004,386
従業員数 (外、平均臨時雇用者数)	名	338 (79)	324 (85)	320 (85)	314 (97)	331 (83)

(注) 1. 売上高には消費税等は含まれておりません。

2. 潜在株式調整後1株当たり当期純利益については、潜在株式が存在しないため記載しておりません。

(2) 提出会社の経営指標等

回次		第17期	第18期	第19期	第20期	第21期
決算年月		(2016年9月)	(2017年9月)	(2018年9月)	(2019年9月)	(2020年9月)
売上高	千円	7,784,039	7,276,676	7,391,406	7,640,569	8,098,205
経常利益	千円	206,398	148,260	516,936	600,531	962,016
当期純利益	千円	174,394	87,858	444,418	741,906	684,461
資本金	千円	1,739,559	1,739,559	1,739,559	1,739,559	1,739,559
発行済株式総数	株	2,678,600	2,678,600	2,678,600	2,678,600	2,678,600
純資産額	千円	7,002,614	7,147,246	7,561,653	8,099,837	8,591,567
総資産額	千円	10,506,332	10,382,427	10,372,433	11,402,102	11,774,919
1株当たり純資産額	円	3,087.92	3,152.16	3,324.38	3,546.46	3,752.79
1株当たり配当額 (うち1株当たり中間配当額)	円	30 (15)	30 (15)	35 (15)	40 (15)	45 (20)
1株当たり当期純利益	円	74.87	38.75	195.57	325.35	299.19
潜在株式調整後1株当たり 当期純利益	円	—	—	—	—	—
自己資本比率	%	66.7	68.8	72.9	71.0	73.0
自己資本利益率	%	2.5	1.2	6.0	9.5	8.2
株価収益率	倍	14.1	32.6	6.4	3.7	6.0
配当性向	%	40.1	77.4	17.9	12.3	15.0
従業員数 (外、平均臨時雇用者数)	名	307 (56)	306 (57)	302 (44)	301 (30)	311 (28)
株主総利回り (比較指標：配当込み TOPIX)	% %	72.7 (95.8)	88.6 (123.9)	90.8 (137.3)	89.1 (123.1)	132.6 (129.1)
最高株価	円	1,680	1,377	1,415	1,302	1,922
最低株価	円	971	1,049	1,241	1,026	1,177

(注) 1. 売上高には消費税等は含まれておりません。

2. 潜在株式調整後1株当たり当期純利益については、潜在株式が存在しないため記載しておりません。

3. 最高株価及び最低株価は東京証券取引所（市場第二部）におけるものであります。

2 【沿革】

年月	沿革
1999年11月	東亜バルブ株式会社と東亜エンジニアリング株式会社は共同して株式移転により完全親会社を設立することを各社取締役会で決議し覚書を締結致しました。
1999年12月	東亜バルブ株式会社の第82回定時株主総会及び東亜エンジニアリング株式会社の第27回定時株主総会において、株式移転により完全親会社を設立することについて承認を得ました。
2000年3月	東亜バルブ株式会社と東亜エンジニアリング株式会社は共同して株式移転により純粋持株会社、株式会社トウアバルブグループ本社を設立致しました。
2002年10月	東京証券取引所市場第二部並びに大阪証券取引所市場第二部に上場致しました。 シンガポールに同国及び近隣諸国の火力発電所等のプラント及び同国に入港する船舶のバルブメンテナンス事業等を行う目的をもって、トウアバルブオーバーシーズPte. Ltd. を設立致しました。
2006年10月	株式会社高田製鋼所の全事業を吸収分割の方法により会社分割して東亜バルブ株式会社に承継致しました。
2007年8月	株式会社高田製鋼所を清算終了致しました。
2008年10月	東亜バルブ株式会社は東亜エンジニアリング株式会社を吸収合併し、商号を東亜バルブエンジニアリング株式会社と致しました。
2010年4月	当社は連結子会社であった東亜バルブエンジニアリング株式会社を吸収合併し、商号を株式会社トウアバルブグループ本社から東亜バルブエンジニアリング株式会社へと変更致しました。
2014年7月	福島県いわき市に当社と地元企業である株式会社クリエイトとの共同出資により、東亜クリエイト株式会社（現連結子会社）を設立致しました。
2016年2月	株式会社キッツと資本業務提携契約を締結致しました。
2019年10月	福井県大飯郡に当社とトウアサービス株式会社（現連結子会社）との共同出資により、TVEリファインメタル株式会社（現連結子会社）を設立致しました。
2020年8月	TVE GLOBAL ASIA PACIFIC Pte. Ltd.（現連結子会社）は、2020年8月3日付でトウアバルブオーバーシーズPte. Ltd. から商号変更致しました。

2020年10月1日より当社商号を東亜バルブエンジニアリング株式会社から株式会社TVEに変更致しました。

なお、従来まで上場しておりました東亜バルブ株式会社は、株式会社トウアバルブグループ本社の設立に伴い、2000年3月に上場廃止となりました。東亜バルブ株式会社の沿革は以下のとおりであります。

1940年4月	資本金1,000千円をもって、虫印バルブ製造株式会社を設立し、虫印バルブ製作所の事業一切を継承致しました。 同時に従来から製品販売、所要資材の購入等に関し特別の関係のあった旧三菱商事株式会社の資本参加をみました。
1942年9月	社名を東亜バルブ株式会社と改称致しました。
1953年10月	大阪地区店頭で株式を公開致しました。
1961年10月	大阪証券取引所市場第二部に株式を上場致しました。
1971年4月	東京証券取引所市場第二部に株式を上場致しました。
1974年9月	当社納入バルブの定期検査及び修理工事業務を移管する目的をもって、東亜エンジニアリング株式会社を設立致しました。

3 【事業の内容】

当社グループは、当社及び連結子会社4社（国内3社、海外1社）、並びに当社と継続的で緊密な事実上の関係のある関連当事者1社で構成され、各種産業用バルブの開発、製造・販売、そのメンテナンス並びに除染・廃炉事業などを主な事業の内容としております。

当社グループの事業に係る位置付け及びセグメントとの関連は、次のとおりであります。

なお、次の3事業は「第5 経理の状況 1 連結財務諸表等 (1) 連結財務諸表 注記事項」に掲げるセグメントの区分と同一であります。

当連結会計年度より、クリアランス金属のリサイクルを主としたリファインメタル事業を行う目的として子会社であるTVEリファインメタル株式会社を設立し、事業を開始しております。

これに伴い、当該事業を報告セグメントに含まれない事業セグメント「その他」に含めております。

《バルブ事業》

原子力発電所、火力発電所など電力プラント用高温高圧バルブを中心に、船舶用、石油化学プラント用などの各種産業用バルブ等の製造販売及び分解・点検・修理などの保守作業を行っております。また、可搬式の特殊工作機械を使用することにより、敷設配管から取り外すことなく現地において修理・改造を行うことができる工法を開発し、施工しております。

＜関係会社＞

トウアサービス株式会社

TVE GLOBAL ASIA PACIFIC Pte.Ltd.（旧商号：トウアバルブオーバークーズPte.Ltd.）（海外）

＜関連当事者＞

株式会社キッツ

《製鋼事業》

鋳鋼製品の製造販売を行っております。

＜関連当事者＞

株式会社キッツ

《除染事業》

福島県を活動拠点とした放射線除去業務を行っております。

＜関係会社＞

東亜クリエイト株式会社

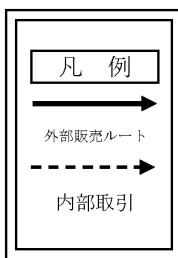
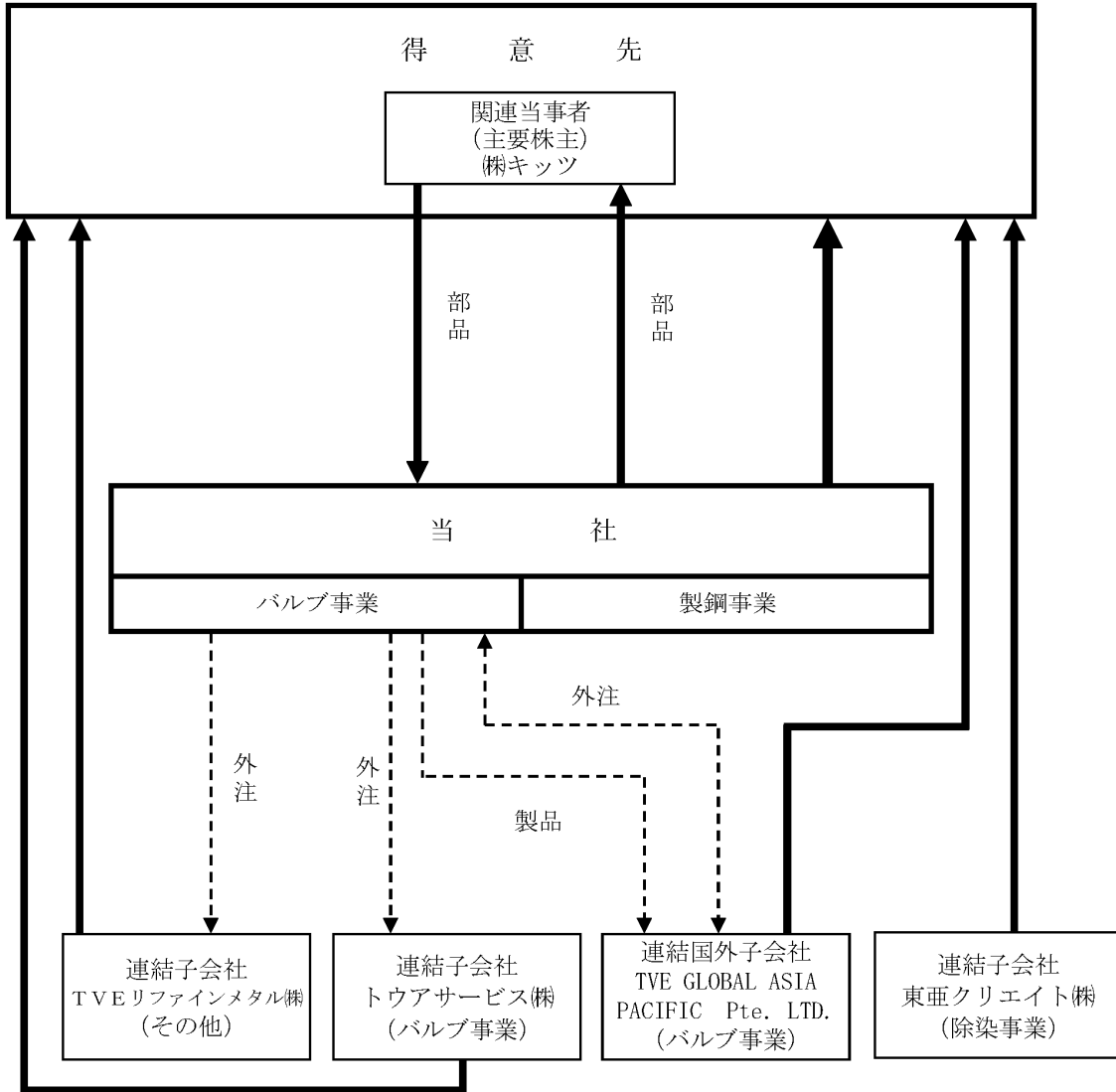
《その他》

クリアランス金属のリサイクルを主としたリファインメタル事業を行っております。

＜関係会社＞

TVEリファインメタル株式会社

事業の系統図は次のとおりであります。



4 【関係会社の状況】

名称	住所	資本金 (百万円)	主要な事業の内容	議決権の所有割合 (%)	関係内容
(連結子会社) トウアサービス㈱	兵庫県尼崎市	64	バルブ	99.9 (0.7)	役員の兼務 有 資金の貸付 社員の受入
(連結子会社) 東亜クリエイト㈱	福島県いわき市	10	除染	99.8	役員の兼務 有 社員の出向
(連結子会社) TVEリファインメ タル㈱	福井県大飯郡	49	その他	99.9 (0.1)	役員の兼務 有 社員の出向
(連結国外子会社) TVE GLOBAL ASIA PACIFIC Pte.Ltd.	シンガポール	千シンガ ポールドル 1,815	バルブ	100.0	役員の兼務 有 資金の貸付 社員の出向

- (注) 1. 「主要な事業の内容」欄には、セグメントの名称を記載しております。
2. 議決権所有割合の()内は、間接所有割合で内数であります。
3. 有価証券届出書又は有価証券報告書を提出している会社はありません。
4. 当連結会計年度より、福井県大飯郡に当社とトウアサービス株式会社(現連結子会社)との共同出資により、TVEリファインメタル株式会社(現連結子会社)を設立致しました。これに伴い、当該事業を報告セグメントに含まれない事業セグメント「その他」に含めております。
5. TVE GLOBAL ASIA PACIFIC Pte.Ltd.は、2020年8月3日付でトウアバルブオーバーシーズPte.Ltd.から商号変更しております。

5 【従業員の状況】

(1) 連結会社の状況

2020年9月30日現在

セグメントの名称	従業員数 (名)
バルブ事業	236 (54)
製鋼事業	59 (2)
除染事業	8 (25)
その他	2 (2)
全社 (共通)	26 (—)
合計	331 (83)

- (注) 1. 従業員数は就業人員（当社グループからグループ外部への出向者を除き、グループ外部から当社グループへの出向者を含んでおります。）であり、嘱託及び臨時従業員数（契約社員、パートタイマーは含み、社外の人材会社からの派遣社員は除いております。）の平均雇用人員は、（ ）内に年間の平均人員を外数で記載しております。
2. 全社（共通）として記載している従業員数は、特定のセグメントに区分できない管理部門に所属しているものであります。
3. 製鋼事業の従業員数は、三重県の伊賀工場に勤務する従業員の員数（管理部門を除く）を記載しております。
4. その他の従業員数は、当連結会計年度より設立したTVEリファインメタル株式会社の従業員の員数（管理部門を除く）を記載しております。

(2) 提出会社の状況

2020年9月30日現在

従業員数 (名)	平均年齢	平均勤続年数	平均年間給与 (円)
311 (28)	43才0ヶ月	16年1ヶ月	6,167,262

セグメントの名称	従業員数 (名)
バルブ事業	226 (26)
製鋼事業	59 (2)
除染事業	— (—)
その他	— (—)
全社 (共通)	26 (—)
合計	311 (28)

- (注) 1. 従業員数は就業人員（連結子会社から当社への出向者を含んでおります。）であり、嘱託及び臨時従業員数（契約社員、パートタイマーは含み、社外の人材会社からの派遣社員は除いております。）の平均雇用人員は、（ ）内に年間の平均人員を外数で記載しております。
2. 平均年間給与は、賞与及び基準外賃金を含んでおります。なお、当社への出向者については当社の負担額により算出しております。
3. 満60才定年退職制度を採用しております。
4. 全社（共通）として記載している従業員数は、特定のセグメントに区分できない管理部門に所属しているものであります。
5. 製鋼事業の従業員数は、三重県の伊賀工場に勤務する従業員の員数（管理部門を除く）を記載しております。

(3) 労働組合の状況

当社グループにおいては、当社は労働組合を結成しており、現在JAMに加盟しております。連結子会社については労働組合を結成しておりません。

なお、労使関係は相互理解を基調に円満な関係で推移しております。

第2【事業の状況】

1【経営方針、経営環境及び対処すべき課題等】

文中の将来に関する事項は、当連結会計年度末現在において当社グループが判断したものであります。

(1) 会社の経営の基本方針

当社グループは、お客様のニーズに沿ったバルブの製造からメンテナンスまで、バルブのトータルライフにわたるさまざまなサービスをスピーディにご提供できる体制作りを弛まぬ努力を続けております。お客様に安心してご使用いただける高品質・高性能なバルブ製品、バルブの予防保全に絶大な力を発揮する診断機器、豊富な知識・経験を持つ技術者によるメンテナンスサービスなどで、全国の原子力発電所（以下、「原発」）、火力発電所をはじめとする各種産業用プラントの安全で安定した運転のお手伝いを通じ、社会に貢献できる企業グループであり続けたいと考えております。当社グループでは、グループ会社共通の社是として、

- 一 信頼される企業として社会の進歩に貢献する
- 一 誠実と融和により健康で活気のある職場をつくる
- 一 経営の刷新と技術の開発につとめる

を掲げ、全役職員のベクトルを同じ方向に揃えグループ力の結集を図ることで、顧客満足度を高め、社会・地域の健全な発展に貢献し、従業員とその家族の生活を守り、株主への適正な利益分配を行い、安定的持続可能な強固で粘りのある企業体質の構築を目指しております。

また、当社グループの主な事業である、バルブ製品の製造、メンテナンスとも、高い技術を持つ地域の協力工場や、厳しい工期と過酷な環境下でのメンテナンス作業に従事される外注技術者など、数多くの関係取引先のご協力を頂戴することで成り立っており、常に感謝の心を忘れることなく、今後も関係取引先との相互発展を基本とした強い信頼・協力関係を構築してまいります。

(2) 目標とする経営指標

当社グループが製造いたしますバルブ製品、鋳鋼製品のほとんどは、お客様の個別仕様書によって受注・生産を行っており、汎用品はごく一部にすぎません。また、バルブメンテナンスサービスにつきましても、一般的な定期保守点検契約のようなものは存在せず、比較的安定的に売上が望まれる原子力発電所の定期検査工事を除いては、基本的にプラントの運転状況とそれに応じた当社の営業活動の成果によるものであります。

よって各年度の売上高は必ずしも安定したものではないため、損益も同様に年度毎の山谷が非常に激しくなる可能性があり、特にバルブ事業は、売上の増減に加えその時々々の工場操業度によっても損益に少なからず変動が発生し、目標とする経営指標として、例えば投下資本に対する利益率等を設定したとしても、以上のような理由から分子となる利益の変動が大きく、安定的且つ継続的な目標指標とすることは困難であると考えております。

このため、年度計画及び中期収益計画の策定に際しては、各年度に予想される市場環境から受注想定案件を積み上げることにより、売上高、営業利益、経常利益を予算化することとしております。

そして個々の案件の受注時には、厳密な貢献利益（限界利益）管理のもと、その時々々の工場操業度と平準化効果、社員・外注作業者の最適要員配置、後年度における期待収益性などを重要な要素として受注判断を行うことで利益管理を実施しており、これにより機会損失を最小化し、獲得利益の最大化を計っております。

(3) 優先的に対処すべき事業上及び財務上の課題

①基本課題

当社グループはこれまで国内原発の原型炉、実証炉、商用炉全てにバルブを納入してまいりました。原発黎明期においては重要な役割を担うバルブは海外製品が導入されていましたが、現在ではPWRと呼ばれる加圧水型原子炉の重要なバルブ・安全弁は当社製品をご採用いただいております。

当社は予てより特定の事業分野、つまり原発への過度の依存をリスクとして認識し開示してまいりました。にもかかわらず全く想定外の事態によりこれが顕在化し、現在の厳しい状況に陥るに至りました。

このように当社グループは日本の原発の発展とともに歩んでまいりました。よって原発関連事業者としての責任と使命は今後も何があっても果たしていくことを基本的な会社方針としております。

東日本大震災の津波による東京電力福島第一原発事故から9年が経過し、これまでに5原発9基で再稼働が実現いたしました。今後、これら原発の定期検査による収益が見込める状況になったと安堵したのも束の間、特定重大事故対処施設工事の遅れや裁判の影響で相次いで停止し、再び、2011年の原発事故直後の状態に近づきつつあって、まだまだ予断を許さない状況が続いています。

それでもここ数期の業績は確実に回復に向かい、当連結会計年度は原発事故の影響が顕在化した2014年9月期以降では、最高の営業利益とすることができました。しかしそれでも原発事故以前の業容には程遠く、より強い収益の柱を得ることが、現在の最重要課題であることには変わりはありません。

また、業容の縮小は、赤字案件の受注により計上を求められる受注損失引当金や、稼働率の変化による業績への影響を相対的に大きくし、利益率を安定させることが難しい状況を招いています。これをいかにコントロールし、安定した業績に繋げていくことも重要な課題となっております。

これら課題解決を目指した『改定・中期経営計画2019』で、既存3事業の強化と新領域への挑戦を主要戦略に掲げ取り組むことを表明しています。

既存事業の柱である原発関連事業は、国の第5次エネルギー基本計画では、原子力はエネルギーミックスの中で20～22%を構成する重要電源と位置付けられ、今後の新たな展開に期待される所ですが、これまで以上に想像力とリスク感応度を高め、決して同じ轍は踏まないことを肝に銘じ事業に取り組んでまいります。新領域では、中国、ASEANを中心に海外事業拡大施策を進め、新拠点を開設するなど早期の業績寄与を目指します。そして、「高品質弁と設備保全で、世界エネルギーインフラの安全安定運転に貢献するグローバルニッチトップへ！」を中期経営計画の目指す姿として、また、本年10月1日の社名変更に伴い「Challenge for the NEXT (TVEの挑戦は次のステージへ)」をコーポレートメッセージに掲げ邁進してまいります。

また、新型コロナウイルス感染症の感染拡大による影響について、当社グループにおいては、当連結会計年度の業績に一定程度影響はあったものの、重要な影響は発生しておりません。

当社グループにおいては、全役職員や取引先への安全確保を第一に掲げるとともに、テレワーク（在宅勤務）や時差出勤など事業運営に極力支障が生じない体制を構築し、対処してまいりました。

引き続き、新型コロナウイルス感染症の感染拡大による事業環境の変化を注視し健康管理や感染予防を徹底するとともに、業務管理方法の改善などを推し進め、コロナ禍の影響を最小限に留めるように取り組んでまいります。

②経営基盤の構造改革

（生産性の改善～TAMES-Project～）

創業100周年は次の100年に向けての通過点です。社会に求められつつ会社を長く継続するためには成長戦略とともに事業基盤の強化が不可欠です。これを具体化する施策として、全社的業務効率改善活動である通称『TAMES-Project』の全社展開を進めています。

活動は、生産現場の効率改善を目指す『TAMES-Factory』、販売管理部門の効率改善を目指す『TAMES-Office』、ITを活用し全社横断的な効率改善の基盤を整備する『TAMES-DX』、人へのアプローチで働き甲斐のある活力あふれる職場をつくる『TAMES-Active』の4つで構成され、それぞれに活動メンバーを選定し推進しています。

完全受注生産型事業においては、効率化を単に生産量だけに求めることはできません。すべての営業循環の中において、時間・規格・技術・場所等々、多くの制約の中で機会損失と闘いながら業務効率向上を実現していく必要があり、これは決して簡単なことではありません。

この課題に全社的に取り組み、経営効率向上を目指すのが本プロジェクトの狙いです。その狙いはコスト低減に留まらず、SDGsの諸課題、働き方改革、ICTの推進、従業員満足経営など、内外の課題を取り込みながら包括的に企業基盤の強化・改善を進めてまいります。

③既存3事業の深化

バルブ事業、メンテナンス事業、製鋼事業の既存3事業の個別課題を攻めの事業戦略により解決し更なる成長を目指します。

バルブ事業とメンテナンス事業は、当社グループが世界に誇る高温高圧弁・安全弁の技術とそれを象徴するTOAのブランドを活かし、グローバルニッチトップ化戦略の中核に位置付けられます。

国内原発、火力発電設備の安全・安定運転と経済性に貢献する新たな提案で顧客満足度を高め、原発廃止措置支援装置の開発、IT技術による状態監視装置やサービスシステムの構築、新たな製品・メンテナンス機器の開発などで成長を目指してまいります。また、同時にコスト面での課題を克服すべくTAMES-Project活動での効率化実現に取り組んでまいります。

製鋼事業は製品の高付加価値化を主要施策として進めてまいります。加工、検査、材質、納期、そして何よりも品質を高めた高付加価値製品の提供により収益性の改善を推進してまいります。

④新領域への挑戦

（グローバルニッチトップへの挑戦）

既存事業の中核であるバルブ事業は、世間的には市場飽和状態にあって、決して魅力的なものとは映らないでしょう。だからこそ当社はグローバルニッチトップを目指す選択になりますが、その中でも新たな事業領域の開発は不可欠な戦略です。

当社グループはプラントメーカーの建設する電力プラントを通じ、世界中、特に東南アジア圏に非常に多くのバルブを納入し高い評価を得てまいりました。この商品力とブランド力を活かしながら、資本業務提携を行っている株式会社キッツとの連携によりグローバル展開を目指してまいります。

発電所では非常に多くのバルブが使用されていますが、高温高圧弁・安全弁は数多あるバルブのごく一部に過ぎません。しかし調達価格で見たときその割合は決して小さなものではなく、ここに勝機があると考えています。世界にはまだまだ数多の浸透していないサービスがあって、バルブメンテナンスもそのひとつで、決して小さくない未開拓の市場があると考えており、さらにニッチな分野での商品性やサービス力を徹底的に高めることで、ニッチな市場での競争優位を確立してまいります。

(廃炉事業)

長期的な事業拡大戦略の一翼を担うのが廃炉事業への進出と考えております。これはバルブ事業の集大成ともいえる事業で、バルブのトータルライフに亘りワン・ストップでサービスを提供するという、当社グループの目指す姿に通ずるものです。

具体的な事業のイメージは、廃止された発電所から回収したバルブをリサイクルして新しいバルブ等にして新しい発電所に戻すという非常にシンプルなものですが、そこに至る道程は困難の連続と想定しております。

この実現のため、当連結会計年度に子会社を新たに設立し、早速、資源エネルギー庁より「原子力産業基盤強化事業補助金」に係る間接補助事業者の採択を得たところです。実際に原発からリサイクル対象の金属が排出されるのは数年先のことで、事業化・業績貢献には今しばらく時間を要しますが、早期の参入表明で先駆者としての優位性を築き、今後の事業本格化に備えてまいります。

(デジタル技術の活用)

ビッグデータやセンシング技術などが事業に取り込まれ、多方面で新たなマーケットの創出、ビジネスモデルの開発につながっています。さらにはコンピューターを離れ、何かをインターネットにつなぐことで新たなビジネスを広げるIoT技術も既に当たり前になっております。

当社グループにおいても、長年のバルブ製造やメンテナンスの過程で蓄積した、バルブの検査データや経験、知見、そして電力用高温高圧バルブメーカーとしてのブランド力や市場シェアを活かし、「情報」や「ノウハウ」を商品とした事業展開の可能性についてさらに深く掘り下げる必要があると考えております。

例えばそのひとつとして、バルブや鋳物に関する技術情報の積極的な公開や、特殊設備の異業種での活用可能性を探るなど、新たな市場・顧客を求めデジタルマーケティングに取り組んでおります。また、これまでは狭い市場と決めつけることで、あまり縁のなかった、各種産業機器等の展示会に積極的に出展し、新たな分野への進出の足掛かりを探る活動を進めております。

やれることは何でもやってみる“TAMES＝「試す」”の精神で取り組み、これをひとつのきっかけに新たなバルブソリューションを展開してまいります。

2【事業等のリスク】

有価証券報告書に記載した事業の状況、経理の状況等に関する事項のうち、経営者が連結会社の財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況に重要な影響を与える可能性があるとして認識している主要なリスクは、以下のとおりであります。

なお、文中の将来に関する事項は、当連結会計年度末現在において当社グループが判断したものであります。

(1) 電力市場の状況

当社グループのバルブ事業の売上は、原子力・火力発電所に代表される国内電力市場向けの製品供給・メンテナンス提供が重要な割合を占めています。今後も電力市場に強く依存した事業運営は不可避であり、どのような要因であれ電力市場に大きな変化が生じることで、当社グループの業績に大きな影響が及ぶ可能性が常にあるといえます。

その要因は、自然災害や事故等による発電所の運転停止、技術革新や電力自由化などによる発電事業形態の変化、地球温暖化問題に由来する従来電力市場分野の縮小、電力業界を取り巻くサプライヤーの動向などさまざまなものが想定されます。

例えば、2011年に発生した東日本大震災による福島原発事故では、事故後、国内すべての原発が停止し、数年に亘り再稼働できない状況となりました。当社グループはこの事象により、一時は30億円以上の減収と10億円を越える損失を計上するに至り、現時点においても収益規模は従前の8割程度で推移しており、未だ震災前の水準には遠く達していない状態が続いています。

現時点においても国内原発の多くは停止状態にあつてその要因は様々です。国内火力発電所においては重大な支障は存在していませんが、温室効果ガス削減の問題から、将来の市場は極めて不透明な状況にあつて、世界的にも厳しい状況に向かっているとの認識です。

いずれの事象も当社グループの事業運営に非常に大きな影響を与える可能性を有するため、適宜の状況分析と状況に応じた適切な経営リソース配分を進めることでリスクの最少化に努めてまいりますが、変化の大きさや速度、対応の状況如何によっては重大な業績への影響を回避できない可能性があります。

(2) 大規模自然災害や事故などによる工場操業停止等

当社グループの製造拠点は、バルブの製造は兵庫県尼崎市の本社工場、バルブ用主要素材である鋳鋼部品の製造は三重県伊賀市の伊賀工場、以上の国内2か所となっております。これら生産拠点において地震、台風、洪水、高潮などによる災害や火災事故に見舞われた場合、業績等に非常に大きな影響を受ける可能性があります。特に本社工場の多くの建屋は1960年代の建築であるため、耐震性や耐火性にリスクを有しており、加えて所在地が南海トラフ大地震の被災想定範囲に含まれることから、一層危機感を強めているところです。

また、この国内の製造2拠点は、一方の緊急時に他方が機能・役割を代替する関係にはありません。よって一方でも操業停止に至るような事態となった場合には、機会損失の発生や納期遅延など当社グループの業績に重大な影響をもたらす可能性があります。

実際、本社工場は1995年1月に発生した阪神大震災で被災しました。工場自体は周辺地域の被害状況に比して小さなものに留まりましたが、従業員の多くが被災し、公共交通機関も途絶したため長期に亘り工場稼働に支障が生じることとなり、相応の業績影響が発生しました。近い将来に発生が予想される南海トラフ大地震等に対しどれほどの対策が可能かは現実問題として甚だ疑問ではありますが、取れるBCP対策はしっかりと着実に進めていくこととしております。

(3) 本社工場老朽化による影響

『(2) 大規模自然災害や事故などによる工場操業停止等』で述べたとおり、本社工場の多くは建築後60年前後を経過しており、老朽化の進行でBCP上の観点からも重大な課題を抱えています。

このため、現在いろいろの対策シミュレーションを実施しており、数年内には最終結論を得、何らかの施策に着手する必要があるとの認識であります。

現在の本社工場は、大阪駅から電車で15分程度の尼崎市市内住宅地に敷地面積約28,000㎡の規模で所在し、半数弱の本社工場勤務従業員が比較的近所に居住し、徒歩若しくは自転車・バイクで通勤しています。本社工場が担うバルブ製造事業は、経験を積んだ技術者により労働集約的に行われる工程が大半を占めるため、こういった従業員の離散につながるような遠隔地への移転は事業の継続性から非現実的であると同時に、地価や物件の問題から現在地近辺では容易に移転先を選定できる状況にありません。

しかし、このままではBCP上のリスクは小さくないとの判断のもと、今後の選択する施策によっては、その実施に際し生じる工場操業停止問題や、必要な資金調達上の問題などで少なからず業績に影響が生じる可能性があります。

(4) 製品、メンテナンス上の瑕疵などに起因する事故等の品質保証問題発生による影響

当社グループの製品は、原発をはじめとした各種産業用プラントの重要部位で採用されているため、その製品の製造上の欠陥や当社グループが行ったメンテナンスの不具合等により動作不良等が生じ本来の機能を果たせない場合、重大な事故や損害賠償問題につながる可能性が有って、それが当社グループの業績に重大な影響を及ぼすリスクがあります。

製品やサービスに品質上の問題が生じる原因は実に様々です。最近では、少子高齢化による労働人口の減少で従業員の採用が思うように進まず、その結果として技術伝承に支障が生じるリスクや、当社グループの事業を支える協力業者での後継者不在による廃業などで、これまでの品質の高いサプライチェーンが途絶するリスクも浮かんできています。

品質は、従業員の一人一人に品質意識の徹底を図ることで品質が担保される基盤をつくりあげ、そこに作業手順の明確化、検査・試験の徹底、品質保証システムの運用を組み合わせることにより高いレベルを維持できるものと考えております。今後も更なる体制強化により、リスクが顕在化することのないよう努めてまいります。

(5) コンピュータシステム停止による影響

当社は完全受注生産型のビジネスを行っていることから、基幹業務系のシステムにはオリジナルの情報処理システムを採用しています。

その現状やリスク対策の詳細について述べることは、逆に新たなリスクを招く可能性があることから控えますが、ネットワーク環境に由来するシステム運用支障や、悪意をもったウイルス攻撃などによるデータ喪失・破壊、或いはデータが利用不能状態に陥るなどのリスクは一般論として存在していると考えます。

また、各事業部門での日常作業においては、クラウドシステムであるBOXに電子データを保管し、場所と時間の制約からの解放と、属人的管理からの脱却を目指すとともに、貴重な事業リソースである電子データの保全を図っています。

当社グループでは、情報流出対策も含め、営業情報の保全のため、対策ソフトの活用、利用者の意識改善、システム運用における内部統制の運用などで万全を期しているつもりですが、一般に言われるとおり、完全にこのリスクを排除することは困難であると同時に、コストと便益の関係から、決して無尽蔵の対策を行うことが最善ではないとの認識です。よってここに一定のリスクが存在することは排除し難く、万一、想定以上の状況が生じた場合には重大な事業影響が生じる可能性があります。

(6) 新型コロナウイルス等、感染症による影響

2020年春以降、国内で顕在化したコロナ禍により社会は重大なダメージを受けることとなり、その影響は今なお継続している状況です。

当社グループにおいては、早期の感染拡大対策を全社的に実施することで、重大な事業運営上の影響を受けることなくここまでできております。しかし、今後もリスク環境は継続し、また沈静後においても同様の事態が再発する可能性があることから、その際に従業員間の感染拡大によるクラスター化や濃厚接触者が多量に発生するなど事業運営に重大な支障が生じる可能性があります。

また、当社グループの取引先が同様の状況に陥ることで、サプライチェーンの途絶、予定した工事の中止・中断・延期、取引先の生産計画見直しによる受注減少など多くの影響が想定されるところです。幸いに現時点においては、これらが重大な事業影響につながる状況には至っておりませんが、今後、大きく事業計画の変更にも迫られる可能性も決してゼロではありません。

今回の新型コロナウイルスに限らず、インフルエンザ、ノロウイルス等、大規模な感染拡大の恐れは常にあります。今後も先手の対策でリスクの顕在化を阻止し、事業影響の最少化を図ってまいります。防疫の限界から業績に重大な影響を与えるリスクが顕在化する可能性があります。

(7) 労働災害による影響

製造現場、メンテナンス現場では労働災害と常に背中合わせですが、安全に優先する何物も存在しないとの意識をもって、「ご安全に」を日々の挨拶とし全社グループを挙げ無災害に取り組んでいます。

しかし、無災害を継続することは非常に難しく、現にここ1年でも数件の休業災害が発生しています。いずれも少しの不注意や作業上の不手際の問題であって、原因が単純・簡単であるが故になかなか根絶には至らないのが現実です。

労働災害の発生は大切な従業員の苦痛につながることはもちろん、労働効率の低下や作業進捗の遅れなど多くの影響をもたらすこととなりますが、その災害の内容によっては、顧客への営業活動に際して指名停止を受ける可能性もあるなど、そういった事態に陥った場合の業績影響は重要なものとなる可能性があります。

労働災害は仕事の仕組みと、個人への教育と、人のつながりで防ぐ必要があります。個々の安全意識と集団の安全意識を徹底的に高め、その上でリソースを適切に投入することで仕組みをしっかりと構築し、安全第一の職場を作り上げ、リスクの顕在化を阻止してまいります。

(8) コンプライアンス違反による影響

当社グループは会社法、金融商品取引法、労働法、税法等の各種法令はもとより、製造するバルブに関する各種規格ほか、取引先との契約に基づく合意等も含め、非常に多くの規制への適合が求められるため、それら規則が遵守されているかを管理するための体制を構築しています。

具体的には監査等委員、会計監査人、内部監査室、品質保証統括室監査などによる組織的な監査に加え、各事業部門において業務手順を「見える化」することでリスクの所在の明確化と対策を行う内部統制システムの運用でコンプライアンスを担保するとともに、万一コンプライアンスが損なわれるようなことがあった場合においても、適宜に不適切な事象を発見することで、被害・影響の最少化に努めております。

しかし、コンプライアンスの概念・範囲は極めて多岐・広範に亘ることから、致命的な状況に至らないことを管理体制の基本とせざるを得ず、完全にリスクを排除することは困難であると考えられます。

当社グループは電力事業という極めて社会性の高い分野で、且つ原発用という完全な品質を求められるバルブ製品・サービスの提供を生業とするため、コンプライアンス問題で顧客・社会の信頼を損ねることは企業の存在そのものを否定される可能性にもつながりかねないことを強く認識し、日々コンプライアンス活動に取り組んでおります。

(9) 法的規制、各種許認可等を維持できない場合の影響

当社グループの一部事業は、建設業法に基づく一般建設業、特定建設業の許可を得ております。そしてこの許可を維持するため、或いは許可に基づき具体的な工事を施行するためには一定の人的要件を常に充足しておく必要がありますが、今後、何等かの事由により、その要件を充足できなくなった場合には当社グループの業績に影響を与える可能性があります。

3【経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析】

(1) 経営成績等の状況の概要

当連結会計年度における当社グループの財政状態、経営成績及びキャッシュ・フロー（以下「経営成績等」という。）の状況の概要は次のとおりであります。

① 財政状態及び経営成績の状況

当連結会計年度（2019年10月1日から2020年9月30日まで）におけるわが国経済は、中国経済や英国のEU離脱の行方など、海外経済の不確実性からくる影響に留意しつつも、企業業績と雇用環境の改善傾向を背景に、緩やかな回復基調の中で推移していましたが、新型コロナウイルス感染症の影響で様相は一転し経済は落ち込みました。経済活動は再開されましたが、当面、内外経済の下振れリスクに十分な注意が必要な状況となっております。

当社グループは、原子力・火力発電所用バルブの製造・メンテナンスを主としたバルブ事業を中核に、鋳鋼製品の製造事業と福島地区での復興・除染事業を展開しております。

東日本大震災の津波による東京電力福島第一原子力発電所事故以降、バルブ事業の主要顧客である原子力発電所（以下、「原発」）向けビジネスが極めて厳しい状況にあります。さらに、地球温暖化問題から、石炭火力発電所にも不確実性が高まりつつあり、将来のマーケット動向の見極めに大変苦慮しているところです。

このような中、当連結会計年度におきましては、バルブ事業では、関西電力大飯原発4号機、同高浜原発4号機、九州電力玄海原発4号機、同川内原発1・2号機で定期検査工事が完了し売上計上したほか、関西電力美浜原発、四国電力伊方原発などでその他の設備工事売上を計上するなど、原発関連売上も多く、前連結会計年度を上回る売上となりました。

バルブ以外の事業では、製鋼事業は主要顧客が国内調達へ転換した影響で売上は増加しました。除染事業も地域除染関連工事の受注拡大により前連結会計年度を上回る売上となりました。

これらの結果、当連結会計年度の売上高は88億24百万円（前年同期比7.1%増）で前連結会計年度に対し増収となりました。報告セグメント別ではバルブ事業が70億37百万円（同5.0%増）、製鋼事業が11億64百万円（同10.6%増）、除染事業が5億96百万円（同21.3%増）となりました。

表：報告セグメント内の種類別売上高

報告セグメント	種類別の売上高	前連結会計年度 (百万円)	当連結会計年度 (百万円)	前年同期比 (%)
バルブ事業	バルブ（新製弁）	2,907	2,414	△16.9
	バルブ用取替補修部品	1,020	1,314	28.7
	原子力発電所定期検査工事	894	1,031	15.3
	その他メンテナンス等の役務提供	1,879	2,276	21.1
	小計	6,702	7,037	5.0
製鋼事業	鋳鋼製品	1,052	1,164	10.6
除染事業	地域除染等	491	596	21.3
その他	リファインメタル事業	—	32	—
消去又は全社		△7	△5	—
	合計	8,239	8,824	7.1

採算面においては、売上高は前連結会計年度に対し増加となったほか、バルブ事業で採算の良い原発向けが堅調であったことから収益力は向上し、受注損失引当金の洗い替えによる戻入益が発生したことに加え、メンテナンス工事に係る仕掛品が増加した結果、営業利益8億85百万円（前年同期比70.1%増）、経常利益9億62百万円（同66.8%増）と大幅な増益となりました。

親会社株主に帰属する当期純利益6億78百万円（前年同期比5.0%減）と微減となりましたが、これは前連結会計年度において、東日本大震災以降の業績不安定化に伴い、繰延税金資産の全額に対し評価性引当額を引き当ててきたものを、課税所得の計上について一定の確実性を認めることができる状況となったため、前連結会計年度より繰延税金資産の一部を計上したことによる影響であります。

報告セグメント別では、バルブ事業については、定期検査工事を中心に、原発関連売上高5割超を占めたことから、セグメント利益は18億58百万円（前年同期比20.0%増）となりました。製鋼事業については、増収の効果もあり、セグメント利益は1億48百万円の赤字（前年同期は2億12百万円の赤字）、除染事業については、地域除染関連工事の受注拡大の効果から、セグメント利益は26百万円（前年同期は49百万円の赤字）となりました。

当連結会計年度の2019年10月1日に、廃炉関連事業への本格参入を目指し、TVEリファインメタル株式会社を子会社として設立しました。現時点では、情報収集を中心に活動しており、同社の業績は、報告セグメントに含まれない事業セグメントである「その他」に含めており、当連結会計年度では売上高32百万円、セグメント利益28百万円の赤字（前年同期は8百万円の赤字）となりました。

新型コロナウイルス感染症の感染拡大による業績影響については、主にメンテナンス工事において、影響が出てくるものと想定されます。事業の性質上、工事そのものが無くなるということはほぼありませんが、工期が変更されることで売上が来期に時期ずれする、或いは、一部の顧客において、感染拡大阻止のため工事現場への入場に規制・制約が設けられており、これにより工事効率が低下し採算性が悪化するなどで業績にマイナス影響が出る可能性があります。

② キャッシュ・フローの状況

当連結会計年度における現金及び現金同等物の期末残高は30億4百万円となり、前連結会計年度末に比して3億25百万円減少しました。この内訳は次のとおりであります。

（営業活動によるキャッシュ・フロー）

減価償却を3億8百万円実施した上で税金等調整前当期純利益を9億49百万円計上したところに、たな卸資産で7億51百万円の増加、法人税等の支払額で2億40百万円の計上もありましたが、キャッシュ・インの要因が上回ったことから1億88百万円のキャッシュ・イン（前年同期は11億69百万円のキャッシュ・イン）となりました。

（投資活動によるキャッシュ・フロー）

有形固定資産の取得を中心に3億3百万円のキャッシュ・アウト（前年同期は5億60百万円のキャッシュ・アウト）となりました。

（財務活動によるキャッシュ・フロー）

前連結会計年度に係る期末配当及び当連結会計年度の中間配当の実施、長期借入金の返済などにより2億11百万円のキャッシュ・アウト（前年同期は16百万円のキャッシュ・イン）となりました。

③ 生産、受注及び販売の実績

(1) 生産実績

当連結会計年度における生産実績をセグメントごとに示すと、次のとおりであります。

セグメントの名称	当連結会計年度 (自 2019年10月1日 至 2020年9月30日)	前年同期比 (%)
バルブ事業 (千円)	2,408,690	△3.6
製鋼事業 (千円)	1,232,776	△2.4
合計 (千円)	3,641,466	△3.2

(注) 1. 金額は製造原価によっております。

2. 金額には消費税等は含まれておりません。

3. バルブ事業のメンテナンス等、除染事業及びその他については、事業の性格上生産実績の概念は馴染みませんので金額及び前年同期比を記載しておりません。

(2) 受注実績

当連結会計年度における受注実績をセグメントごとに示すと、次のとおりであります。

セグメントの名称	受注高 (千円)	前年同期比 (%)	受注残高 (千円)	前年同期比 (%)
バルブ事業	8,674,549	5.7	7,385,599	28.5
製鋼事業	1,021,143	△6.4	384,436	△27.1
除染事業	690,133	35.1	191,772	95.5
その他	142,593	—	114,527	—
合計	10,528,418	7.3	8,076,335	26.7

(注) 1. 金額は販売価格によっております。

2. 金額には消費税等は含まれておりません。

(3) 販売実績

当連結会計年度における販売実績をセグメントごとに示すと、次のとおりであります。

セグメントの名称	当連結会計年度 (自 2019年10月1日 至 2020年9月30日)	前年同期比 (%)
バルブ事業 (千円)	7,037,387	5.0
製鋼事業 (千円)	1,164,245	10.6
除染事業 (千円)	596,444	21.3
その他 (千円)	32,365	—
消去又は全社 (千円)	△5,750	—
合計 (千円)	8,824,693	7.1

(注) 1. 金額には消費税等は含まれておりません。

2. 主な相手先別の販売実績及び当該販売実績の総販売実績に対する割合は、次のとおりであります。

相手先別	前連結会計年度 (自 2018年10月1日 至 2019年9月30日)		当連結会計年度 (自 2019年10月1日 至 2020年9月30日)	
	金額 (千円)	割合 (%)	金額 (千円)	割合 (%)
三菱商事パワーシステムズ株式会社	2,774,909	33.7	3,110,366	35.2
西華産業株式会社	781,895	9.5	899,741	10.2
三菱商事株式会社	1,177,111	14.3	528,758	6.0

(2) 経営者の視点による経営成績等の状況に関する分析・検討内容

経営者の視点による当社グループの経営成績等の状況に関する認識及び分析・検討内容は次のとおりであります。

なお、文中の将来に関する事項は、当連結会計年度末現在において判断したものであります。

① 財政状態の分析

(資産の部)

当連結会計年度末における総資産は120億84百万円となり、前連結会計年度末に比べ3億81百万円増加（前年同期比3.3%増）いたしました。

うち流動資産では、仕掛品が7億64百万円、有価証券が12億円それぞれ増加となりましたが、一方で一部当座の余剰資金の短期運用等により現金及び預金が15億25百万円減少したこと等により、前連結会計年度末に比べ4億60百万円増加（前年同期比5.2%増）となりました。

また、固定資産では投資有価証券の時価評価差額が1億39百万円減少したこと等により、前連結会計年度末に比べ78百万円減少（前年同期比2.8%減）し、27億82百万円となりました。

(負債の部)

当連結会計年度末の負債合計は32億79百万円となり、前連結会計年度末に比べ1億29百万円減少（前年同期比3.8%減）いたしました。

うち流動負債では、主に支払手形及び買掛金が87百万円、受注損失引当金が1億15百万円それぞれ減少したこと等により、前連結会計年度末に比べ8百万円減少（前年同期比0.4%減）となりました。

また、固定負債では長期借入金が60百万円、退職給付に係る負債が52百万円がそれぞれ減少したこと等により前連結会計年度末に比べ1億20百万円減少（前年同期比11.4%減）となりました。

(純資産の部)

当連結会計年度末の純資産は88億4百万円となり、前連結会計年度末と比べ5億11百万円増加（前年同期比6.2%増）いたしました。これは主にその他有価証券評価差額金が98百万円減少しましたが、利益剰余金が5億75百万円増加したこと等によるものであります。

② 経営成績の分析

(売上高)

当連結会計年度の売上高は88億24百万円となり、前連結会計年度と比べ5億85百万円増加（前年同期比7.1%増）いたしました。

当連結会計年度では、バルブ事業において前連結会計年度に比べバルブ新製品が4億92百万円の減少となりましたが、その他の原子力発電所の定検工事、取替補修部品及びその他メンテナンス等の役務を合わせて8億27百万円の増加となり、また製鋼事業、除染事業においても同様に増加したことで前連結会計年度の売上高を上回ることができました。

(営業利益)

当連結会計年度の営業利益は8億85百万円となり、前連結会計年度と比べ3億64百万円増加（前年同期比70.1%増）いたしました。

当連結会計年度では、バルブ事業での原子力定期検査工事5基あり、また下半期での原子力発電所の安全対策工事等による稼働率も高く仕掛品が増加したことに加え、受注損失引当金の戻入益も発生したこと等から、前連結会計年度を上回る営業利益を確保することができました。

(親会社株主に帰属する当期純利益)

当連結会計年度の親会社株主に帰属する当期純利益は、上記の営業利益に営業外損益の純額76百万円を加算し、これに特別損益の純額12百万円を減算し、次に法人税、住民税及び事業税と法人税等調整額及び非支配株主に帰属する当期純利益を加減算した結果、6億78百万円（前年同期5.0%減）となりました。

③ キャッシュ・フローの状況の分析・検討内容並びに資本の財源及び資金の流動性に係る情報

当社グループの資本の財源は、自己資金及び金融機関からの借入によっており、金融機関からの借入金については適宜に長期・短期の借入金により資金調達を行うほか、取引金融機関と特定融資枠契約、コミットメントライン契約を締結することで必要な財源の確保を図っております。

資金の流動性は、営業活動によるキャッシュ・フローを確実に獲得することを基本に、適正な投資活動と財務活動を組み合わせることで十分な流動性の確保と財務体質の健全性を維持するよう努めております。

当社グループの事業は主に完全受注生産型であることから、売上時期の偏重や製品の仕掛期間長期化による影響が、営業活動によるキャッシュ・フローの変動につながりがちであることから、これら事象について、キャッシュ・フローへの影響を十分に考慮した業務運営を社内に指示・徹底しております。

またこれら事象へ対応する目的も含め、取引金融機関とコミットメントライン契約を締結し、機動的な資金調達体制を維持するとともに、運転資金の効率的な運用を図っております。

④ 重要な会計上の見積り及び当該見積りに用いた仮定

当社グループの連結財務諸表は、わが国において一般に公正妥当と認められている会計基準に基づき作成しております。この連結財務諸表を作成するにあたって、資産、負債、収益及び費用の報告額に影響を及ぼす見積り及び仮定を用いておりますが、これらの見積り及び仮定に基づく数値は実際の結果と異なる可能性があります。詳細については、「第5 経理の状況 1 (1) 連結財務諸表 注記事項 (連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項)」に記載しております。

なお、新型コロナウイルス感染症の感染拡大による会計上の見積りへの影響については、「第5 経理の状況 (1) 連結財務諸表 注記事項 (追加情報)」に記載しております。

4 【経営上の重要な契約等】

(1) 業務提携受入契約

契約会社名	相手先	国名	契約品目	契約内容	契約期間
東亜バルブエンジニアリング(株)	アルカ・レーグラー社	ドイツ	コントロール弁	日本国内における販売・メンテナンス権の許諾、共同開発の締結	2020年9月1日から 2021年8月31日まで
東亜バルブエンジニアリング(株)	(有)テクノプランツ	日本	液体圧装置	日本国内における製造・販売に関する特許実施権の許諾	2011年2月25日から特許の存続期間まで

(2) 業務提携援助契約

相手方の名称	国名	契約品目	契約締結日	契約内容	契約期間
HEハルビン・パワー・プラント・バルブ社	中国	抽気逆止弁 鍛造玉型弁	2010年7月28日	技術的知識、情報及びノウハウの提供	2010年7月28日から22年間若しくは「製品」の製造開始年月日から20年間のどちらか早く到達した日まで
HEハルビン・パワー・プラント・バルブ社	中国	湿分分離加熱器 逃し弁	2013年4月18日	技術的知識、情報及びノウハウの提供	2013年4月18日から23年間若しくは「製品」の製造開始年月日から20年間のどちらか早く到達した日まで
HEハルビン・パワー・プラント・バルブ社	中国	原子力発電所用 抽気逆止弁	2013年4月18日	技術的知識、情報及びノウハウの提供	2013年4月18日から22年間若しくは「製品」の製造開始年月日から20年間のどちらか早く到達した日まで

(3) 資本業務提携契約

契約会社名	契約締結日	契約内容
株式会社キッツ	2016年2月12日	①調達協力：相互の国内外調達先を活用し、材料の調達に協力する。 ②技術協力：相互に技術情報を提供し、必要に応じて共同開発をする。 ③生産協力：相互の販売品、もしくは共同開発品を、相互の生産拠点を活用し、最適な生産手段を構築する。 ④販売協力：「石油及びガス分野」並びに「電力分野」において、相互の製品、もしくは共同開発品を、最適な手段により販売する。 ⑤サービス協力：相互のメンテナンス機能を活用し、最適なサービス体制を構築する。

(4) コミットメントライン契約

契約会社名	契約締結日	契約内容
株式会社三菱UFJ銀行	2018年3月30日	総額5億円のコミットメントライン契約による借入枠の設定

5 【研究開発活動】

当社グループの研究開発活動は、顧客との対面活動を含め多角的視野を持ち深層追究する事で、当社グループの目指すバルブ総合エンジニアリングサービスの高度化に繋げていくことを目標にしています。各部門間の情報連携を高め、相乗効果を発揮させると同時に、顧客ニーズの発掘と把握に努め、継続的に顧客ニーズの抽出と新商品アイデアに対する可能性評価を行い、研究開発活動を進めています。

開発時に生じる問題点を研究開発者の相互啓発により解決すると同時に、そのプロセスから派生した技術を生かし、新たな研究開発テーマが生まれるという好循環による発展を目指しています。

当社グループの研究開発体制は、大きくは二つに分かれ、各部門で日常的に発生する固有の問題点、例えば、生産効率の改善、新しいメンテナンス方法の開発等はそれぞれの部門主体で実施し、課題や研究資源が新商品や新事業に対し直接繋がる様な活動については技術部が主体となって実施しています。

なお、これらの成果は、主体となる部門から必要に応じ関連各部門にフィードバックし、研究開発の効率が低下しないようフォローできる体制としています。

更に、研究開発が大きく現実の課題と乖離することがない様に或いは喫緊の課題に適切な優先順位をつけてタイムリーに確実に対応していくため、経営と研究開発活動の連携を常に意識し、経営から出された課題・問題点を迅速且つ確実に解決・具体化出来る様に選択と集中による資源の有効活用を意識しながら取り組んでいます。

以上の結果、当連結会計年度における研究開発費の総額は、123,384千円となっております。

各セグメントにおける主な研究開発の内容は、次のとおりであります。

(バルブ事業)

1. 株式会社キッツとのコラボレーションによるコストダウン弁の開発
2. 弁座交換装置の開発
3. 配管内面プラズマ切断装置の開発
4. 安全弁作動試験用油圧ジャッキ（他社製）生産中止に伴う代替装置の開発
5. 配管内研磨機の開発
6. 遠隔操作弁の開発
7. 手動弁取付け用デジタル開度計の開発

これらバルブ事業に係る研究開発費は、123,384千円であります。

第3【設備の状況】

1【設備投資等の概要】

当連結会計年度において実施した設備投資の総額は367,940千円であります。セグメントごとの内訳はバルブ事業ではシステムバンドソーや自動溶接機の取得、また、バルブ事業・製鋼事業共通として、基幹システムの高度化などを実施しております。

なお、当連結会計年度において重要な設備の除却、売却等はありません。

2【主要な設備の状況】

(1) 提出会社

2020年9月30日現在

事業所名 (所在地)	セグメントの 名称	設備の内容	帳簿価額（単位：千円）						従業員数 (名)
			建物及 び構築 物	機械装 置及び 運搬具	土地 (面積㎡)	リース 資産	その他	合計	
本社、工場及び倉庫 (兵庫県尼崎市)	バルブ	生産設備、 メンテナンス 管理施設等	426,224	319,937	62,871 (28,132.3)	97,139	30,164	936,337	185
製鋼製造部 (三重県伊賀市)	バルブ 製鋼	生産設備等	55,066	118,371	198,491 (24,808.2)	13,769	14,604	400,303	59
玄海出張所等 (佐賀県東松浦郡玄海町 他)	バルブ	メンテナンス 事務所及び 倉庫等	4,488	25,719	— (697.8)	20,529	3,128	53,865	41

(注) 帳簿価額のうち「その他」は、工具、器具及び備品の合計額であります。なお、金額には消費税等を含んでおりません。

(2) 国内子会社

主要なものはないため、記載を省略しております。

(3) 在外子会社

主要なものはないため、記載を省略しております。

3【設備の新設、除却等の計画】

当社グループの設備投資については、景気予測、業界動向、投資効率等を総合的に勘案して、設備計画を連結会社各社が個別に策定し、重要な計画等に際しては、当社が中心となりグループとしての最適化等を中心に調整を図っております。なお、当連結会計年度末における重要な設備の新設、改修計画及び除却等の計画は次のとおりであります。

(1) 重要な設備の改修

会社名 事業所名 (所在地)	セグメント の名称	設備の内容	投資予定金額		資金調達 方法	着手及び完了予定年月		完成後の増加能力
			総額 (千円)	既支払額 (千円)		着手	完了	
当社 製鋼製造部 (三重県伊賀市)	バルブ 製鋼	特別高圧受電 設備の更新	322,116	—	自己資金	2020.11	2022.9	特別高圧受電設備の老朽化に伴う更新により漏電等災害発生リスクを排除するものであるため生産能力の増加はありません。

(注) 上記の金額には消費税等は含まれておりません。

(2) 重要な設備の除却等

該当事項はありません。

第4【提出会社の状況】

1【株式等の状況】

(1)【株式の総数等】

①【株式の総数】

種類	発行可能株式総数(株)
普通株式	10,040,000
計	10,040,000

②【発行済株式】

種類	事業年度末現在発行数 (株) (2020年9月30日)	提出日現在発行数 (株) (2020年12月24日)	上場金融商品取引所名 又は登録認可金融商品 取引業協会名	内容
普通株式	2,678,600	2,678,600	東京証券取引所 市場第二部	完全議決権株式であり、権利 内容に何ら限定のない当社にお ける標準となる株式であり、単 元株式数は100株であります。
計	2,678,600	2,678,600	—	—

(2)【新株予約権等の状況】

①【ストックオプション制度の内容】

該当事項はありません。

②【ライツプランの内容】

該当事項はありません。

③【その他の新株予約権等の状況】

該当事項はありません。

(3)【行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の行使状況等】

該当事項はありません。

(4)【発行済株式総数、資本金等の推移】

年月日	発行済株式総 数増減数 (株)	発行済株式総 数残高(株)	資本金増減額 (千円)	資本金残高 (千円)	資本準備金増 減額(千円)	資本準備金残 高(千円)
2009年1月4日 (注)	2,651,814	2,678,600	—	1,739,559	—	772,059

(注) 株式分割(1:100)によるものであります。

(5) 【所有者別状況】

2020年9月30日現在

区分	株式の状況（1単元の株式数100株）								単元未満株式の状況（株）
	政府及び地方公共団体	金融機関	金融商品取引業者	その他の法人	外国法人等		個人その他	計	
					個人以外	個人			
株主数（人）	—	5	12	28	37	2	1,168	1,252	—
所有株式数（単元）	—	2,033	217	8,325	3,618	2	12,541	26,736	5,000
所有株式数の割合（%）	—	7.60	0.81	31.14	13.53	0.01	46.91	100.00	—

（注）自己株式389,218株は「個人その他」の欄に3,892単元、「単元未満株式の状況」の欄に18株含まれております。

(6) 【大株主の状況】

2020年9月30日現在

氏名又は名称	住所	所有株式数（株）	発行済株式（自己株式を除く。）の総数に対する所有株式数の割合（%）
株式会社キッツ	千葉県美浜区中瀬一丁目10-1	302,200	13.20
光通信株式会社	東京都豊島区西池袋一丁目4-10	226,100	9.88
西華産業株式会社	東京都千代田区丸の内三丁目3-1	203,200	8.88
TOA取引先持株会	兵庫県尼崎市西立花町五丁目12-1	99,300	4.34
株式会社日本カストディ銀行（信託口）	東京都中央区晴海一丁目8-12	90,300	3.94
NPBN-SHOKORO LIMITED （常任代理人 野村證券株式会社）	1 ANGEL LANE, LONDON, EC4R 3AB, UNITED KINGDOM （東京都中央区日本橋一丁目9-1）	76,200	3.33
株式会社三菱UFJ銀行	東京都千代田区丸の内二丁目7-1	68,000	2.97
前島 崇志	千葉県市川市	52,000	2.27
INTERACTIVE BROKERS LLC （常任代理人 インタラクティブ・ブローカーズ証券株式会社）	ONE PICKWICK PLAZA GREENWICH, CONNECTICUT 06830 USA （東京都千代田区霞が関三丁目2-5）	47,742	2.09
トウアバルグループ従業員持株会	兵庫県尼崎市西立花町五丁目12-1	42,742	1.87
計	—	1,207,784	52.76

（注）株式会社日本カストディ銀行（信託口）の所有株式数のうち、信託業務に係る株式数は、90,300株であります。

(7) 【議決権の状況】

① 【発行済株式】

2020年9月30日現在

区分	株式数 (株)	議決権の数 (個)	内容
無議決権株式	—	—	—
議決権制限株式 (自己株式等)	—	—	—
議決権制限株式 (その他)	—	—	—
完全議決権株式 (自己株式等)	(自己保有株式) 普通株式 389,200	—	権利内容に何ら限定のない当社における標準となる株式であります。
完全議決権株式 (その他)	普通株式 2,284,400	22,844	同上
単元未満株式	普通株式 5,000	—	—
発行済株式総数	2,678,600	—	—
総株主の議決権	—	22,844	—

② 【自己株式等】

2020年9月30日現在

所有者の氏名又は名称	所有者の住所	自己名義所有株式数 (株)	他人名義所有株式数 (株)	所有株式数の合計 (株)	発行済株式総数に対する所有株式数の割合 (%)
(自己保有株式) 東亜バルブエンジニアリング株式会社	兵庫県尼崎市西立花町 五丁目12-1	389,200	—	389,200	14.53
計	—	389,200	—	389,200	14.53

2【自己株式の取得等の状況】

【株式の種類等】 会社法第155条第7号に該当する普通株式の取得

(1)【株主総会決議による取得の状況】

該当事項はありません。

(2)【取締役会決議による取得の状況】

該当事項はありません。

(3)【株主総会決議又は取締役会決議に基づかないものの内容】

区分	株式数(株)	価額の総額(円)
当事業年度における取得自己株式	43	69,273
当期間における取得自己株式	45	85,950

(注) 当期間における取得自己株式には、2020年12月1日から有価証券報告書提出日までの単元未満株式の買取による株式数は含めておりません。

(4)【取得自己株式の処理状況及び保有状況】

区分	当事業年度		当期間	
	株式数(株)	処分価額の総額(円)	株式数(株)	処分価額の総額(円)
引き受ける者の募集を行った取得自己株式	—	—	—	—
消却の処分を行った取得自己株式	—	—	—	—
合併、株式交換、会社分割に係る移転を行った取得自己株式	—	—	—	—
その他(譲渡制限付株式報酬による自己株式の処分)	5,502	9,138,822	—	—
保有自己株式数	389,218	—	389,263	—

(注) 当期間における保有自己株式数には、2020年12月1日から有価証券報告書提出日までの単元未満株式の買取及び売渡による株式数は含めておりません。

3【配当政策】

当社の利益配分は、当社グループの資源を最大限に活用し、高効率の経営により、最大限の利益を生み出し、安定した配当を実施することを基本方針としており、株主様に長期・安定的に株式を保有いただけるような配当政策を実施してまいりたいと考えております。また、内部留保資金につきましては、今後の事業展開や企業体質の強化を図るため、有効に活用してまいります。

当社の剰余金の配当は、中間配当及び期末配当の年2回行うことを基本的な方針としております。

中間配当につきましては、「取締役会の決議により、毎年3月31日を基準日として、中間配当を行うことができる。」旨を定款に定めております。

当期の連結業績は、前期に比して増収となりましたが、利益につきましては、営業利益、経常利益がともに増益、親会社株主に帰属する当期純利益は僅かの減益という結果となりました。

利益の変動につきましては、当期の増収のほか、来上半期売上予定案件の増加による稼働率の向上や受注損失引当金戻入益の計上、前期に繰延税金資産の計上を再開したことなどを踏まえ、上述の配当方針に基づき、これら状況・背景を勘案し検討した結果、当期末の普通配当は1株当たり25円とさせていただきます。中間配当20円を本年6月に実施いたしましたので、年間配当金は1株当たり45円となります。

なお、当事業年度に係る剰余金の配当は以下のとおりであります。

決議年月日	配当金の総額(千円)	1株当たり配当額(円)
2020年5月13日 取締役会決議	45,787	20
2020年12月24日 定時株主総会決議	57,234	25

4 【コーポレート・ガバナンスの状況等】

(1) 【コーポレート・ガバナンスの概要】

① コーポレート・ガバナンスに関する基本的な考え方

当社は、有効且つ適正な内部統制システムの運営により、企業を取り巻くリスクを適切にコントロールすることで業務効率を最大化すると共に損失の発生を防止若しくは最少限に留め、同時に、役職員のコンプライアンス意識を高め、透明性・公正性の高い健全な企業であるよう適時に情報開示を実施し、意思決定の迅速化による経営の効率化によって企業価値を高めていくことを基本方針としております。

② 企業統治の体制の概要及び当該体制を採用する理由

当社は、経営監視機能の客観性及び中立性を確保する経営管理体制を整え、経営の透明性及び健全性の強化に努めてまいりましたが、2016年12月に、取締役会の監督機能のより一層の強化とコーポレート・ガバナンスのさらなる向上を図るため、監査等委員会設置会社に移行しました。

監査等委員会は、取締役の職務執行に係る監査を行うとともに、各監査等委員が取締役会の決議において議決権を行使することで、経営に対するモニタリング機能を強化し、監査・監督の実効性を向上させております。また、取締役会での重要な業務執行の決定権限を執行役員で構成する経営会議に委任することで、取締役会の適切な監督のもと経営の意思決定および執行のさらなる迅速化を図っております。

当社は機関設計に、社外取締役2名を含む3名からなる監査等委員会を設置しておりますが、指名委員会等設置会社における、指名委員会、報酬委員会のもつ機能を有する任意機関は現時点では設置しておりません。これは今後の課題として認識しております。

これにより当社の経営監視体制は、取締役会による取締役の職務執行の監督、監査等委員会による監査、会計監査人による会計監査、内部監査室による内部統制監査を以て構築しております。

また当社は、重要な意思決定を行うための機関として、取締役会、経営会議を設置しております。

当社の各機関の概要は、以下のとおりです。

a. 取締役会

取締役会は、取締役（監査等委員である取締役を除く。）6名及び監査等委員である取締役3名の計9名で構成され、経営上の重要事項に関する意思決定と取締役の職務執行の監査・監督を行っております。

取締役会は毎月1回の月例開催日を設定しており、必要に応じ臨時取締役会を開催し、法令、定款及び取締役会規則に定める事項について審議いたします。

b. 経営会議

経営会議は、執行役員（取締役を兼務するものを含む）11名で構成されております。

取締役会の員数を最小化するとともに社外取締役の比率を増大することで公正性、迅速性、透明性を維持すると同時に、効率的な経営を実現するため執行役員制度を採用しております。

経営会議は、原則月2回開催し、必要に応じて臨時に開催し、経営会議規程に基づく事項の審議、年度目標の進捗状況を報告・管理するほか、取締役会に付議すべき議題について事前に議論を行い、経営の円滑な遂行を図っております。

c. 監査等委員会

監査等委員会は原則月1回開催し、必要に応じて臨時に開催いたします。

監査等委員は、社外取締役2名を含む3名で構成され、取締役会を始めとする重要会議へ出席し、経営の執行状況を監視するとともに、財務報告に係る内部統制を含めた内部統制システムの整備・運用の状況等のモニタリングを通じ、取締役の職務の執行が法令・定款に適合し、業務が適正に遂行されているかどうかを監査するとともに、必要に応じ、その妥当性及び合理性といった範囲まで内部監査室との連携により監査を行ないます。

また、監査等委員自らも取締役会の構成員として取締役会において議決権を行使し、重要な業務執行の決定や役員の選定等に関与いたします。

監査等委員会は、内部監査室及び会計監査人と定期的に情報及び意見の交換を行い、監査結果の報告を受け、緊密な連携を図っております。監査等委員会の職務の補助は、内部監査室が行っています。

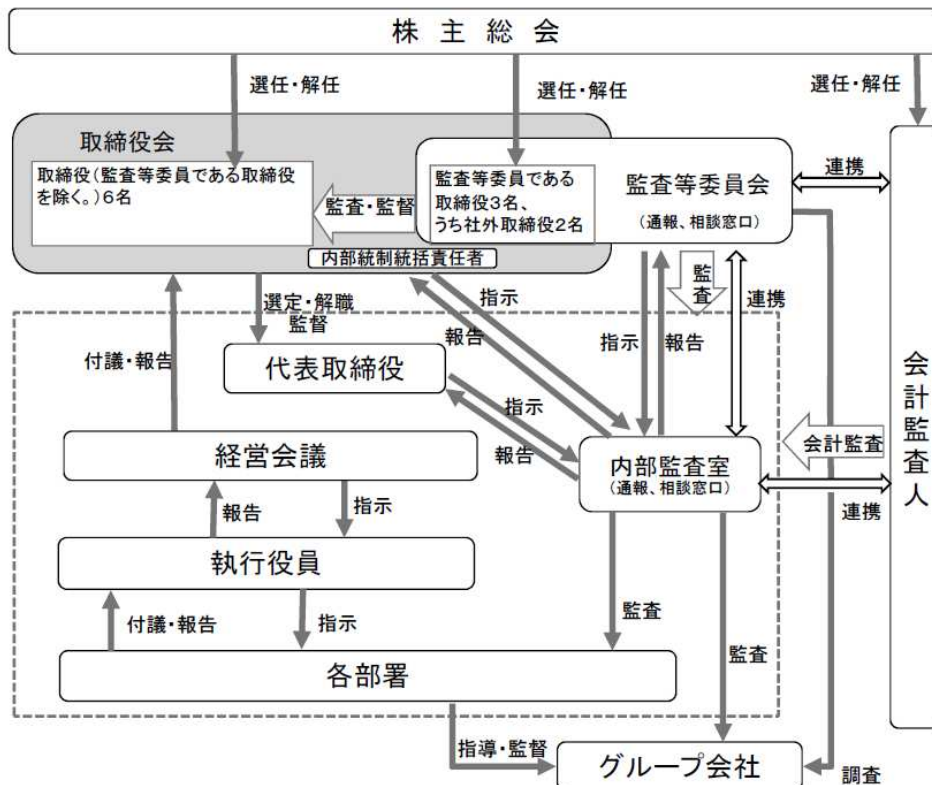
d. 内部統制統括責任者

内部統制統括責任者は、リスク管理に関わるすべての活動を統括し、定期的に取り締役に報告しています。

機関ごとの構成員は次のとおりであります。（◎は議長を表す。）

役職名	氏名	取締役会	監査等委員会	経営会議	内部統制統括責任者
代表取締役（社長執行役員）	笹野 幸明	◎		○	
取締役（専務執行役員）	有松 清高	○		○	
取締役（常務執行役員）	飯田 明彦	○		◎	◎
取締役（常務執行役員）	角谷 正昭	○		○	
取締役	三宅 利幸	○		○	
取締役（執行役員）	奥井 一史	○		○	
取締役（監査等委員）	平野 重充	○	◎		
社外取締役（監査等委員）	浜本 光浩	○	○		
社外取締役（監査等委員）	生川 友佳子	○	○		
常務執行役員	田中 博之			○	
執行役員	川上 浩			○	
執行役員	永井 貴之			○	
執行役員	榊村 英孝			○	
執行役員	山田 善男			○	

なお、当社のコーポレート・ガバナンスの体制は次のように図示されます。
（コーポレート・ガバナンスの体制図）



③ 企業統治に関するその他の事項

a. 内部統制システムの整備の状況

当社は、会社法及び会社法施行規則に基づき、業務の適正を確保するため内部統制システムの基本方針を取締役会において決議し、同取締役会で決議した内容に基づいて内部統制機能の整備に取り組んでおります。

具体的な取り組みとしては、社長直轄の独立部門として「内部監査室」（責任者1名、スタッフ4名）を設置し、内部監査を行い、当該監査の状況等を取締役会並びに監査等委員会へ報告を行い、監査等委員会との情報交換により連携を保ち、監査の有効性及び実効性を高めております。

当連結会計年度においては、グループ各社・各部門を対象としてコンプライアンスやリスク管理等を中心に内部監査を実施し、大きな是正や改善を要する指摘事項はないことを確認しております。

情報開示面につきましては、株主や投資家の皆様をはじめとする利害関係者への説明責任を果たし、経営の透明性を高めるために、管理本部において情報に関する適時開示を含めたIR活動を推進し、経営方針や業績に関する充実した情報開示に努めております。

なお、当社の業務の適正を確保するための基本方針は以下のとおりです。

1. 取締役及び使用人の職務の執行が法令及び定款に適合することを確保するための体制

- (1) 当社グループの役職員は、法令・定款を遵守し、各個人が企業人・社会人としての高度な倫理観に基づいて行動することを基本とする。
- (2) 当社は、『企業行動憲章』及び『グループコンプライアンス規程』を制定し、当社グループの全役職員に対し、これを要約した『TVEグループ役職員行動規範カード』の常時携帯を義務付け、その周知徹底を図る。
- (3) 当社は、コンプライアンスに係るすべての活動を統括する内部統制統括責任者を任命する。
- (4) 内部統制統括責任者は、当社グループ各社におけるコンプライアンス状況の監視・維持・情報収集を行い、活動の状況・成果は定期的に当社取締役会に報告する。
- (5) 当社グループにおいて重大な法令・定款違反及び不正の事実が判明した場合、または未然防止のため、『グループ内部通報規程』を制定する。また、当社グループの全役職員からの通報・相談に応じる窓口を設置し、法令遵守体制の整備及び推進に努める。

2. 取締役の職務の執行に係る情報の保存及び管理に関する体制

- (1) 当社は、当社グループの取締役の職務の執行に係る記録・文書の取り扱いについて、『取締役の職務執行に係る文書管理規程』を設け、適切に保存並びに閲覧の管理を行う。
- (2) 管理体制及び規程は定期的にその有効性を検証し、適宜最適化する。

3. 損失の危険の管理に関する規程その他の体制

- (1) 当社は、経営に係るリスクを認識し、適正且つ効率的な業務運営のため、『グループリスク管理規程』を制定する。
- (2) 当社は、内部統制統括責任者を任命し、リスク管理に関わるすべての活動を統括する。
- (3) 内部監査室は、リスクベースの監査によってグループ各社・各部署に潜在するリスクの洗い出しと評価を行う。監査等委員会は内部監査室と連携し、取締役の業務執行の状況を監査する。是正・改善が必要な場合、グループ各社・各部署は、速やかにその対策を計画する。
- (4) 当社グループは、労働災害の撲滅に全力で取り組む。
- (5) 外部要因により当社グループに及ぶリスクについては、各担当執行役員を通じ情報を確実に入手し、迅速な意思決定により対策を行う。
- (6) 当社が把握したリスクは、有価証券報告書、決算短信等を通じ、「リスク情報」、「優先的に対処すべき事業上及び財務上の課題」として積極的にステークホルダーに対し開示する。
- (7) 当社グループの製品等に起因し事故等が発生した場合は、直ちに顧客並びに当社従業員の安全を確保するとともに必要に応じ緊急対策本部（仮称・適宜決定）を設置し、情報管理の一元化を図り、適切且つ迅速な対応を行うことで、以後の安全確保と早期のプラントの復旧を行うとともに二次損害の防止に努めるものとし、火災、自然災害等の発生時においても同様とする。
- (8) 大規模な自然災害等の発生時においては、『事業継続計画』（BCP）に基づき、顧客、当社グループ従業員、取引先、地域住民の安全確保を最優先に行動することで企業としての社会的責任を果たし、早期の事業再開に努める。

4. 取締役の職務の執行が効率的に行われることを確保するための体制
 - (1) 取締役会は、中期経営計画においてグループ5ヵ年目標を策定し、その実現のための取組みを具現化し、進捗度合いを適宜管理する。
 - (2) 当社グループは、定例で開催される取締役会において、グループ各社の経営課題等の正確且つタイムリーな情報を伝達し、全役員の問題意識の共有化を行う。
 - (3) 取締役会は、時間的合理性を重視すべき場合においては、書面で決議するには適切でない事案を除き、会社法に定める書面決議制度を積極的に活用し、迅速な意思決定を行う。
 - (4) 当社は、独立性の高い社外取締役を置くことにより、取締役の職務執行に対する監督機能の維持・向上を図る。
5. 当社及び子会社から成る企業集団における業務の適正を確保するための体制
 - (1) 当社グループにおける業務の適正を確保するため、本基本方針はグループ全体に適用する。
 - (2) 当社は、『関係会社管理規程』に基づき、子会社の管理・監督を行い、業務の適正を確保する。
 - (3) 当社グループは、財務報告に係る内部統制の整備及び運用に責任を有しており、法令等に従って信頼性のある財務報告を作成するための体制を構築・運用していく。
 - (4) 当社グループの財務報告の適正性を確保するため、業務プロセスにおける内部統制が適正に運用されていることを当社内部監査室が監査し、必要に応じ改善を行う。
6. 監査等委員会の職務を補助すべき取締役及び使用人に関する事項、当該取締役及び使用人の他の取締役（監査等委員である取締役を除く。）からの独立性に関する事項並びに当該取締役及び使用人に対する指示の実効性の確保に関する事項
 - (1) 監査等委員会の職務は、内部監査室が補助する。
 - (2) 内部監査室の使用人の異動・評価等は、監査等委員の意見も尊重し、取締役（監査等委員である取締役を除く。）からの独立性を確保する。また、監査等委員会の職務を補助する際、専ら監査等委員会の指揮命令に従う。
 - (3) 内部監査室は、監査等委員会の職務の補助を行う旨を規定し、実効性を確保する。
7. 取締役（監査等委員である取締役を除く。）及び使用人が監査等委員会に報告をするための体制その他の監査等委員会への報告に関する体制及びその他監査等委員会の監査が実効的に行われることを確保するための体制
 - (1) 監査等委員は、当社取締役会ほかグループ各社の重要会議に適宜出席するとともに、稟議書等の重要な文書を開覧し、必要に応じ、各社役職員に対しその説明を求める。
 - (2) 監査等委員は、内部監査室及び会計監査人と適宜に意見交換を行い、その連携を維持する。
 - (3) 監査等委員は、同じ独立した立場の社外取締役（監査等委員である取締役を除く。）と情報交換を行い、その連携を維持する。
 - (4) 当社取締役（監査等委員である取締役を除く。）は、当社監査等委員会に対し報告すべき法定の事項に加え、当社及び当社グループに重大な影響を及ぼす事項等について速やかに報告を行う。
 - (5) 当社従業員及び各子会社の全役職員が当社監査等委員会に対し報告すべき事実を知ったときは、当社監査等委員並びに内部監査室長を窓口とする『通報・相談窓口』を通じて報告する。
 - (6) 当社グループは、当該内部通報者に対し不利益な取り扱いを行わないことを規定する。
 - (7) 監査等委員は、職務の執行に必要な費用について請求することができる。当社グループは、当該請求が特に不合理でない限り前払い又は償還に応じる。
8. 反社会的勢力を排除するための体制
 - (1) 当社グループは、反社会的勢力には毅然として対応し、利益供与は一切行わないことを基本方針とする。
 - (2) 当社グループは、『TVEグループ役職員行動規範カード』にこの基本方針を定め、全役職員に当該行動規範の常時携帯を義務付け、基本方針の遵守を周知する。
 - (3) 当社グループは、所轄警察署や企業防衛対策協議会、近隣企業等から情報の収集を行い、関係を強化することにより反社会的勢力の排除に備える。

b. 責任限定契約の内容の概要

当社は、取締役及び監査等委員である取締役が期待された役割を十分に発揮することができ、また適切な人材を招聘できるよう、業務執行を行わない取締役及び監査等委員である取締役の責任限定契約に関する規定を定款に設けております。

・ 社外取締役の責任限定契約

会社法第423条第1項の責任について、その職務を行うにつき善意かつ重大な過失がないときは、100万円または法令に定める最低責任限度額のいずれか高い額を限度として、責任を負うものとしております。

当社は、監査等委員である社外取締役の浜本光浩氏及び生川友佳子氏との間で当該責任限定契約を締結しております。

c. 取締役の定数

当社の取締役（監査等委員である取締役を除く。）は10名以内、監査等委員である取締役は4名以内とする旨、定款に定めております。

d. 取締役の選任の決議要件

取締役の選任決議は、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の過半数をもって行う旨、また、取締役の選任決議について、累積投票によらないものとする旨を定款に定めております。

e. 株主総会決議事項を取締役会で決議することができる事項

1) 自己株式の取得

当社は、会社法第165条第2項の規定により、取締役会の決議によって自己の株式を取得することができる旨を定款に定めております。これは、機動的な資本政策を遂行することを目的とするものであります。

2) 中間配当

当社は、取締役会の決議によって、毎年3月31日を基準日として、中間配当を行うことができる旨を定款に定めております。これは、株主への機動的な利益還元の実施を可能とすることを目的とするものであります。

f. 株主総会の特別決議要件

当社は、会社法第309条第2項に定める決議は、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の3分の2以上をもって行う旨を定款に定めております。これは、株主総会における特別決議の定足数を緩和することにより、株主総会の円滑な運営を行うことを目的とするものであります。

(2) 【役員の状況】

① 役員一覧

男性 8名 女性 1名 (役員のうち女性の比率11%)

役職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数(株)
代表取締役 (社長執行役員)	笹野 幸明	1953年9月10日	1982年3月 東亜エンジニアリング株式会社入社 2010年4月 当社執行役員営業本部長 2012年12月 当社取締役就任 常務執行役員 2014年7月 当社専務執行役員 2014年7月 東亜クリエイト株式会社取締役就任 2014年10月 トウアバルブオーバーシーズPte. Ltd. (現TVE GLOBAL ASIA PACIFIC Pte. Ltd.) 取締役社長就任 2015年4月 当社改革推進本部長 2015年12月 当社副社長執行役員 2016年6月 当社メンテナンス本部統括 2016年6月 トウアサービス株式会社取締役就任 2017年12月 当社代表取締役就任(現任) 社長執行役員(現任)	(注) 2	9,514
取締役 (専務執行役員) 事業開発本部長	有松 清高	1958年5月7日	1982年3月 株式会社北沢バルブ(現 株式会社キッツ)入社 2016年4月 同社バルブ事業統括本部プロダクトマネジメントセンター長代理 2016年12月 当社取締役就任(現任) 2017年4月 株式会社キッツバルブ事業統括本部参事 2017年12月 トウアバルブオーバーシーズPte. Ltd. (現TVE GLOBAL ASIA PACIFIC Pte. Ltd.) 取締役社長就任(現任) 2017年12月 当社専務執行役員(現任) 事業開発本部長(現任) 2018年5月 東亜クリエイト株式会社代表取締役副社長就任(現任) 2019年10月 TVEリファインメタル株式会社取締役就任(現任)	(注) 2	4,296
取締役 (常務執行役員) 管理本部長 リスク管理担当、 内部統制統括責任者	飯田 明彦	1959年7月18日	1983年4月 東亜バルブ株式会社入社 2004年12月 当社経理部長 2007年11月 トウアバルブオーバーシーズPte. Ltd. (現TVE GLOBAL ASIA PACIFIC Ptd. Ltd.) 取締役就任(現任) 2008年10月 当社管理本部副本部長兼経営企画室長 2012年7月 当社執行役員管理本部長(現任)兼 「七本の矢」作戦本部副本部長 2014年12月 トウアサービス株式会社代表取締役社長就任(現任) 2015年12月 当社取締役就任(現任) 常務執行役員 (現任) 2016年6月 東亜クリエイト株式会社取締役就任 (現任) 2016年12月 当社リスク管理担当(現任) 内部統制統括責任者(現任) 2019年10月 TVEリファインメタル株式会社取締役就任(現任)	(注) 2	5,817

役職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数(株)
取締役 (常務執行役員) 品質保証統括	角谷 正昭	1959年1月15日	1981年4月 東亜エンジニアリング株式会社入社 2008年10月 当社製造部長総括安全衛生管理室長 2011年4月 当社バルブ製造事業部副事業部長 2012年7月 当社執行役員製鋼製造本部長兼バルブ製造本部副本部長 2014年12月 当社バルブ製造本部長兼製鋼製造本部統括 2015年12月 トウアサービス株式会社取締役就任(現任) 2015年12月 当社取締役就任(現任) 常務執行役員(現任) 2019年1月 当社技術本部長 2019年10月 当社メンテナンス本部長 2020年10月 当社品質保証統括(現任)	(注) 2	6,317
取締役	三宅 利幸	1959年10月13日	1983年9月 東亜エンジニアリング株式会社入社 2009年4月 当社メンテナンス事業部メンテナンス部長 2012年7月 当社参与メンテナンス本部副本部長兼メンテナンス部長 2015年12月 当社執行役員メンテナンス本部長兼メンテナンス部長 2015年12月 トウアバルブオーバーシーズPte. Ltd. (現TVE GLOBAL ASIA PACIFIC Pte. Ltd.) 取締役就任 2016年4月 当社執行役員メンテナンス本部長 2017年12月 トウアサービス株式会社取締役就任(現任) 2018年12月 トウアバルブオーバーシーズPte. Ltd. (現TVE GLOBAL ASIA PACIFIC Pte. Ltd.) 取締役就任 2019年4月 当社取締役常務執行役員メンテナンス本部長兼事業開発本部リファインメタルプロジェクト室長 2019年10月 TVEリファインメタル株式会社代表取締役社長(現任)	(注) 2	8,823
取締役 (執行役員) 営業本部長	奥井 一史	1965年10月11日	1989年3月 東亜バルブ(株)入社 2012年7月 当社営業本部営業部主管兼東京支社長 2013年7月 当社営業本部営業第1部副部長兼東京支社長 2014年10月 当社営業本部東京支社長 2016年10月 当社営業本部副本部長兼東京支社長 2017年12月 当社執行役員営業本部長(現任) 2018年6月 当社東京支社長(現任) 2019年12月 トウアサービス株式会社取締役(現任) 2020年12月 当社取締役就任(現任)	(注) 2	-
取締役 (常勤監査等委員)	平野 重充	1957年7月20日	1993年2月 東亜バルブ株式会社入社 2003年3月 当社総務部総務課長 2005年10月 当社総務総括部主務兼総務課長 2008年10月 当社管理本部人事総務部長 2012年7月 当社参与管理本部副本部長兼人事総務部長 2015年12月 当社執行役員 2016年12月 トウアサービス株式会社監査役就任(現任) 2016年12月 東亜クリエイト株式会社監査役就任(現任) 2016年12月 当社取締役(常勤監査等委員)就任(現任) 2019年10月 TVEリファインメタル株式会社監査役就任(現任)	(注) 3	1,000

役職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (株)
取締役 (監査等委員)	浜本 光浩	1970年4月18日	2000年10月 弁護士登録 2000年10月 山田忠史法律事務所入所 2004年10月 きっかわ法律事務所入所 2008年4月 同所パートナー弁護士 2014年12月 当社取締役就任 2016年12月 当社取締役(監査等委員)就任(現任) 2017年6月 ㈱ワコールホールディングス社外監査役就任(現任) 2019年2月 浜本綜合法律事務所代表弁護士(現任) 2019年5月 大阪兵庫生コンクリート工業組員外監事(現任)	(注) 3	-
取締役 (監査等委員)	生川 友佳子	1974年4月20日	1997年4月 オリックス㈱入社 1998年6月 齊藤会計事務所入所 2001年9月 公認会計士・税理士古本正事務所(現デロイト トーマツ税理士法人)入所 2003年3月 税理士登録 2012年7月 デロイト トーマツ税理士法人 ディレクター 2015年10月 生川友佳子税理士事務所所長(現任) 2015年12月 当社監査役就任 2016年12月 当社取締役(監査等委員)就任(現任) 2018年6月 KaimanaHila合同会社代表社員(現任) 2019年3月 アース製薬株式会社社外監査役(現任)	(注) 3	-
計					35,767

- (注) 1. 浜本光浩及び生川友佳子は、社外取締役であります。
2. 2020年12月24日開催の定時株主総会の終結の時から1年間であります。
3. 2020年12月24日開催の定時株主総会の終結の時から2年間であります。
4. 当社は、法令に定める監査等委員である取締役の員数を欠くことになる場合に備え、会社法第329条第3項に定める補欠の監査等委員である取締役を1名選任しております。補欠の監査等委員である取締役の略歴は次のとおりであります。

氏名	生年月日	略歴	所有株式数 (株)
鈴木 浩巳	1960年4月13日	1986年1月 司法書士登録 1986年1月 鈴木司法書士事務所入所 2005年4月 同所所長(現任)	-

5. 当社は、意思決定・監督と執行を分離することにより、事業環境の変化に対して迅速かつ効率的に対応できる経営体制を構築・運用するため、執行役員制度を導入しております。執行役員は10名で構成され、取締役を兼務しない執行役員は次の5名であります。

役名	氏名	職名
常務執行役員	田中 博之	プロジェクト統括室長
執行役員	川上 浩	製造本部長、調達部長
執行役員	永井 貴之	技術本部長
執行役員	榊村 英孝	営業本部副本部長、営業部長、若狭事業所長、事業開発本部リファインメタルプロジェクト室長
執行役員	山田 善男	メンテナンス本部長

② 社外役員の状況

当社の監査等委員である社外取締役2名は、当社と取引関係等の利害関係はありません。

・浜本光浩氏は、監査等委員である社外取締役です。同氏は、社外役員となること以外の方法で直接会社経営に関与された経験はありませんが、弁護士としての経験と専門知識を活かし、当社の経営に適切な助言を適宜行っており、同氏の適切な助言は当社のガバナンス体制の強化に繋がっております。また、同氏は、一般株主と利益相反の生じる恐れのない独立役員であり、東京証券取引所に対して独立役員届出書を提出しております。なお、当社は、同氏が在籍していたきっかわ法律事務所と顧問契約を締結しておりますが、当社が同事務所に支払っている顧問料は、同事務所の業務規模に比して少額であったため、同事務所は当社に対して特段の依存はしておりません。従って、同氏は、一般株主と利益相反が生じるおそれがないことから独立性が保たれていると判断しております。同氏は浜本綜合法律事務所の代表弁護士及び株式会社ワコールホールディングスの社外監査役ですが、同所及び同社と当社との間に特別な関係はありません。また、同氏は大阪兵庫生コンクリート工業組合の員外監事ですが、同組合と当社との間に特別な関係はありません。

・生川友佳子氏は、監査等委員である社外取締役です。同氏は、直接会社経営に関与した経験はありませんが、同氏の税理士としての経験と専門知識を当社の監査体制に活かすため選任しております。また、同氏は、一般株主と利益相反の生じる恐れのない独立役員であり、東京証券取引所に対して独立役員届出書を提出しております。なお、同氏は、当社と業務委託関係にあるデロイト トーマツ税理士法人の出身者（2015年9月退職）ですが、生川友佳子氏個人と当社との間には直接の取引関係はありません。同氏は、生川友佳子税理士事務所の所長ですが、同所と当社との間には特別な関係はありません。また、同氏はKaimanaHila合同会社の代表社員及びアース製菓株式会社の社外監査役ですが、両社と当社との間には特別な関係はありません。従って、同氏は、一般株主と利益相反が生じるおそれがないことから独立性が保たれていると判断しております。

当社は、社外取締役の選任につきまして、各役員のビジネス経験、専門性及び独立性などを総合的に勘案し、決定しております。なお、社外取締役を選任するための当社からの独立性に関する基準又は方針は定めておりませんが、東京証券取引所が定める独立性に関する判断基準を参考にするほか、客観的な視点から当社の経営等に対し、適切に意見を述べていただける方を選任しております。

③ 社外取締役による監督又は監査と内部監査、監査等委員会監査及び会計監査との相互連携並びに内部統制部門との関係

社外取締役は、出席した取締役会において、毎回報告事項や決議事項について適宜質問するとともに、取締役会の意思決定の妥当性・適正性を確保するための発言を行っております。また、監査等委員会においては、社外取締役として行った監査の報告をし、毎回他の監査等委員である取締役が行った監査について適宜質問をするとともに、必要に応じ社外の立場から意見を述べております。さらに、必要に応じて、内部監査室及び会計監査人と情報交換や意見交換を行うなど、相互連携を図っております。

(3) 【監査の状況】

① 監査等委員会監査の状況

監査等委員会監査の状況につきましては、(1) コーポレート・ガバナンスの概要 ②企業統治の体制の概要及び当該体制を採用する理由 c. 監査等委員会に記載のとおりであります。

なお、監査等委員生川友佳子氏は税理士の資格を有しており、財務及び会計に関する相当程度の知見を有しております。

当社は、常勤監査等委員1名、社外監査等委員2名の計3名で監査等委員会を構成し、原則月1回監査等委員会を開催し、必要に応じて臨時に開催しております。

当事業年度において当社は監査等委員会を15回開催しており、各監査等委員の出席状況については次のとおりであります。

役職名	氏名	出席状況
常勤監査等委員	平野 重充	15回／15回 (100%)
社外監査等委員	浜本 光浩	15回／15回 (100%)
社外監査等委員	生川 友佳子	15回／15回 (100%)

監査等委員会における主な検討事項としては、監査方針・監査計画の立案、会計監査人の監査の妥当性、内部監査室からの報告事項についての検討があります。

また、常勤監査等委員の活動として、取締役会、子会社取締役会、業務執行役員の報告会等の重要会議への出席、代表取締役との定例会合、重要な稟議の閲覧、内部監査室及び会計監査人と定期的に会合を開催し、意見交換・情報交換により連携を強化し、監査の有効性及び効率性の向上を図っております。

社外監査等委員の活動として、取締役会、業務執行役員の報告会等の重要会議に出席するほか、定期的に代表取締役と意見交換・議論を行うことで、取締役の職務の執行状況を把握するとともに、経営方針・経営課題等について幅広い経験及び見識からの提言を行っております。

② 内部監査の状況

内部監査室は、5名で構成され、当社の内部統制が有効に機能し、業務効率の維持、遵法性の確保、財務報告が適切に行われているかについて、監査等委員会、会計監査人と連携しながら監査を実施しております。また内部統制の目的を阻害する要因となるリスクが適切に評価されコントロールされているかについて確認を行い、適切なアドバイスにより内部統制システムの改善を促します。

③ 会計監査の状況

a. 監査法人の名称

有限責任監査法人トーマツ

b. 継続監査期間

52年間

c. 業務を執行した公認会計士

指定有限責任社員 業務執行社員 西方実氏
指定有限責任社員 業務執行社員 安場達哉氏

d. 監査業務に係る補助者の構成

公認会計士5名、その他6名

e. 監査法人の選定方針と理由

当社は、独立性、監査活動の適切性・妥当性などを総合的に勘案し、監査法人を選定しております。

当社の監査等委員会は、会計監査人の職務の執行に支障がある場合等、その必要があると判断した場合、株主総会に提出する会計監査人の解任又は不再任に関する議案の内容を決定いたします。

また、監査等委員会は、会計監査人が会社法第340条第1項各号に定める項目に該当すると認められ、かつ改善の見込みがないと判断した場合は、監査等委員全員の同意に基づき、会計監査人を解任いたします。

f. 監査等委員及び監査等委員会による監査法人の評価

当社監査等委員会は、会計監査人の業務遂行状況について、一定の基準を設け、関係部門(管理本部・内部監査室)の評価も勘案しつつ、定期的な評価を実施しております。

④ 監査報酬の内容等

a. 監査公認会計士等に対する報酬

区分	前連結会計年度		当連結会計年度	
	監査証明業務に基づく報酬（千円）	非監査業務に基づく報酬（千円）	監査証明業務に基づく報酬（千円）	非監査業務に基づく報酬（千円）
提出会社	27,500	1,230	30,000	3,575
連結子会社	—	—	—	—
計	27,500	1,230	30,000	3,575

監査公認会計士等の提出会社に対する非監査業務の内容

（前連結会計年度）

当社が監査公認会計士等に対して報酬を支払っている非監査業務の内容は、「収益認識に関する会計基準」の適用準備に関する助言・指導業務であります。

（当連結会計年度）

当社が監査公認会計士等に対して報酬を支払っている非監査業務の内容は、「収益認識に関する会計基準」の適用準備に関する助言・指導業務であります。

b. 監査公認会計士等と同一のネットワーク（デロイトトーマツグループ）に対する報酬（a.を除く）

区分	前連結会計年度		当連結会計年度	
	監査証明業務に基づく報酬（千円）	非監査業務に基づく報酬（千円）	監査証明業務に基づく報酬（千円）	非監査業務に基づく報酬（千円）
提出会社	—	3,000	—	3,000
連結子会社	—	—	—	—
計	—	3,000	—	3,000

監査公認会計士等と同一のネットワーク（デロイトトーマツグループ）に対する非監査業務の内容

（前連結会計年度）

当社における非監査業務の内容は、税務コンプライアンス業務であります。

（当連結会計年度）

当社における非監査業務の内容は、税務コンプライアンス業務であります。

c. その他の重要な監査証明業務に基づく報酬の内容

該当事項はありません。

d. 監査報酬の決定方針

当社の会計監査人に対する監査報酬の決定方針といたしましては、会計監査人が策定した監査計画、監査内容、監査日数等を勘案し、両者で協議の上で監査報酬を決定しております。

e. 監査等委員会が会計監査人の報酬等に同意した理由

当社の監査等委員会は、会計監査人より提示された監査計画および監査報酬見積りの算出根拠等が適切であるかどうかについて必要な検証を行いました。その結果、当社の規模、複雑性、リスクに照らして、管理本部が提案した会計監査人に対する報酬等について相当であると認め、会社法第399条第1項の同意をしております。

(4) 【役員の報酬等】

① 役員の報酬等の額またはその算定方法の決定に関する方針に係る事項

当社の取締役（監査等委員の取締役を除く）の報酬は、外部の役員報酬調査に参加するなど客観的に報酬水準を把握したうえで取締役会の審議により決定しております。監査等委員である取締役の報酬は、外部の役員報酬調査に参加するなど客観的に報酬水準を把握したうえで監査等委員の協議により決定しております。

当社の取締役（監査等委員の取締役を除く）の報酬は、基本報酬、賞与、株式報酬により構成されております。取締役（監査等委員）の報酬は、基本報酬、賞与により構成されております。

(当事業年度の役員の報酬等の決定権限を有する者及び活動内容)

役員の報酬等	決定権限を有する者	活動内容
取締役報酬	取締役会	支給実績及び業績指標等を基準に取締役会で審議・決議し、各取締役の報酬額の決定にあたっては、取締役社長に一任しております。
監査等委員報酬	監査等委員会	支給実績等を基準に協議し、各監査等委員の報酬額について決定しております。

なお、当事業年度における株式報酬を含む役員の報酬等の額の決定過程における取締役会及び監査等委員会の活動内容は以下となります。

- ・2019年11月8日 取締役報酬（賞与）決定の件
- ・2019年12月24日 取締役（監査等委員の取締役を除く）の基本報酬決定の件
- ・2019年12月24日 取締役（監査等委員）の基本報酬決定の件
- ・2020年1月14日 取締役に対する譲渡制限付株式報酬として自己株式の処分に関する報酬決定の件（当社の取締役（監査等委員の取締役を除く）に支給される当社に対する金銭報酬債権合計8百万円（処分株式1株につき出資される金銭報酬債権の額は金1,618円）を出資の目的とすることを決議）

- (1) 基本報酬はそれぞれの役位ごとの責任や経営への影響度を考慮して基準額を設定しております。
- (2) 賞与は業績に連動して支給する仕組みとしております。業績に連動する指標として経常利益（連結）を採用し、当期の役員賞与算定に用いる目標を設定しております。当該指標を選択した理由は、当社の経営上の目標の達成状況を判断するための客観的な指標であり、業績連動報酬の指標として適切と判断したためであります。支給額の算定は、目標の達成率に応じた一定の係数により役員賞与基準額を算定し、各役員の役位、個別の評価に応じた加減を行うことで支給額を決定しております。
- ・当事業年度における当該目標額と実績は次のとおりであります。なお、実績は役員賞与の最終支給額が確定する前の数字であるため連結損益計算書の経常利益とは一致いたしません。

事業年度	前連結会計年度（百万円）	当連結会計年度（百万円）
目標	637	691
実績	629	983

(3) 株式報酬について

当社は2017年12月22日開催の第18回定時株主総会において、新たに譲渡制限付株式報酬制度の導入を決定し、2018年1月より、取締役（監査等委員である取締役と社外取締役を除く。以下「対象者」という。）に株式の割り当てを実施しております。

本制度は株価変動のメリットとリスクを株主と共有し、株価上昇及び企業価値向上への貢献意欲を従来以上に高めることを目的としております。なお、株式報酬の支給額の算定方法は概ね以下のとおりです。

- ・無役の取締役に対する金銭債権の支給額（1,500千円）を基準として、これに役位毎に設定した係数を乗じることで、各対象者に支給する金銭債権額を決定し、この金銭債権額を現物出資の方法で給付することと引き換えに、譲渡制限付株式を割り当てております。

②役員区分ごとの報酬等の総額、報酬等の種類別の総額及び対象となる役員の員数

役員区分	報酬等の総額 (千円)	報酬等の種類別の総額(千円)			対象となる 役員の員数 (名)
		基本報酬	譲渡制限付 株式報酬	賞与	
取締役(監査等委員を除く) (社外取締役を除く)	130,433	72,054	9,308	49,071	6
取締役(監査等委員) (社外取締役を除く)	17,034	11,520	—	5,514	1
社外役員	14,194	9,600	—	4,594	2
合計	161,661	93,174	9,308	59,179	9

(注) 1. 株主総会決議による年間報酬限度額は次のとおりであります。

取締役(監査等委員である取締役を除く)の報酬額(使用人兼務役員の使用人分給与は含みません。)

年額 200百万円以内(2016年12月22日開催の定時株主総会)

監査等委員である取締役の報酬額

年額 50百万円以内(2016年12月22日開催の定時株主総会)

2. 当事業年度末現在の人員は、取締役(監査等委員である取締役を除く。)6名、監査等委員である取締役3名の合計9名であります。

(5) 【株式の保有状況】

① 投資株式の区分の基準及び考え方

当社は、株式の価値変動または株式に係る配当によって利益を受けることを目的とするいわゆる純投資目的の株式は保有しておりません。純投資以外を目的とするいわゆる政策保有株式については、当社グループの経営方針に照らして、当社と被保有企業の双方において企業価値向上に資するものに限定しております。

② 保有目的が純投資目的以外の目的である投資株式

a. 保有方針及び保有の合理性を検証する方法並びに個別銘柄の保有の適否に関する取締役会等における検証の内容

当社は、上場会社の株式保有については重要な財産の取得・保有であると認識しております。取引先との関係維持・強化、当社の企業価値向上・発展に資すると取締役会で認められた場合、当該株式を保有できるものとしております。

当社では、取締役会において1年に1度を目処に、当社が保有する政策保有株式の個別銘柄について、保有目的、取引関係、投資効果等を総合的に検証し、保有の必要性が乏しい銘柄は、その縮減・売却について審議し、保有の適否を判断しております。また、審議の結果、当社が保有する政策保有株式の個別銘柄について、定量的な保有の効果を数値化して記載する事は困難ではありますが、いずれも保有の合理性があると判断しております。

b. 銘柄数及び貸借対照表計上額

	銘柄数 (銘柄)	貸借対照表計上額の 合計額 (千円)
非上場株式	4	2,620
非上場株式以外の株式	18	762,341

(当事業年度において株式数が増加した銘柄)

	銘柄数 (銘柄)	株式数の増加に係る取得 価額の合計額 (千円)	株式数の増加の理由
非上場株式	—	—	—
非上場株式以外の株式	—	—	—

(当事業年度において株式数が減少した銘柄)

	銘柄数 (銘柄)	株式数の減少に係る売却 価額の合計額 (千円)
非上場株式	—	—
非上場株式以外の株式	—	—

c. 特定投資株式及びみなし保有株式の銘柄ごとの株式数、貸借対照表計上額等に関する情報
特定投資株式

銘柄	当事業年度	前事業年度	保有目的、定量的な保有効果 及び株式数が増加した理由	当社の株式の 保有の有無
	株式数 (株)	株式数 (株)		
	貸借対照表計上額 (千円)	貸借対照表計上額 (千円)		
㈱キッツ	436,000	436,000	バルブ事業に関する両社の企業価値の向上を目指して、また、両社の強みを活かした事業の更なる発展を図るため、資本業務提携契約を締結しており、業務提携、営業連携による継続的な取引関係の維持・強化のため保有しております。主に売上取引、仕入取引を拡大しております。	有
	260,728	313,484		
三菱商事㈱	103,000	103,000	当社の総代理店であり、継続的な取引関係の維持強化のため保有しております。毎期安定的な売上取引を行っております。	無
	258,787	273,053		
西華産業㈱	54,000	54,000	当社の代理店であり、継続的な取引関係の維持強化のため保有しております。毎期安定的な売上取引を行っております。	有
	79,812	71,550		
三菱重工業㈱	23,000	23,000	取引関係の維持強化のため保有しております。毎期安定的な売上取引を行っております。	無
	53,601	97,336		
明和産業㈱	76,000	76,000	取引関係の維持強化のため保有していますが、保有の目的・意義が希薄化しているため縮減を検討しております。	無
	33,820	38,456		
西日本旅客鉄道㈱	5,000	5,000	地域社会の発展・繁栄のため保有しております。	無
	25,955	45,655		
㈱三菱UFJフィナンシャル・グループ	40,400	40,400	同社子会社の三菱UFJ銀行は当社メインバンクであり、当社の財務活動円滑化のため保有しております。	無(注2)
	16,810	22,155		
関西電力㈱	12,000	12,000	当社の主要な取引先であり、継続的な取引関係の維持強化のため保有しております。毎期安定的な売上取引を行っております。	無
	12,240	14,502		
日本ギア工業㈱	25,000	25,000	当社の主要な仕入先であり、継続的な取引関係の維持強化のため保有しております。毎期一定の仕入取引を行っております。	有
	7,425	10,650		
㈱IHI	2,900	2,900	取引関係の維持強化のため保有していますが、保有の目的・意義が希薄化しているため縮減を検討しております。	無
	4,045	6,809		

銘柄	当事業年度	前事業年度	保有目的、定量的な保有効果 及び株式数が増加した理由	当社の株式の 保有の有無
	株式数 (株)	株式数 (株)		
	貸借対照表計上額 (千円)	貸借対照表計上額 (千円)		
九州電力(株)	3,000	3,000	当社の主要な取引先であり、継続的な取引関係の維持強化のため保有しております。 毎期安定的な売上取引を行っております。	無
	2,871	3,060		
いちよし証券(株)	4,620	4,620	取引関係の維持強化のため保有しております。毎期円滑かつ安定的な金融取引を得ております。	無
	2,166	3,136		
住友電気工業(株)	1,100	1,100	取引関係の維持強化のため保有していますが、保有の目的・意義が希薄化しているため縮減を検討しております。	無
	1,296	1,508		
(株)三十三フィナンシャルグループ	630	630	取引関係の維持強化のため保有していますが、保有の目的・意義が希薄化しているため縮減を検討しております。	無
	864	1,011		
東京電力ホールディングス(株)	2,000	2,000	取引関係の維持強化のため保有しております。また、最近事業年度については、福島原発事故による原発の稼働状況により、主な売上取引はありませんが、過去に安定的な売上取引を行っていた経緯があり、保有しております。	無
	578	1,058		
(株)中北製作所	200	200	取引関係の維持強化のため保有していますが、保有の目的・意義が希薄化しているため縮減を検討しております。	無
	520	567		
(株)三井住友フィナンシャルグループ	144	144	取引関係の維持強化のため保有していますが、保有の目的・意義が希薄化しているため縮減を検討しております。	無
	420	532		
(株)神戸製鋼所	1,000	1,000	取引関係の維持強化のため保有していますが、保有の目的・意義が希薄化しているため縮減を検討しております。	無
	399	576		

(注) 1. 定量的な保有効果については、記載が困難ですが、取締役会では、毎年、個別銘柄毎に事業戦略や事業上の関係、保有リスク等の観点から検証を行い、保有継続の可否を判断しております。

2. 保有先企業は当社の株式を保有しておりませんが、同社子会社が当社の株式を保有しております。

- ③ 保有目的が純投資目的である投資株式
該当事項はありません。

第5【経理の状況】

1. 連結財務諸表及び財務諸表の作成方法について

(1) 当社の連結財務諸表は、「連結財務諸表の用語、様式及び作成方法に関する規則」（1976年大蔵省令第28号）に基づいて作成しております。

(2) 当社の財務諸表は、「財務諸表等の用語、様式及び作成方法に関する規則」（1963年大蔵省令第59号。以下「財務諸表等規則」という。）に基づいて作成しております。

また、当社は、特例財務諸表提出会社に該当し、財務諸表等規則第127条の規定により財務諸表を作成しております。

2. 監査証明について

当社は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき、連結会計年度（2019年10月1日から2020年9月30日まで）の連結財務諸表及び事業年度（2019年10月1日から2020年9月30日まで）の財務諸表について、有限責任監査法人トーマツにより監査を受けております。

3. 連結財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組みについて

当社は、連結財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組みを行っております。具体的には、会計基準等の内容を適切に把握し、会計基準等の変更等についての確に対応することができる体制を整備するため、公益財団法人財務会計基準機構へ加入し、企業会計基準委員会等の行う様々な研修に参加しております。

1 【連結財務諸表等】

(1) 【連結財務諸表】

① 【連結貸借対照表】

(単位：千円)

	前連結会計年度 (2019年9月30日)	当連結会計年度 (2020年9月30日)
資産の部		
流動資産		
現金及び預金	3,330,102	1,804,386
受取手形及び売掛金	3,135,150	2,912,644
電子記録債権	85,809	212,485
有価証券	—	1,200,000
商品及び製品	※3 175,556	※3 237,445
仕掛品	※3 1,474,023	※3 2,238,862
原材料及び貯蔵品	560,545	485,718
その他	79,386	209,757
流動資産合計	8,840,572	9,301,300
固定資産		
有形固定資産		
建物及び構築物（純額）	※2 486,355	※2 493,390
機械装置及び運搬具（純額）	※2 442,349	※2 450,457
土地	※2 261,363	※2 261,363
リース資産（純額）	74,027	78,262
建設仮勘定	29,208	12,215
その他（純額）	※2 48,292	※2 48,197
有形固定資産合計	※1 1,341,596	※1 1,343,886
無形固定資産		
ソフトウェア	188,556	179,369
リース資産	68,395	61,186
その他	12,052	11,072
無形固定資産合計	269,004	251,628
投資その他の資産		
投資有価証券	934,062	794,114
繰延税金資産	255,989	250,635
その他	71,770	152,336
貸倒引当金	△10,724	△9,803
投資その他の資産合計	1,251,097	1,187,283
固定資産合計	2,861,697	2,782,798
資産合計	11,702,270	12,084,099

(単位：千円)

	前連結会計年度 (2019年9月30日)	当連結会計年度 (2020年9月30日)
負債の部		
流動負債		
支払手形及び買掛金	711,017	623,940
電子記録債務	114,958	94,292
1年内返済予定の長期借入金	※ ₂ 72,762	※ ₂ 60,000
リース債務	41,274	43,824
未払法人税等	172,148	151,679
賞与引当金	336,302	369,474
役員賞与引当金	39,799	59,179
受注損失引当金	※ ₃ 451,605	※ ₃ 335,631
その他	412,658	605,540
流動負債合計	2,352,526	2,343,563
固定負債		
長期借入金	※ ₂ 210,000	※ ₂ 150,000
リース債務	105,126	99,459
P C B 処理引当金	2,838	1,751
退職給付に係る負債	726,704	674,600
その他	11,769	10,372
固定負債合計	1,056,438	936,184
負債合計	3,408,965	3,279,747
純資産の部		
株主資本		
資本金	1,739,559	1,739,559
資本剰余金	2,012,806	2,012,570
利益剰余金	5,019,994	5,595,552
自己株式	△655,665	△646,596
株主資本合計	8,116,695	8,701,086
その他の包括利益累計額		
その他有価証券評価差額金	193,867	95,188
為替換算調整勘定	1,980	2,687
退職給付に係る調整累計額	△19,498	5,061
その他の包括利益累計額合計	176,349	102,937
非支配株主持分	261	327
純資産合計	8,293,305	8,804,351
負債純資産合計	11,702,270	12,084,099

②【連結損益計算書及び連結包括利益計算書】

【連結損益計算書】

(単位：千円)

	前連結会計年度 (自 2018年10月1日 至 2019年9月30日)	当連結会計年度 (自 2019年10月1日 至 2020年9月30日)
売上高	8,239,059	8,824,693
売上原価	※1 6,156,618	※1 6,256,077
売上総利益	2,082,440	2,568,615
販売費及び一般管理費		
販売手数料	182,807	179,306
荷造運搬費	42,419	46,160
役員報酬	136,340	130,151
役員賞与引当金繰入額	39,799	59,179
賞与引当金繰入額	72,612	81,361
給料及び手当	420,538	446,826
退職給付費用	26,132	25,544
法定福利費	90,010	100,958
旅費及び交通費	55,328	35,201
交際費	19,216	9,185
地代家賃	45,222	43,535
研究開発費	※2 143,250	※2 123,384
雑費	288,028	402,196
販売費及び一般管理費合計	1,561,704	1,682,993
営業利益	520,736	885,622
営業外収益		
受取利息	275	399
受取配当金	27,551	37,312
受取家賃	6,757	6,827
受取補償金	—	28,722
作業くず売却益	8,447	1,472
雑収入	21,225	15,173
営業外収益合計	64,257	89,908
営業外費用		
支払利息	1,580	2,740
支払手数料	1,000	1,005
為替差損	4,170	5,076
リース解約損	85	4,027
雑損失	1,308	272
営業外費用合計	8,144	13,121
経常利益	576,849	962,408
特別利益		
固定資産売却益	※3 39	※3 499
特別利益合計	39	499
特別損失		
固定資産処分損	※4 2,456	※4 13,055
投資有価証券評価損	983	346
特別損失合計	3,440	13,401
税金等調整前当期純利益	573,449	949,507
法人税、住民税及び事業税	187,913	223,402
法人税等調整額	△328,705	47,595
法人税等合計	△140,792	270,997
当期純利益	714,241	678,509
非支配株主に帰属する当期純利益又は非支配株主に 帰属する当期純損失(△)	△130	65
親会社株主に帰属する当期純利益	714,372	678,443

【連結包括利益計算書】

(単位：千円)

	前連結会計年度 (自 2018年10月1日 至 2019年9月30日)	当連結会計年度 (自 2019年10月1日 至 2020年9月30日)
当期純利益	714,241	678,509
その他の包括利益		
その他有価証券評価差額金	△134,250	△98,678
為替換算調整勘定	△14,423	707
退職給付に係る調整額	27,144	24,559
その他の包括利益合計	※ △121,529	※ △73,411
包括利益	592,712	605,098
(内訳)		
親会社株主に係る包括利益	592,843	605,032
非支配株主に係る包括利益	△130	65

③【連結株主資本等変動計算書】

前連結会計年度（自 2018年10月1日 至 2019年9月30日）

（単位：千円）

	株主資本				
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計
当期首残高	1,739,559	2,018,103	4,385,373	△671,241	7,471,794
当期変動額					
剰余金の配当			△79,751		△79,751
親会社株主に帰属する当期純利益			714,372		714,372
自己株式の取得				△246	△246
自己株式の処分		△5,296		15,822	10,526
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）					
当期変動額合計	—	△5,296	634,620	15,576	644,900
当期末残高	1,739,559	2,012,806	5,019,994	△655,665	8,116,695

	その他の包括利益累計額				非支配株主持分	純資産合計
	その他有価証券評価差額金	為替換算調整勘定	退職給付に係る調整累計額	その他の包括利益累計額合計		
当期首残高	328,117	16,403	△46,642	297,878	70,191	7,839,864
当期変動額						
剰余金の配当						△79,751
親会社株主に帰属する当期純利益						714,372
自己株式の取得						△246
自己株式の処分						10,526
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	△134,250	△14,423	27,144	△121,529	△69,930	△191,459
当期変動額合計	△134,250	△14,423	27,144	△121,529	△69,930	453,441
当期末残高	193,867	1,980	△19,498	176,349	261	8,293,305

当連結会計年度（自 2019年10月1日 至 2020年9月30日）

（単位：千円）

	株主資本				
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計
当期首残高	1,739,559	2,012,806	5,019,994	△655,665	8,116,695
当期変動額					
剰余金の配当			△102,885		△102,885
親会社株主に帰属する当期純利益			678,443		678,443
自己株式の取得				△69	△69
自己株式の処分		△236		9,138	8,902
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）					
当期変動額合計	—	△236	575,558	9,069	584,391
当期末残高	1,739,559	2,012,570	5,595,552	△646,596	8,701,086

	その他の包括利益累計額				非支配株主持分	純資産合計
	その他有価証券評価差額金	為替換算調整勘定	退職給付に係る調整累計額	その他の包括利益累計額合計		
当期首残高	193,867	1,980	△19,498	176,349	261	8,293,305
当期変動額						
剰余金の配当						△102,885
親会社株主に帰属する当期純利益						678,443
自己株式の取得						△69
自己株式の処分						8,902
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	△98,678	707	24,559	△73,411	65	△73,345
当期変動額合計	△98,678	707	24,559	△73,411	65	511,045
当期末残高	95,188	2,687	5,061	102,937	327	8,804,351

④【連結キャッシュ・フロー計算書】

(単位：千円)

	前連結会計年度 (自 2018年10月1日 至 2019年9月30日)	当連結会計年度 (自 2019年10月1日 至 2020年9月30日)
営業活動によるキャッシュ・フロー		
税金等調整前当期純利益	573,449	949,507
減価償却費	292,813	308,221
貸倒引当金の増減額 (△は減少)	—	△920
賞与引当金の増減額 (△は減少)	16,670	33,172
役員賞与引当金の増減額 (△は減少)	△3,639	19,380
受注損失引当金の増減額 (△は減少)	130,127	△115,973
P C B 処理引当金の増減額 (△は減少)	△14,973	△1,086
退職給付に係る負債の増減額 (△は減少)	2,235	△27,544
受取利息及び受取配当金	△27,826	△37,711
受取保険金	△15,495	△493
支払利息	1,580	2,740
受取補償金	—	△28,722
固定資産売却損益 (△は益)	△39	△499
固定資産処分損益 (△は益)	2,456	13,055
投資有価証券評価損益 (△は益)	983	346
売上債権の増減額 (△は増加)	723,348	95,829
たな卸資産の増減額 (△は増加)	△544,685	△751,901
前渡金の増減額 (△は増加)	—	△121,693
仕入債務の増減額 (△は減少)	227,240	△107,743
前受金の増減額 (△は減少)	△85,543	14,193
未払消費税等の増減額 (△は減少)	△27,803	93,228
その他	△18,734	30,782
小計	1,232,162	366,167
利息及び配当金の受取額	27,772	36,393
利息の支払額	△1,694	△2,697
保険金の受取額	15,495	493
補償金の受取額	—	28,722
法人税等の支払額	△105,145	△240,320
法人税等の還付額	1,278	—
営業活動によるキャッシュ・フロー	1,169,869	188,757
投資活動によるキャッシュ・フロー		
投資有価証券の取得による支出	△360,118	—
有形固定資産の取得による支出	△149,255	△178,899
有形固定資産の売却による収入	43	499
有形固定資産の除却による支出	△801	△3,239
無形固定資産の取得による支出	△40,535	△40,566
長期貸付金の回収による収入	117	115
その他	△9,621	△81,676
投資活動によるキャッシュ・フロー	△560,173	△303,766
財務活動によるキャッシュ・フロー		
長期借入れによる収入	300,000	—
長期借入金の返済による支出	△114,208	△72,762
リース債務の返済による支出	△17,584	△35,489
自己株式の取得による支出	△246	△69
配当金の支払額	△79,945	△102,635
連結の範囲の変更を伴わない子会社株式の取得による支出	△70,233	—
その他	△999	△498
財務活動によるキャッシュ・フロー	16,781	△211,454
現金及び現金同等物に係る換算差額	△14,335	748
現金及び現金同等物の増減額 (△は減少)	612,142	△325,715
現金及び現金同等物の期首残高	2,717,959	3,330,102
現金及び現金同等物の期末残高	※1 3,330,102	※1 3,004,386

【注記事項】

(連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項)

1. 連結の範囲に関する事項

(1) 連結子会社の数 4社

連結子会社の名称

- ・ トウアサービズ株式会社
- ・ 東亜クリエイト株式会社
- ・ TVE GLOBAL ASIA PACIFIC Pte.Ltd. (シンガポール)
旧社名 トウアバルブオーバーシーズ Pte.Ltd.
- ・ TVEリファインメタル株式会社

(連結の範囲の変更)

当連結会計年度において、TVEリファインメタル株式会社を設立し、連結の範囲に含めております。

(2) 非連結子会社の名称

該当ありません。

2. 持分法の適用に関する事項

該当事項はありません。

3. 連結子会社の事業年度等に関する事項

連結子会社の決算日は、いずれも9月30日であり、連結財務諸表提出会社と一致しております。

4. 会計方針に関する事項

(1) 重要な資産の評価基準及び評価方法

① 有価証券の評価基準及び評価方法

a. 満期保有目的の債券

償却原価法(定額法)

b. その他有価証券

時価のあるもの

決算日の市場価格等に基づく時価法(評価差額は全部純資産直入法により処理し、売却原価は移動平均法により算定)

時価のないもの

移動平均法による原価法

② デリバティブの評価基準及び評価方法

時価法

③ たな卸資産の評価基準及び評価方法

a. 製品及び仕掛品

主として個別法による原価法(貸借対照表価額については収益性の低下による簿価切下げの方法により算定)

b. 原材料及び貯蔵品

主として移動平均法による原価法(貸借対照表価額については収益性の低下による簿価切下げの方法により算定)

(2) 重要な減価償却資産の減価償却の方法

① 有形固定資産(リース資産を除く)

在外連結子会社1社を除き定率法によっており、在外連結子会社1社は定額法によっております。

ただし、定率法償却を行っている会社においても1998年4月1日以降に取得した建物(建物附属設備を除く)並びに2016年4月1日以降に取得した建物附属設備及び構築物については、定額法によっております。

なお、主な資産の耐用年数は以下のとおりであります。

建物及び構築物 28年～45年

機械装置及び運搬具 4年～12年

② 無形固定資産(リース資産を除く)

定額法によっております。

ソフトウェア(自社利用分)については、社内における利用可能期間(5年)に基づいております。

③ リース資産

リース期間を耐用年数とし、残存価額を零とする定額法を採用しております。

④ 長期前払費用

定額法によっております。

(3) 重要な引当金の計上基準

① 貸倒引当金

債権等の貸倒れによる損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権及び破産更生債権については個別に回収可能性を勘案し、回収不能見込額を計上しております。

② 賞与引当金

従業員の賞与及び取締役でない執行役員の賞与の支給に備えるため、支給見込額に基づき当連結会計年度負担額を計上しております。

- ③ 役員賞与引当金
役員賞与の支給に備えるため、支給見込額に基づき当連結会計年度負担額を計上しております。
 - ④ 受注損失引当金
受注案件に係る将来の損失に備えるため、当連結会計年度末において将来の損失が見込まれ、かつ、当該損失額を合理的に見積可能なものについては、損失見積額を引当計上しております。
 - ⑤ PCB処理引当金
PCB(ポリ塩化ビフェニル)廃棄物の処理費用の支出に備えるため、処理費用及び収集運搬費用の見積額を計上しております。
- (4) 退職給付に係る会計処理の方法
- ① 退職給付見込額の期間帰属方法
退職給付債務の算定にあたり、退職給付見込額を当連結会計年度末までの期間に帰属させる方法については、給付算定式基準によっております。
 - ② 数理計算上の差異の費用処理方法
数理計算上の差異については、各連結会計年度の発生時における従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数(10年)による定額法により按分した額を、それぞれ発生の翌連結会計年度から費用処理しております。
- (5) 重要な外貨建の資産及び負債の本邦通貨への換算の基準
- 外貨建金銭債権債務は、連結決算日の直物為替相場により円貨に換算し、換算差額は損益として処理しております。なお、在外子会社の資産及び負債は、連結決算日の直物為替相場により円貨に換算し、収益及び費用は期中平均相場により円貨に換算し、換算差額は純資産の部における為替換算調整勘定に含めて計上しております。
- (6) 重要なヘッジ会計の方法
- 原則として繰延ヘッジ処理によっております。
- (7) 連結キャッシュ・フロー計算書における資金の範囲
- 手許現金、随時引き出し可能な預金及び容易に換金可能であり、かつ、価値の変動について僅少なりスクしか負わない取得日から3ヶ月以内に償還期限の到来する短期投資からなっております。
- (8) その他の連結財務諸表作成のための重要な事項
- 消費税等の会計処理
消費税等の会計処理は、税抜き方式によっております。

(未適用の会計基準等)

- ・「収益認識に関する会計基準」(企業会計基準第29号 2020年3月31日 企業会計基準委員会)
- ・「収益認識に関する会計基準の適用指針」(企業会計基準適用指針第30号 2020年3月31日 企業会計基準委員会)
- ・「金融商品の時価等の開示に関する適用指針」(企業会計基準適用指針第19号 2020年3月31日 企業会計基準委員会)

(1) 概要

国際会計基準審議会 (IASB) 及び米国財務会計基準審議会 (FASB) は、共同して収益認識に関する包括的な会計基準の開発を行い、2014年5月に「顧客との契約から生じる収益」(IASBにおいてはIFRS第15号、FASBにおいてはTopic606)を公表しており、IFRS第15号は2018年1月1日以後開始する事業年度から、Topic606は2017年12月15日より後に開始する事業年度から適用される状況を踏まえ、企業会計基準委員会において、収益認識に関する包括的な会計基準が開発され、適用指針と合わせて公表されたものです。

企業会計基準委員会の収益認識に関する会計基準の開発にあたっての基本的な方針として、IFRS第15号と整合性を図る便益の1つである財務諸表間の比較可能性の観点から、IFRS第15号の基本的な原則を取り入れることを出発点とし、会計基準を定めることとされ、また、これまで我が国で行われてきた実務等に配慮すべき項目がある場合には、比較可能性を損なわせない範囲で代替的な取扱いを追加することとされております。

(2) 適用予定日

2022年9月期の期首から適用します。

(3) 当該会計基準等の適用による影響

「収益認識に関する会計基準」等の適用による連結財務諸表に与える影響額については、現時点で評価中であります。

- ・「時価の算定に関する会計基準」(企業会計基準第30号 2019年7月4日 企業会計基準委員会)
- ・「時価の算定に関する会計基準の適用指針」(企業会計基準適用指針第31号 2019年7月4日 企業会計基準委員会)
- ・「棚卸資産の評価に関する会計基準」(企業会計基準第9号 2019年7月4日 企業会計基準委員会)
- ・「金融商品に関する会計基準」(企業会計基準第10号 2019年7月4日 企業会計基準委員会)
- ・「金融商品の時価等の開示に関する適用指針」(企業会計基準適用指針第19号 2020年3月31日 企業会計基準委員会)

(1) 概要

国際的な会計基準の定めとの比較可能性を向上させるため、「時価の算定に関する会計基準」及び「時価の算定に関する会計基準の適用指針」(以下「時価算定会計基準等」という。)が開発され、時価の算定方法に関するガイダンス等が定められました。時価算定会計基準等は次の項目の時価に適用されます。

- ・「金融商品に関する会計基準」における金融商品
- ・「棚卸資産の評価に関する会計基準」におけるトレーディング目的で保有する棚卸資産

また「金融商品の時価等の開示に関する適用指針」が改訂され、金融商品の時価のレベルごとの内訳等の注記事項が定められました。

(2) 適用予定日

2022年9月期の期首から適用します。

(3) 当該会計基準等の適用による影響

「時価の算定に関する会計基準」等の適用による連結財務諸表に与える影響額については、現時点で評価中であります。

- ・「会計上の見積りの開示に関する会計基準」(企業会計基準第31号 2020年3月31日 企業会計基準委員会)

(1) 概要

当年度の財務諸表に計上した金額が会計上の見積りによるもののうち、翌年度の財務諸表に重要な影響を及ぼすリスクがある項目における会計上の見積りの内容について、財務諸表利用者の理解に資する情報を開示することを目的とするものです。

(2) 適用予定日

2021年9月期の年度末より適用します。

- ・「会計方針の開示、会計上の変更及び誤謬の訂正に関する会計基準」(企業会計基準第24号 2020年3月31日 企業会計基準委員会)

(1) 概要

「関連する会計基準等の定めが明らかでない場合に採用した会計処理の原則及び手続」に係る注記情報の充実について検討することが提言されたことを受け、企業会計基準委員会において、所定の改正を行い、会計方針の開示、会計上の変更及び誤謬の訂正に関する会計基準として公表されたものです。

なお、「関連する会計基準等の定めが明らかでない場合に採用した会計処理の原則及び手続」に係る注記情報の充実を図るに際しては、関連する会計基準等の定めが明らかでない場合におけるこれまでの実務に影響を及ぼさないために、企業会計原則注解(注1-2)の定めを引き継ぐこととされております。

(2) 適用予定日

2021年9月期の年度末より適用します。

(表示方法の変更)

(連結損益計算書)

前連結会計年度まで、「営業外収益」に独立掲記しておりました「受取保険金」は、営業外収益の総額の100分の10以下となったため、当連結会計年度より、「営業外収益」の「雑収入」に含めて表示することとしました。この表示方法の変更を反映させるため、前連結会計年度の連結財務諸表の組替えを行っております。

この結果、前連結会計年度の連結損益計算書において、「営業外収益」の「受取保険金」に表示していた15,495千円、「雑収入」5,730千円は、「雑収入」21,225千円として組み替えております。

前連結会計年度において、「営業外費用」の「雑損失」に含めていた「リース解約損」は、営業外費用の総額の100分の10を超えたため、当連結会計年度より、独立掲記することとしました。この表示方法の変更を反映させるため、前連結会計年度の連結財務諸表の組替えを行っております。

この結果、前連結会計年度の連結損益計算書において、「営業外費用」の「雑損失」に表示していた1,393千円は、「リース解約損」85千円、「雑損失」1,308千円として組み替えております。

(追加情報)

新型コロナウイルス感染症の影響に関して、当社グループの各事業拠点においては、厳重な対策を実施したうえで事業活動を継続しており、社会インフラを支える業種の性質上、現時点では重大な事業運営上の影響を受けること無くここまでできております。

しかし、新型コロナウイルス感染症は経済や企業活動に広範な影響を及ぼす事象であり、今後の感染拡大や収束時期等を予想することは困難なことから、当社は2021年9月期中は当該影響が継続するという仮定を置いて、繰延税金資産の回収可能性等の会計上の見積りを行っております。

(連結貸借対照表関係)

※1. 有形固定資産の減価償却累計額

前連結会計年度 (2019年9月30日)	当連結会計年度 (2020年9月30日)
7,363,652千円	7,397,692千円

※2. 担保に供している資産

担保に供している資産並びに担保付債務は次のとおりであります。

[担保提供資産]

	前連結会計年度 (2019年9月30日)	当連結会計年度 (2020年9月30日)
建物及び構築物	226,329千円 (177,409千円)	163,660千円 (163,660千円)
機械装置及び運搬具	261,517 (261,517)	278,283 (278,283)
土地	201,694 (3,702)	3,702 (3,702)
その他(工具、器具及び備品)	0 (0)	0 (0)
計	689,541 (442,629)	445,646 (445,646)

[対応債務]

	前連結会計年度 (2019年9月30日)	当連結会計年度 (2020年9月30日)
1年内返済予定の長期借入金	60,000千円 (60,000千円)	60,000千円 (60,000千円)
長期借入金	210,000 (210,000)	150,000 (150,000)
計	270,000 (270,000)	210,000 (210,000)

上記のうち、()内書は工場財団抵当並びに当該債務を示しております。

※3. 受注損失引当金

前連結会計年度(2019年9月30日)

損失の発生が見込まれる工事契約に係るたな卸資産と受注損失引当金は、相殺せずに両建てで表示しております。

損失の発生が見込まれる工事契約に係るたな卸資産のうち、受注損失引当金に対応する額は、218,527千円(うち、商品及び製品7,697千円、仕掛品210,830千円)であります。

当連結会計年度(2020年9月30日)

損失の発生が見込まれる工事契約に係るたな卸資産と受注損失引当金は、相殺せずに両建てで表示しております。

損失の発生が見込まれる工事契約に係るたな卸資産のうち、受注損失引当金に対応する額は、139,185千円(うち、商品及び製品8,607千円、仕掛品130,578千円)であります。

※4. 当社は、運転資金の効率的な調達を行うため主要取引金融機関と特定融資枠契約及びコミットメントライン契約を締結しております。これら契約に基づく特定融資枠契約及びコミットメントラインの総額に係る借入未実行残高は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2019年9月30日)	当連結会計年度 (2020年9月30日)
特定融資枠契約及びコミットメントラインの総額	1,100,000千円	1,100,000千円
借入実行残高	—	—
差引額	1,100,000	1,100,000

(連結損益計算書関係)

※1. 売上原価に含まれている受注損失引当金繰入額 (△は戻入額)

	前連結会計年度 (自 2018年10月1日 至 2019年9月30日)	当連結会計年度 (自 2019年10月1日 至 2020年9月30日)
	130,127千円	△115,973千円

※2. 一般管理費に含まれる研究開発費

	前連結会計年度 (自 2018年10月1日 至 2019年9月30日)	当連結会計年度 (自 2019年10月1日 至 2020年9月30日)
	143,250千円	123,384千円

※3. 固定資産売却益の内容は、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2018年10月1日 至 2019年9月30日)	当連結会計年度 (自 2019年10月1日 至 2020年9月30日)
機械装置及び運搬具	39千円	499千円

※4. 固定資産処分損の内容は、次のとおりであります。

(有形固定資産の除却によるもの)

	前連結会計年度 (自 2018年10月1日 至 2019年9月30日)	当連結会計年度 (自 2019年10月1日 至 2020年9月30日)
建物及び構築物	157千円	5千円
機械装置及び運搬具	277	5,473
その他(工具、器具及び備品)	563	113
撤去費用	1,195	6,978
計	2,193	計 12,570

(有形固定資産の売却によるもの)

	前連結会計年度 (自 2018年10月1日 至 2019年9月30日)	当連結会計年度 (自 2019年10月1日 至 2020年9月30日)
機械装置及び運搬具	—千円	484千円

(無形固定資産の除却によるもの)

	前連結会計年度 (自 2018年10月1日 至 2019年9月30日)	当連結会計年度 (自 2019年10月1日 至 2020年9月30日)
ソフトウェア	262千円	—千円

(連結包括利益計算書関係)

※ その他の包括利益に係る組替調整額及び税効果額

	前連結会計年度 (自 2018年10月1日 至 2019年9月30日)	当連結会計年度 (自 2019年10月1日 至 2020年9月30日)
その他有価証券評価差額金：		
当期発生額	△194,372千円	△141,265千円
組替調整額	983	346
税効果調整前	△193,389	△140,919
税効果額	59,138	42,241
その他有価証券評価差額金	△134,250	△98,678
為替換算調整勘定：		
当期発生額	△14,423	707
退職給付に係る調整額：		
当期発生額	16,973	16,085
組替調整額	10,171	8,473
税効果調整前	27,144	24,559
税効果額	—	—
退職給付に係る調整額	27,144	24,559
その他の包括利益合計	△121,529	△73,411

(連結株主資本等変動計算書関係)

前連結会計年度(自 2018年10月1日 至 2019年9月30日)

1. 発行済株式の種類及び総数並びに自己株式の種類及び株式数に関する事項

	当連結会計年度期首 株式数(株)	当連結会計年度増加 株式数(株)	当連結会計年度減少 株式数(株)	当連結会計年度末 株式数(株)
発行済株式				
普通株式	2,678,600	—	—	2,678,600
合計	2,678,600	—	—	2,678,600
自己株式				
普通株式(注)	403,994	209	9,526	394,677
合計	403,994	209	9,526	394,677

(注) 普通株式の自己株式の減少9,526株は、2019年1月30日に実施した譲渡制限付株式報酬としての自己株式の処分によるものであり、増加209株は、単元未満株式の買取によるものであります。

2. 新株予約権に関する事項

該当事項はありません。

3. 配当に関する事項

(1) 配当金支払額

決議	株式の種類	配当金の総額 (千円)	1株当たり配当額 (円)	基準日	効力発生日
2018年12月21日 定時株主総会	普通株式	45,492	20	2018年9月30日	2018年12月25日
2019年5月10日 取締役会	普通株式	34,259	15	2019年3月31日	2019年6月17日

(2) 基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が翌連結会計年度となるもの

決議	株式の種類	配当金の総額 (千円)	配当の原資	1株当たり配当額 (円)	基準日	効力発生日
2019年12月24日 定時株主総会	普通株式	57,098	利益剰余金	25	2019年9月30日	2019年12月25日

当連結会計年度（自 2019年10月1日 至 2020年9月30日）

1. 発行済株式の種類及び総数並びに自己株式の種類及び株式数に関する事項

	当連結会計年度期首 株式数（株）	当連結会計年度増加 株式数（株）	当連結会計年度減少 株式数（株）	当連結会計年度末 株式数（株）
発行済株式				
普通株式	2,678,600	—	—	2,678,600
合計	2,678,600	—	—	2,678,600
自己株式				
普通株式（注）	394,677	43	5,502	389,218
合計	394,677	43	5,502	389,218

（注）普通株式の自己株式の減少5,502株は、2020年1月29日に実施した譲渡制限付株式報酬としての自己株式の処分によるものであり、増加43株は、単元未満株式の買取によるものであります。

2. 新株予約権に関する事項

該当事項はありません。

3. 配当に関する事項

(1) 配当金支払額

決議	株式の種類	配当金の総額 (千円)	1株当たり配当額 (円)	基準日	効力発生日
2019年12月24日 定時株主総会	普通株式	57,098	25	2019年9月30日	2019年12月25日
2020年5月13日 取締役会	普通株式	45,787	20	2020年3月31日	2020年6月15日

(2) 基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が翌連結会計年度となるもの

決議	株式の種類	配当金の総額 (千円)	配当の原資	1株当たり配当額 (円)	基準日	効力発生日
2020年12月24日 定時株主総会	普通株式	57,234	利益剰余金	25	2020年9月30日	2020年12月25日

(連結キャッシュ・フロー計算書関係)

※1. 現金及び現金同等物の期末残高と連結貸借対照表に掲記されている科目の金額との関係

	前連結会計年度 (自 2018年10月1日 至 2019年9月30日)	当連結会計年度 (自 2019年10月1日 至 2020年9月30日)
現金及び預金勘定	3,330,102千円	1,804,386千円
有価証券勘定	—	1,200,000
現金及び現金同等物	3,330,102	3,004,386

2. 重要な非資金取引の内容

	前連結会計年度 (自 2018年10月1日 至 2019年9月30日)	当連結会計年度 (自 2019年10月1日 至 2020年9月30日)
ファイナンス・リース取引に係る資産及び債務の額	122,470千円	40,518千円

(リース取引関係)

(借主側)

ファイナンス・リース取引

所有権移転外ファイナンス・リース取引

① リース資産の内容

(ア) 有形固定資産

主としてホストコンピュータ及びコンピュータ端末機器であります。

(イ) 無形固定資産

主としてE D Pの基幹システムであります。

② リース資産の減価償却の方法

連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項「4. 会計方針に関する事項 (2) 重要な減価償却資産の減価償却の方法」に記載のとおりであります。

(金融商品関係)

1. 金融商品の状況に関する事項

(1) 金融商品に対する取組方針

当社グループの事業は、資金回収が比較的長期に及ぶバルブ製品の製造と、数ヶ月の短期で資金回収に至るメンテナンスにより構成されており、これらの事業計画に照らし適切な資金需要を想定し、資金運用並びに資金調達を行っております。

資金運用は、一時的に発生する余資について、投資対象を安定性と流動性の高い金融商品に限定して運用しており、期間が長期に亘る運用は行いません。また、デリバティブ取引は、外貨建ての営業債権について、為替の変動リスクを回避するために利用しており、投機的な取引は行いません。

運転資金の調達は銀行からの借入金によっており、将来の業績動向に基づく資金計画を踏まえ、借入先、借入条件等にバリエーションを持たせることで、時々の状況に応じた柔軟な対応ができるようにしております。また、長期借入金による資金調達の際には、金利変動によるリスクをヘッジするために金利スワップ取引を行うことがあり、取引に際しては、社内規程に沿った適切な決裁を経て実行することとしております。

設備資金については、長期借入金、リースにより調達することがあります。長期借入金については運転資金の場合と同様、金利スワップ取引を行うことがあります。

(2) 金融商品の内容及びそのリスク並びにリスク管理体制

営業債権である受取手形及び売掛金、電子記録債権は顧客の信用リスクに晒されておりますが、当社グループの製品・サービスは、その半分以上を総合商社等販売代理店経由での販売としており、商社を経由しない販売先についても、国内大手ブランド・メーカーなど、極めて信用性の高い取引先が中心であります。

また、当社グループの製品・サービスの特性上、いわゆる一見の取引先はほぼ存在せず、長期に亘る取引実績を有する顧客が大半であることから、この面からも顧客の信用リスクは極めて低いものと想定した効率的な与信管理を実施することとしております。

具体的には、新規及び取引履歴の浅い顧客を中心とした取引開始時の信用調査とその継続フォローを行うこととし、商社を介在させない輸出案件に対しては基本的に輸出信用状の入手を条件としております。また、全ての売掛金に関して、期日管理と残高管理を実施しております。

なお、外貨建ての営業債権につきましては、為替の変動リスクを回避するため、社内規程に沿って、先物為替予約を利用しております。

有価証券並びに投資有価証券は市場価格の変動リスクに晒されておりますが、取組方針のとおり、有価証券は安全性・流動性の高いMMF、コマーシャルペーパー、譲渡性預金などであり、投資有価証券は運用目的ではなく、業務上の関係を有する会社の株式を保有しております。

営業債務である支払手形及び買掛金、電子記録債務、未払法人税等は1年以内の支払い期日であります。支払手形及び買掛金、電子記録債務は流動性リスクに晒されておりますが、月次の営業債権回収計画の作成と、流動性を確保した余資運用で手許流動性を高めることにより流動性リスクを管理しております。

長期借入金は、運転資金への充当を目的とした銀行からの借入金で、金利は固定されており金利変動リスクはありません。

(3) 金融商品の時価等に関する事項についての補足説明

金融商品の時価には、市場価格に基づく価額のほか、市場価格がない場合には合理的に算定された価額が含まれております。当該価額の算定においては変動要因を織り込んでいるため、異なる前提条件等を採用することにより、当該価額が変動することがあります。

2. 金融商品の時価等に関する事項

連結貸借対照表計上額、時価及びこれらの差額については、次のとおりであります。なお、時価を把握することが極めて困難と認められるものは含まれておりません（（注）2. 参照）。

前連結会計年度（2019年9月30日）

	連結貸借対照表計上額 (千円)	時価 (千円)	差額 (千円)
(1) 現金及び預金	3,330,102	3,330,102	—
(2) 受取手形及び売掛金	3,135,150	3,135,150	—
(3) 電子記録債権	85,809	85,809	—
(4) 投資有価証券	931,442	931,442	—
資産計	7,482,503	7,482,503	—
(1) 支払手形及び買掛金	711,017	711,017	—
(2) 電子記録債務	114,958	114,958	—
(3) 未払法人税等	172,148	172,148	—
(4) リース債務 (※)	146,401	141,074	△5,326
(5) 長期借入金 (※)	282,762	281,190	△1,571
負債計	1,427,288	1,420,389	△6,898

当連結会計年度（2020年9月30日）

	連結貸借対照表計上額 (千円)	時価 (千円)	差額 (千円)
(1) 現金及び預金	1,804,386	1,804,386	—
(2) 受取手形及び売掛金	2,912,644	2,912,644	—
(3) 電子記録債権	212,485	212,485	—
(4) 有価証券	1,200,000	1,200,000	—
(5) 投資有価証券	791,494	791,494	—
資産計	6,921,011	6,921,011	—
(1) 支払手形及び買掛金	623,940	623,940	—
(2) 電子記録債務	94,292	94,292	—
(3) 未払法人税等	151,679	151,679	—
(4) リース債務 (※)	143,283	139,643	△3,640
(5) 長期借入金 (※)	210,000	210,358	358
負債計	1,223,195	1,219,914	3,281

(※) 1年内返済予定のリース債務及び長期借入金を含めております。

(注) 1. 金融商品の時価の算定方法及びに有価証券に関する事項

資 産

- (1) 現金及び預金、(2) 受取手形及び売掛金、(3) 電子記録債権、(4) 有価証券

これらは短期間で決済されるため、時価は帳簿価額にほぼ等しいことから、当該帳簿価額によっております。

- (5) 投資有価証券

これらの時価について、株式等は取引所の価格によっており、債券等は取引所の価格又は取引金融機関等から提示された価格によっております。また、保有目的ごとの有価証券に関する事項については、注記事項「有価証券関係」をご参照下さい。

負 債

- (1) 支払手形及び買掛金、(2) 電子記録債務、(3) 未払法人税等

これらは短期間で決済されるため、時価は帳簿価額にほぼ等しいことから、当該帳簿価額によっております。

- (4) リース債務、(5) 長期借入金

これらの時価については、元利金の合計額を同額の新規借入又はリース取引等を行った場合に想定される利率で割り引いて算定する方法によっております。

2. 時価を把握することが極めて困難と認められる金融商品

(単位：千円)

区分	前連結会計年度 (2019年9月30日)	当連結会計年度 (2020年9月30日)
非上場株式	2,620	2,620

これらについては、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、「(5) 投資有価証券」には含まれておりません。

3. 金銭債権及び満期のある有価証券の連結決算日後の償還予定額

前連結会計年度（2019年9月30日）

	1年以内 (千円)	1年超 5年以内 (千円)	5年超 10年以内 (千円)	10年超 (千円)
現金及び預金	3,330,102	—	—	—
受取手形及び売掛金	3,135,150	—	—	—
電子記録債権	85,809	—	—	—
有価証券				
満期保有目的の債券				
(1) 国債・地方債等	—	—	—	—
(2) 社債	—	—	—	—
(3) その他	—	—	—	—
投資有価証券				
その他の有価証券のうち満期 があるもの				
(1) 債券（社債）	—	—	—	—
(2) その他	—	—	—	—
合計	6,551,061	—	—	—

当連結会計年度（2020年9月30日）

	1年以内 (千円)	1年超 5年以内 (千円)	5年超 10年以内 (千円)	10年超 (千円)
現金及び預金	1,804,386	—	—	—
受取手形及び売掛金	2,912,644	—	—	—
電子記録債権	212,485	—	—	—
有価証券				
満期保有目的の債券				
(1) 国債・地方債等	—	—	—	—
(2) 社債	—	—	—	—
(3) その他	—	—	—	—
投資有価証券				
その他の有価証券のうち満期 があるもの				
(1) 債券（社債）	—	—	—	—
(2) その他	—	—	—	—
合計	4,929,516	—	—	—

4. 長期借入金及びリース債務の連結決算日後の返済予定額

前連結会計年度（2019年9月30日）

	1年以内 (千円)	1年超 2年以内 (千円)	2年超 3年以内 (千円)	3年超 4年以内 (千円)	4年超 5年以内 (千円)	5年超 (千円)
長期借入金	72,762	60,000	60,000	60,000	30,000	—
リース債務	41,274	32,682	23,919	24,147	24,377	—

当連結会計年度（2020年9月30日）

	1年以内 (千円)	1年超 2年以内 (千円)	2年超 3年以内 (千円)	3年超 4年以内 (千円)	4年超 5年以内 (千円)	5年超 (千円)
長期借入金	60,000	60,000	60,000	30,000	—	—
リース債務	43,824	32,437	30,852	31,154	5,014	—

(有価証券関係)

1. 満期保有目的の債券

前連結会計年度 (2019年9月30日)

該当事項はありません。

当連結会計年度 (2020年9月30日)

該当事項はありません。

2. その他有価証券

前連結会計年度 (2019年9月30日)

	種類	連結貸借対照表計上額 (千円)	取得原価 (千円)	差額 (千円)
連結貸借対照表計上額が取得原価を超えるもの	(1) 株式	493,703	173,734	319,969
	(2) 債券			
	① 国債・地方債等	—	—	—
	② 社債	—	—	—
	③ その他	—	—	—
	(3) その他	13,802	9,356	4,446
	小計	507,506	183,091	324,415
連結貸借対照表計上額が取得原価を超えないもの	(1) 株式	411,396	459,483	△48,087
	(2) 債券			
	① 国債・地方債等	—	—	—
	② 社債	—	—	—
	③ その他	—	—	—
	(3) その他	12,540	13,455	△915
	小計	423,936	472,939	△49,003
合計		931,442	656,030	275,411

(注) 非上場株式 (連結貸借対照表計上額 2,620千円) については、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、上表の「その他有価証券」には含めておりません。

当連結会計年度 (2020年9月30日)

	種類	連結貸借対照表計上額 (千円)	取得原価 (千円)	差額 (千円)
連結貸借対照表計上額が取得原価を超えるもの	(1) 株式	425,871	147,648	278,223
	(2) 債券			
	① 国債・地方債等	—	—	—
	② 社債	—	—	—
	③ その他	—	—	—
	(3) その他	16,292	10,674	5,617
	小計	442,163	158,322	283,840
連結貸借対照表計上額が取得原価を超えないもの	(1) 株式	336,469	485,224	△148,754
	(2) 債券			
	① 国債・地方債等	—	—	—
	② 社債	—	—	—
	③ その他	—	—	—
	(3) その他	1,212,861	1,213,455	△594
	小計	1,549,331	1,698,680	△149,349
合計		1,991,494	1,857,003	134,491

(注) 非上場株式 (連結貸借対照表計上額 2,620千円) については、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、上表の「その他有価証券」には含めておりません。

3. 減損処理を行った有価証券

前連結会計年度において、有価証券について983千円（その他有価証券で時価のある株式1,011千円）減損処理を行っております。

当連結会計年度において、有価証券について346千円（その他有価証券で時価のある株式399千円）減損処理を行っております。

なお、減損処理にあたっては、当該期末日の時価（時価のないものについては実質価額）が個々の銘柄別に取得原価の30%以上下落している銘柄について下記の基準によって判定しております。

- (1) 当該期末日における時価の下落率が、取得原価の30%以上かつ50%未満の範囲で下落している場合
 - ・・・当該期末日を含み今後2期以上に亘り継続した場合には減損処理を実施する。
- (2) 当該期末日における時価（時価のないものについては実質価額）の下落率が、取得原価の50%以上下落している場合
 - ・・・原則として減損処理を実施する。ただし、1年以内に時価がほぼ取得原価まで回復すると合理的な根拠をもって立証できる場合には減損処理を実施しない。

（デリバティブ取引関係）

1. ヘッジ会計が適用されていないデリバティブ取引

通貨関連

前連結会計年度（2019年9月30日）

該当事項はありません。

当連結会計年度（2020年9月30日）

該当事項はありません。

2. ヘッジ会計が適用されているデリバティブ取引

金利関連

前連結会計年度（2019年9月30日）

該当事項はありません。

当連結会計年度（2020年9月30日）

該当事項はありません。

(退職給付関係)

1. 採用している退職給付制度の概要

当社は、確定給付の制度として確定給付企業年金制度及び退職一時金制度を採用しており、確定拠出の制度として特定退職金共済制度を併用しております。国内連結子会社（トウアサービス株式会社、東亜クリエイティブ株式会社）は、確定給付の制度として退職一時金制度を採用しており、確定拠出の制度として中小企業退職金共済制度を併用しております。

2. 確定給付制度

(1) 退職給付債務の期首残高と期末残高の調整表

	前連結会計年度 (自 2018年10月1日 至 2019年9月30日)	当連結会計年度 (自 2019年10月1日 至 2020年9月30日)
退職給付債務の期首残高	1,833,110千円	1,821,182千円
勤務費用	95,849	94,026
利息費用	11,365	11,291
数理計算上の差異の発生額	△17,131	△24,392
退職給付の支払額	△102,011	△185,708
退職給付債務の期末残高	1,821,182	1,716,399

(2) 年金資産の期首残高と期末残高の調整表

	前連結会計年度 (自 2018年10月1日 至 2019年9月30日)	当連結会計年度 (自 2019年10月1日 至 2020年9月30日)
年金資産の期首残高	1,081,496千円	1,094,477千円
期待運用収益	16,222	16,417
数理計算上の差異の発生額	△158	△8,306
事業主からの拠出額	56,243	52,607
退職給付の支払額	△59,326	△113,396
年金資産の期末残高	1,094,477	1,041,798

(3) 退職給付債務及び年金資産の期末残高と連結貸借対照表に計上された退職給付に係る負債及び退職給付に係る資産の調整表

	前連結会計年度 (2019年9月30日)	当連結会計年度 (2020年9月30日)
積立型制度の退職給付債務	1,245,116千円	1,116,818千円
年金資産	△1,094,477	△1,041,798
	150,638	75,020
非積立型制度の退職給付債務	576,065	599,580
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	726,704	674,600
退職給付に係る負債	726,704	674,600
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	726,704	674,600

(4) 退職給付費用及びその内訳項目の金額

	前連結会計年度 (自 2018年10月1日 至 2019年9月30日)	当連結会計年度 (自 2019年10月1日 至 2020年9月30日)
勤務費用	95,849千円	94,026千円
利息費用	11,365	11,291
期待運用収益	△16,222	△16,417
数理計算上の差異の費用処理額	10,171	8,473
確定給付制度に係る退職給付費用	101,163	97,374

(5) 退職給付に係る調整額

退職給付に係る調整額に計上した項目（税効果控除前）の内訳は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2018年10月1日 至 2019年9月30日)	当連結会計年度 (自 2019年10月1日 至 2020年9月30日)
数理計算上の差異	27,144千円	24,559千円
合計	27,144	24,559

(6) 退職給付に係る調整累計額

退職給付に係る調整累計額に計上した項目（税効果控除前）の内訳は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2019年9月30日)	当連結会計年度 (2020年9月30日)
未認識数理計算上の差異	19,498千円	△5,061千円
合 計	19,498	△5,061

(7) 年金資産に関する事項

① 年金資産の主な内訳

年金資産合計に対する主な分類ごとの比率は、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2019年9月30日)	当連結会計年度 (2020年9月30日)
一般勘定	70%	71%
特別勘定		
国内債券	27	25
国内株式	3	4
合 計	100	100

② 長期期待運用収益率の設定方法

年金資産の長期期待運用収益率を決定するため、現在及び予想される年金資産の配分と、年金資産を構成する多様な資産からの現在及び将来期待される長期の収益率を考慮しております。

(8) 数理計算上の計算基礎に関する事項

主要な数理計算上の計算基礎

	前連結会計年度 (2019年9月30日)	当連結会計年度 (2020年9月30日)
割引率	0.6%	0.6%
長期期待運用収益率	1.5%	1.5%
予想昇給率	2019年7月31日時点の職能ポイントと役職ポイントの合計に基づき算定した予定昇給指数を使用しております。	2020年7月31日時点の職能ポイントと役職ポイントの合計に基づき算定した予定昇給指数を使用しております。

3. 確定拠出制度

当社及び連結子会社の確定拠出制度への要拠出額は、前連結会計年度（自 2018年10月1日 至 2019年9月30日） 19,400千円、当連結会計年度（自 2019年10月1日 至 2020年9月30日） 21,040千円であります。

(税効果会計関係)

1. 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

	前連結会計年度 (2019年9月30日)	当連結会計年度 (2020年9月30日)
(繰延税金資産)		
賞与引当金	103,793千円	114,218千円
受注損失引当金	138,100	102,636
貸倒引当金	3,279	2,998
P C B 処理引当金	867	535
退職給付に係る負債	216,263	207,840
未払事業税	9,119	10,714
投資有価証券	3,242	3,348
有形固定資産	156,444	147,422
たな卸資産	136,678	79,664
税務上の繰越欠損金 (注) 2	30,409	25,186
その他	32,329	34,345
繰延税金資産小計	830,530	728,912
税務上の繰越欠損金に係る評価性引当額 (注) 2	△30,409	△25,186
将来減算一時差異等の合計に係る評価性引当額	△462,585	△413,786
評価性引当額小計 (注) 1	△492,995	△438,973
繰延税金資産合計	337,534	289,939
(繰延税金負債)		
その他有価証券評価差額金	△81,544	△39,303
繰延税金負債合計	△81,544	△39,303
繰延税金資産の純額	255,989	250,635

(注) 1. 評価性引当額が、54,022千円減少しております。この減少の主な内容は、たな卸資産並びに受注損失引当金に係る評価性引当金が減少したことに伴うものであります。

(注) 2. 税務上の繰越欠損金及びその繰延税金資産の繰越期限別の金額

前連結会計年度 (2019年9月30日)

	1年以内 (千円)	1年超 2年以内 (千円)	2年超 3年以内 (千円)	3年超 4年以内 (千円)	4年超 5年以内 (千円)	5年超 (千円)	合計 (千円)
税務上の繰越欠損金 (※)	5,371	3,143	—	—	—	21,896	30,409
評価性引当額	△5,371	△3,143	—	—	—	△21,896	△30,409
繰延税金資産	—	—	—	—	—	—	—

(※) 税務上の繰越欠損金は、法定実効税率を乗じた額であります。

当連結会計年度 (2020年9月30日)

	1年以内 (千円)	1年超 2年以内 (千円)	2年超 3年以内 (千円)	3年超 4年以内 (千円)	4年超 5年以内 (千円)	5年超 (千円)	合計 (千円)
税務上の繰越欠損金 (※)	3,142	—	—	—	2,444	19,599	25,186
評価性引当額	△3,142	—	—	—	△2,444	△19,599	△25,186
繰延税金資産	—	—	—	—	—	—	—

(※) 税務上の繰越欠損金は、法定実効税率を乗じた額であります。

2. 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった主要な項目別の内訳

	前連結会計年度 (2019年9月30日)	当連結会計年度 (2020年9月30日)
法定実効税率	30.6%	30.6%
(調整)		
交際費等永久に損金に算入されない項目	2.9	2.2
受取配当金等永久に益金に算入されない項目	△0.3	△0.2
住民税均等割	2.6	1.6
評価性引当額の増減	△59.4	△8.2
在外子会社との税率の差異	△0.8	△0.4
その他	△0.0	2.9
税効果会計適用後の法人税等の負担率	△24.6	28.5

(資産除去債務関係)

重要性が乏しいため、記載を省略しております。

(賃貸等不動産関係)

重要性が乏しいため、記載を省略しております。

(セグメント情報等)

【セグメント情報】

1. 報告セグメントの概要

当社グループの報告セグメントは、当社グループの構成単位のうち分離された財務情報が入手可能であり、取締役会が、経営資源の配分の決定及び業績を評価するために、定期的に検討を行う対象となっているものであります。

当社グループは、バルブ、部品等の製造販売、修理、保守などの役務提供、鋳鋼製品の製造販売及び地域除染、廃炉などを主要な事業としております。バルブ等の製造販売及び役務提供は密接に関連しているため、一体で管理し、包括的な戦略を立案し、事業を展開しております。

従いまして、当社グループは、「バルブ事業」、「製鋼事業」及び「除染事業」の3つを報告セグメントとしております。

なお、当社の製鋼製造部は、鋳鋼製品の製造販売を行っており、その内容は、当社グループ製バルブ製品用の鋳鋼部材の製造と、建設機械向け他の産業向けの鋳鋼製品の製造販売（外販品の製造販売）からなります。

報告セグメントといたしました「製鋼事業」は、このうちの外販品の製造販売について集計したもので、当社グループ製バルブ製品用の鋳鋼部材の製造につきましては、「バルブ事業」として集計しております。

当連結会計年度より、クリアランス金属のリサイクルを主としたリファインメタル事業を行う目的として子会社であるTVEリファインメタル株式会社を設立し、事業を開始しております。

これに伴い、当該事業を報告セグメントに含まれない事業セグメント「その他」に含めております。

なお、前連結会計年度のセグメント情報は、当連結会計年度の報告セグメントの区分に基づき作成したものを開示しております。

2. 報告セグメントごとの売上高、利益又は損失、資産その他の項目の金額の算定方法

報告されている事業セグメントの会計処理の方法は、連結財務諸表の作成方法と同一であります。

報告セグメントの利益又は損失は、営業利益又は営業損失の数値であります。

セグメント間の内部収益及び振替高は市場実勢価格に基づいております。

3. 報告セグメントごとの売上高、利益又は損失、資産その他の項目の金額に関する情報

前連結会計年度（自 2018年10月1日 至 2019年9月30日）

(単位：千円)

	報告セグメント				その他(注) 1	合計	調整額 (注) 2	連結財務諸表 計上額 (注) 3
	バルブ事業	製鋼事業	除染事業	計				
売上高								
外部顧客への売上高	6,694,805	1,052,679	491,574	8,239,059	—	8,239,059	—	8,239,059
セグメント間の内部売上高又は振替高	7,310	—	—	7,310	—	7,310	△7,310	—
計	6,702,115	1,052,679	491,574	8,246,369	—	8,246,369	△7,310	8,239,059
セグメント利益又は損失 (△)	1,548,743	△212,746	△49,005	1,286,991	△8,489	1,278,502	△757,765	520,736
セグメント資産	6,292,920	807,433	187,005	7,287,360	—	7,287,360	4,414,910	11,702,270
その他の項目								
減価償却費(注) 4	237,010	39,075	44	276,130	—	276,130	16,682	292,813
有形固定資産及び無形 固定資産の増加額 (注) 4	213,208	—	—	213,208	—	213,208	1,546	214,755

(注) 1. 「その他」の区分は報告セグメントに含まれない事業セグメントであり、リファインメタル事業を含んでおります。

2. 調整額は以下のとおりであります。

(1) セグメント利益又は損失(△)の調整額△757,765千円は、セグメント間取引消去3,627千円、各報告セグメントに配分していない全社費用△761,393千円が含まれております。

全社費用は、主に報告セグメントに帰属しない一般管理費及び研究開発費であります。

(2) セグメント資産の調整額4,414,910千円は、報告セグメントに配分していない全社資産であります。

全社資産は、主に報告セグメントに帰属しない現金及び預金、投資有価証券等であります。

(3) 減価償却費の調整額16,682千円は、報告セグメントに配分していない全社資産に係る減価償却費であります。

(4) 有形固定資産及び無形固定資産の増加額の調整額1,546千円は、報告セグメントに配分していない全社資産に係る資本的支出であります。

3. セグメント利益又は損失(△)は、連結損益計算書の営業利益と調整を行っております。

4. 減価償却費、有形固定資産及び無形固定資産の増加額には、長期前払費用とその償却費が含まれております。

当連結会計年度（自 2019年10月1日 至 2020年9月30日）

（単位：千円）

	報告セグメント				その他 (注) 1	合計	調整額 (注) 2	連結財務諸表 計上額 (注) 3
	バルブ事業	製鋼事業	除染事業	計				
売上高								
外部顧客への売上高	7,035,937	1,164,245	596,444	8,796,627	28,065	8,824,693	—	8,824,693
セグメント間の内部売上高又は振替高	1,450	—	—	1,450	4,300	5,750	△5,750	—
計	7,037,387	1,164,245	596,444	8,798,077	32,365	8,830,443	△5,750	8,824,693
セグメント利益又は損失 (△)	1,858,391	△148,647	26,290	1,736,034	△28,849	1,707,185	△821,562	885,622
セグメント資産	6,766,327	851,218	208,593	7,826,139	129,072	7,955,212	4,128,886	12,084,099
その他の項目								
減価償却費(注) 4	258,083	27,911	—	285,995	29	286,025	22,196	308,221
有形固定資産及び無形 固定資産の増加額 (注) 4	353,162	—	—	353,162	242	353,404	14,536	367,940

(注) 1. 「その他」の区分は報告セグメントに含まれない事業セグメントであり、リファインメタル事業を含んでおります。

2. 調整額は以下のとおりであります。

(1) セグメント利益又は損失(△)の調整額△821,562千円は、セグメント間取引消去4,638千円、各報告セグメントに配分していない全社費用△826,201千円が含まれております。

全社費用は、主に報告セグメントに帰属しない一般管理費及び研究開発費であります。

(2) セグメント資産の調整額4,128,886千円は、報告セグメントに配分していない全社資産であります。

全社資産は、主に報告セグメントに帰属しない現金及び預金、投資有価証券等であります。

(3) 減価償却費の調整額22,196千円は、報告セグメントに配分していない全社資産に係る減価償却費であります。

(4) 有形固定資産及び無形固定資産の増加額の調整額14,536千円は、報告セグメントに配分していない全社資産に係る資本的支出であります。

3. セグメント利益又は損失(△)は、連結損益計算書の営業利益と調整を行っております。

4. 減価償却費、有形固定資産及び無形固定資産の増加額には、長期前払費用とその償却費が含まれております。

【関連情報】

前連結会計年度（自 2018年10月1日 至 2019年9月30日）

1. 製品及びサービスごとの情報

（単位：千円）

	バルブ（新製弁）	バルブ用取替補修 部品	原子力発電所定期 検査工事	その他メンテナン ス等の役務提供	その他	合計
外部顧客への売上高	2,907,264	1,020,975	894,506	1,879,369	1,536,943	8,239,059

2. 地域ごとの情報

(1) 売上高

本邦の外部顧客への売上高が連結損益計算書の売上高の90%を超えるため、記載を省略しております。

(2) 有形固定資産

本邦に所在している有形固定資産の金額が連結貸借対照表の有形固定資産の金額の90%を超えるため、記載を省略しております。

3. 主要な顧客ごとの情報

（単位：千円）

顧客の名称又は氏名	売上高	関連するセグメント名
三菱商事パワーシステムズ株式会社	2,774,909	バルブ事業
三菱商事株式会社	1,177,111	バルブ事業

当連結会計年度（自 2019年10月1日 至 2020年9月30日）

1. 製品及びサービスごとの情報

(単位：千円)

	バルブ（新製弁）	バルブ用取替補修部品	原子力発電所定期検査工事	その他メンテナンス等の役務提供	その他	合計
外部顧客への売上高	2,414,924	1,314,262	1,031,563	2,276,637	1,787,305	8,824,693

2. 地域ごとの情報

(1) 売上高

本邦の外部顧客への売上高が連結損益計算書の売上高の90%を超えるため、記載を省略しております。

(2) 有形固定資産

本邦に所在している有形固定資産の金額が連結貸借対照表の有形固定資産の金額の90%を超えるため、記載を省略しております。

3. 主要な顧客ごとの情報

(単位：千円)

顧客の名称又は氏名	売上高	関連するセグメント名
三菱商事パワーシステムズ株式会社	3,110,366	バルブ事業
西華産業株式会社	899,741	バルブ事業

【報告セグメントごとの固定資産の減損損失に関する情報】

前連結会計年度（自 2018年10月1日 至 2019年9月30日）

該当事項はありません。

当連結会計年度（自 2019年10月1日 至 2020年9月30日）

該当事項はありません。

【報告セグメントごとののれんの償却額及び未償却残高に関する情報】

前連結会計年度（自 2018年10月1日 至 2019年9月30日）

該当事項はありません。

当連結会計年度（自 2019年10月1日 至 2020年9月30日）

該当事項はありません。

【報告セグメントごとの負ののれん発生益に関する情報】

前連結会計年度（自 2018年10月1日 至 2019年9月30日）

該当事項はありません。

当連結会計年度（自 2019年10月1日 至 2020年9月30日）

該当事項はありません。

【関連当事者情報】

該当事項はありません。

(1株当たり情報)

前連結会計年度 (自 2018年10月1日 至 2019年9月30日)		当連結会計年度 (自 2019年10月1日 至 2020年9月30日)	
1株当たり純資産額	3,631円05銭	1株当たり純資産額	3,845円59銭
1株当たり当期純利益	313円27銭	1株当たり当期純利益	296円56銭
潜在株式調整後1株当たり当期純利益については、潜在株式がないため記載しておりません。		潜在株式調整後1株当たり当期純利益については、潜在株式がないため記載しておりません。	
1株当たり当期純利益の算定上の基礎		1株当たり当期純利益の算定上の基礎	
連結損益計算書上の親会社株主に帰属する当期純利益	714,372千円	連結損益計算書上の親会社株主に帰属する当期純利益	678,443千円
普通株式に係る親会社株主に帰属する当期純利益	714,372千円	普通株式に係る親会社株主に帰属する当期純利益	678,443千円
普通株式の期中平均株式数	2,280,343株	普通株式の期中平均株式数	2,287,709株

(重要な後発事象)

該当事項はありません。

⑤【連結附属明細表】

【社債明細表】

該当事項はありません。

【借入金等明細表】

区分	当期首残高 (千円)	当期末残高 (千円)	平均利率 (%)	返済期限
短期借入金	—	—	—	—
1年以内に返済予定の長期借入金	72,762	60,000	0.6	—
1年以内に返済予定のリース債務	41,274	43,824	—	—
長期借入金（1年以内に返済予定のものを除く。）	210,000	150,000	0.6	2021年～2024年
リース債務（1年以内に返済予定のものを除く。）	105,126	99,459	—	2021年～2025年
その他有利子負債	—	—	—	—
合計	429,163	353,283	—	—

(注) 1. 「平均利率」については、借入金の期末残高に対する加重平均利率を記載しております。

2. リース債務の平均利率については、リース料総額に含まれる利息相当額を控除する前の金額でリース債務を連結貸借対照表に計上しているため、記載しておりません。

3. 長期借入金及びリース債務（1年以内に返済予定のものを除く。）の連結決算日後5年内における1年ごとの返済予定額は以下のとおりであります。

区分	1年超2年以内 (千円)	2年超3年以内 (千円)	3年超4年以内 (千円)	4年超5年以内 (千円)
長期借入金	60,000	60,000	30,000	—
リース債務	32,437	30,852	31,154	5,014

【資産除去債務明細表】

該当事項はありません。

(2) 【その他】

当連結会計年度における四半期情報等

(累計期間)	第1四半期	第2四半期	第3四半期	当連結会計年度
売上高 (千円)	2,270,696	5,055,088	6,554,969	8,824,693
税金等調整前当期純利益 (千円)	277,228	759,051	784,430	949,507
親会社株主に帰属する当期純利益 (千円)	200,974	460,907	466,636	678,443
1株当たり当期純利益 (円)	88.00	201.60	204.02	296.56

(会計期間)	第1四半期	第2四半期	第3四半期	第4四半期
1株当たり四半期純利益 (円)	88.00	113.61	2.50	92.52

2 【財務諸表等】

(1) 【財務諸表】

① 【貸借対照表】

(単位：千円)

	前事業年度 (2019年9月30日)	当事業年度 (2020年9月30日)
資産の部		
流動資産		
現金及び預金	3,026,644	1,425,986
受取手形	271,870	338,793
電子記録債権	85,809	212,485
売掛金	※1 2,757,303	※1 2,472,920
有価証券	—	1,200,000
商品及び製品	175,091	237,252
仕掛品	1,462,810	2,212,871
原材料及び貯蔵品	556,153	484,862
その他	※1 157,812	※1 281,496
貸倒引当金	△76,836	△59,065
流動資産合計	8,416,658	8,807,603
固定資産		
有形固定資産		
建物	※2 468,900	※2 471,279
構築物	※2 11,068	※2 14,499
機械及び装置	※2 457,607	※2 462,129
車両運搬具	※2 313	※2 1,899
工具、器具及び備品	※2 48,133	※2 47,896
土地	※2 261,363	※2 261,363
リース資産	74,027	70,252
建設仮勘定	29,208	12,215
有形固定資産合計	1,350,623	1,341,536
無形固定資産		
特許実施権	2,790	1,950
ソフトウェア	188,556	179,369
リース資産	68,395	61,186
その他	9,105	8,966
無形固定資産合計	268,847	251,472
投資その他の資産		
投資有価証券	934,062	794,114
関係会社株式	119,256	217,206
出資金	3,096	3,096
長期貸付金	※1 4,334	※1 53,675
繰延税金資産	250,887	246,394
その他	65,058	69,622
貸倒引当金	△10,724	△9,803
投資その他の資産合計	1,365,972	1,374,306
固定資産合計	2,985,443	2,967,315
資産合計	11,402,102	11,774,919

(単位：千円)

	前事業年度 (2019年9月30日)	当事業年度 (2020年9月30日)
負債の部		
流動負債		
支払手形	359,226	310,195
電子記録債務	114,958	94,292
買掛金	325,460	341,752
1年内返済予定の長期借入金	※ ₂ 72,762	※ ₂ 60,000
リース債務	41,274	39,053
未払金	※ ₁ 191,558	※ ₁ 216,936
未払費用	111,912	117,422
未払法人税等	171,754	148,466
賞与引当金	314,019	346,125
役員賞与引当金	39,799	59,179
受注損失引当金	451,605	335,631
その他	73,614	177,366
流動負債合計	2,267,947	2,246,421
固定負債		
長期借入金	※ ₂ 210,000	※ ₂ 150,000
リース債務	105,126	96,084
退職給付引当金	707,206	679,662
P C B 処理引当金	2,838	1,751
その他	9,145	9,431
固定負債合計	1,034,317	936,930
負債合計	3,302,264	3,183,351
純資産の部		
株主資本		
資本金	1,739,559	1,739,559
資本剰余金		
資本準備金	772,059	772,059
その他資本剰余金		
資本金及び資本準備金減少差益	2,486,191	2,486,191
自己株式処分差益	161	161
自己株式処分差損	△7,160	△7,397
資本剰余金合計	3,251,252	3,251,015
利益剰余金		
その他利益剰余金		
繰越利益剰余金	3,570,824	4,152,399
利益剰余金合計	3,570,824	4,152,399
自己株式	△655,665	△646,596
株主資本合計	7,905,970	8,496,379
評価・換算差額等		
その他有価証券評価差額金	193,867	95,188
評価・換算差額等合計	193,867	95,188
純資産合計	8,099,837	8,591,567
負債純資産合計	11,402,102	11,774,919

②【損益計算書】

(単位：千円)

	前事業年度 (自 2018年10月1日 至 2019年9月30日)	当事業年度 (自 2019年10月1日 至 2020年9月30日)
売上高	※1 7,640,569	※1 8,098,205
売上原価	※1 5,629,784	※1 5,691,679
売上総利益	2,010,784	2,406,526
販売費及び一般管理費	※1, ※2 1,469,828	※1, ※2 1,548,478
営業利益	540,956	858,047
営業外収益		
受取利息	※1 333	※1 539
有価証券利息	37	236
受取配当金	27,546	37,308
受取家賃	※1 9,203	※1 9,694
受取補償金	—	28,722
作業くず売却益	8,447	1,472
貸倒引当金戻入額	—	18,692
雑収入	※1 24,730	※1 11,016
営業外収益合計	70,298	107,683
営業外費用		
支払利息	1,580	2,584
支払手数料	1,000	1,005
雑損失	8,142	124
営業外費用合計	10,723	3,714
経常利益	600,531	962,016
特別利益		
固定資産売却益	※3 39	※3 499
特別利益合計	39	499
特別損失		
固定資産処分損	※4 2,374	※4 12,711
投資有価証券評価損	983	346
特別損失合計	3,358	13,057
税引前当期純利益	597,213	949,458
法人税、住民税及び事業税	187,739	218,262
法人税等調整額	△332,432	46,735
法人税等合計	△144,693	264,997
当期純利益	741,906	684,461

③【株主資本等変動計算書】

前事業年度（自 2018年10月1日 至 2019年9月30日）

（単位：千円）

	株主資本										
	資本金	資本剰余金					利益剰余金			自己株式	株主資本合計
		資本準備金	その他資本剰余金			資本剰余金合計	その他利益剰余金	利益剰余金合計			
			資本金及び資本準備金減少差益	自己株式処分差益	自己株式処分差損				繰越利益剰余金		
当期首残高	1,739,559	772,059	2,486,191	161	△1,864	3,256,548	2,908,669	2,908,669	△671,241	7,233,535	
当期変動額											
剰余金の配当							△79,751	△79,751		△79,751	
当期純利益							741,906	741,906		741,906	
自己株式の取得									△246	△246	
自己株式の処分					△5,296	△5,296			15,822	10,526	
株主資本以外の項目の 当期変動額（純額）											
当期変動額合計	—	—	—	—	△5,296	△5,296	662,154	662,154	15,576	672,434	
当期末残高	1,739,559	772,059	2,486,191	161	△7,160	3,251,252	3,570,824	3,570,824	△655,665	7,905,970	

	評価・換算差額等		純資産合計
	その他有価証券評価差額金	評価・換算差額等合計	
当期首残高	328,117	328,117	7,561,653
当期変動額			
剰余金の配当			△79,751
当期純利益			741,906
自己株式の取得			△246
自己株式の処分			10,526
株主資本以外の項目の 当期変動額（純額）	△134,250	△134,250	△134,250
当期変動額合計	△134,250	△134,250	538,184
当期末残高	193,867	193,867	8,099,837

当事業年度（自 2019年10月1日 至 2020年9月30日）

（単位：千円）

	株主資本										
	資本金	資本剰余金					利益剰余金			自己株式	株主資本合計
		資本準備金	その他資本剰余金			資本剰余金合計	その他利益剰余金	利益剰余金合計			
			資本金及び資本準備金減少差益	自己株式処分差益	自己株式処分差損		繰越利益剰余金				
当期首残高	1,739,559	772,059	2,486,191	161	△7,160	3,251,252	3,570,824	3,570,824	△655,665	7,905,970	
当期変動額											
剰余金の配当							△102,885	△102,885		△102,885	
当期純利益							684,461	684,461		684,461	
自己株式の取得									△69	△69	
自己株式の処分					△236	△236			9,138	8,902	
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）											
当期変動額合計	—	—	—	—	△236	△236	581,575	581,575	9,069	590,408	
当期末残高	1,739,559	772,059	2,486,191	161	△7,397	3,251,015	4,152,399	4,152,399	△646,596	8,496,379	

	評価・換算差額等		純資産合計
	その他有価証券評価差額金	評価・換算差額等合計	
当期首残高	193,867	193,867	8,099,837
当期変動額			
剰余金の配当			△102,885
当期純利益			684,461
自己株式の取得			△69
自己株式の処分			8,902
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	△98,678	△98,678	△98,678
当期変動額合計	△98,678	△98,678	491,730
当期末残高	95,188	95,188	8,591,567

【注記事項】

(重要な会計方針)

1. 有価証券の評価基準及び評価方法

(1) 満期保有目的の債券

償却原価法（定額法）

(2) 子会社株式

移動平均法による原価法

(3) その他有価証券

時価のあるもの

決算日の市場価格等に基づく時価法（評価差額は全部純資産直入法により処理し、売却原価は移動平均法により算定）

時価のないもの

移動平均法による原価法

2. デリバティブの評価基準及び評価方法

時価法

3. たな卸資産の評価基準及び評価方法

(1) 製品及び仕掛品

主として個別法による原価法（貸借対照表価額については収益性の低下による簿価切り下げの方法により算定）

(2) 原材料及び貯蔵品

主として移動平均法による原価法（貸借対照表価額については収益性の低下による簿価切り下げの方法により算定）

4. 固定資産の減価償却の方法

(1) 有形固定資産（リース資産を除く）

定率法によっております。

ただし、1998年4月1日以降に取得した建物（建物附属設備を除く）並びに2016年4月1日以降に取得した建物附属設備及び構築物については、定額法によっております。

なお、主な資産の耐用年数は以下のとおりであります。

建物 28年～45年

機械及び装置 4年～12年

(2) 無形固定資産（リース資産を除く）

定額法によっております。

ソフトウェア（自社利用分）については、社内における利用可能期間（5年）に基づいております。

(3) リース資産

リース期間を耐用年数とし、残存価額を零とする定額法を採用しております。

(4) 長期前払費用

定額法によっております。

5. 引当金の計上基準

(1) 貸倒引当金

債権等の貸倒れによる損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権及び破産更生債権については個別に回収可能性を勘案し、回収不能見込額を計上しております。

(2) 賞与引当金

従業員の賞与及び取締役でない執行役員の賞与の支給に備えるため、支給見込額に基づき当事業年度負担額を計上しております。

(3) 役員賞与引当金

役員賞与の支給に備えるため、支給見込額に基づき当事業年度負担額を計上しております。

(4) 受注損失引当金

受注案件に係る将来の損失に備えるため、当事業年度末において将来の損失が見込まれ、かつ、当該損失額を合理的に見積可能なものについては、損失見積額を引当計上しております。

(5) 退職給付引当金

従業員の退職給付に備えるため当事業年度末における退職給付債務見込額及び年金資産残高に基づき、当事業年度末において発生していると認められる額を計上しております。なお、退職給付の算定にあたり、退職給付見込額を当事業年度末までの期間に帰属させる方法については、給付算定式基準によっております。

数理計算上の差異は、各事業年度の発生時における従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数（10年）による定額法により按分した額をそれぞれ発生翌事業年度から費用処理することとしております。

(6) PCB処理引当金

PCB（ポリ塩化ビフェニル）廃棄物の処理費用の支出に備えるため、処理費用及び収集運搬費用の見積額を計上しております。

6. ヘッジ会計の方法

原則として繰延ヘッジ処理によっております。

7. その他財務諸表作成のための重要な事項

(1) 消費税等の会計処理

消費税等の会計処理は、税抜き方式によっております。

(2) 退職給付に係る会計処理

退職給付に係る未認識数理計算上の差異の会計処理の方法は、連結財務諸表におけるこれらの会計処理の方法と異なっております。

(表示方法の変更)

(損益計算書)

前事業年度において、「営業外収益」に独立掲記しておりました「受取保険金」は、金額的重要性が乏しくなったため、当事業年度より、「営業外収益」の「雑収入」に含めて表示することとしました。この表示方法の変更を反映させるため、前事業年度の財務諸表の組替えを行っております。

この結果、前事業年度の損益計算書において、「営業外収益」の「受取保険金」15,495千円、「雑収入」9,235千円は、「雑収入」24,730千円として組み替えております。

(追加情報)

新型コロナウイルス感染症の影響に関して、当社の各事業拠点においては、厳重な対策を実施したうえで事業活動を継続しており、社会インフラを支える業種の性質上、現時点では重大な事業運営上の影響を受けること無くここまでできております。

しかし、新型コロナウイルス感染症は経済や企業活動に広範な影響を及ぼす事象であり、今後の感染拡大や収束時期等を予想することは困難なことから、当社は2021年9月期中は当該影響が継続するという仮定を置いて、繰延税金資産の回収可能性等の会計上の見積りを行っております。

(貸借対照表関係)

※1. 関係会社に対する金銭債権及び金銭債務

	前事業年度 (2019年9月30日)	当事業年度 (2020年9月30日)
短期金銭債権	98,669千円	87,656千円
短期金銭債務	13,909	22,445
長期金銭債権	4,334	53,675

※2. 担保に供している資産

担保に供している資産並びに担保付債務は次のとおりであります。

[担保提供資産]

	前事業年度 (2019年9月30日)		当事業年度 (2020年9月30日)	
建物	221,398千円	(172,479千円)	159,426千円	(159,426千円)
構築物	4,930	(4,930)	4,234	(4,234)
機械及び装置	261,517	(261,517)	278,283	(278,283)
車両運搬具	0	(0)	0	(0)
工具、器具及び備品	0	(0)	0	(0)
土地	201,694	(3,702)	3,702	(3,702)
計	689,541	(442,629)	445,646	(445,646)

[対応債務]

	前事業年度 (2019年9月30日)		当事業年度 (2020年9月30日)	
1年内返済予定の長期借入金	60,000千円	(60,000千円)	60,000千円	(60,000千円)
長期借入金	210,000	(210,000)	150,000	(150,000)
計	270,000	(270,000)	210,000	(210,000)

上記のうち、()内書は工場財団抵当並びに当該債務を示しております。

3. 当社は、運転資金の効率的な調達を行うため主要取引金融機関と特定融資枠契約及びコミットメントライン契約を締結しております。これら契約に基づく特定融資枠契約及びコミットメントラインの総額に係る借入未実行残高は次のとおりであります。

	前事業年度 (2019年9月30日)	当事業年度 (2020年9月30日)
特定融資枠契約及びコミットメントラインの総額	1,100,000千円	1,100,000千円
借入実行残高	—	—
差引額	1,100,000	1,100,000

(損益計算書関係)

※1. 関係会社との取引高は次のとおりであります。

	前事業年度 (自 2018年10月1日 至 2019年9月30日)	当事業年度 (自 2019年10月1日 至 2020年9月30日)
営業取引高	274,321千円	281,009千円
営業取引以外の取引高	13,834	9,660

※2. 販売費に属する費用のおおよその割合は前事業年度48%、当事業年度47%、一般管理費に属する費用のおおよその割合は前事業年度52%、当事業年度53%であります。

販売費及び一般管理費のうち主要な費目及び金額は次のとおりであります。

	前事業年度 (自 2018年10月1日 至 2019年9月30日)	当事業年度 (自 2019年10月1日 至 2020年9月30日)
販売手数料	182,807千円	178,906千円
給料及び手当	382,683	394,390
賞与引当金繰入額	68,116	78,321
役員賞与引当金繰入額	39,799	59,179
退職給付費用	25,524	24,719
減価償却費	31,752	45,516

※3. 固定資産売却益の内容は、次のとおりであります。

	前事業年度 (自 2018年10月1日 至 2019年9月30日)	当事業年度 (自 2019年10月1日 至 2020年9月30日)
機械及び装置	39千円	499千円

※4. 固定資産処分損の内容は、次のとおりであります。

(有形固定資産の除却によるもの)

	前事業年度 (自 2018年10月1日 至 2019年9月30日)	当事業年度 (自 2019年10月1日 至 2020年9月30日)
建物	78千円	5千円
機械及び装置	274	5,614
工具、器具及び備品	563	113
撤去費用	1,195	6,978
計	2,111	12,711

(無形固定資産の除却によるもの)

	前事業年度 (自 2018年10月1日 至 2019年9月30日)	当事業年度 (自 2019年10月1日 至 2020年9月30日)
ソフトウェア	262千円	一千円

(有価証券関係)

子会社株式（前事業年度の貸借対照表計上額 119,256千円、当事業年度の貸借対照表計上額 217,206千円）は、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、記載しておりません。

(税効果会計関係)

1. 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

	前事業年度 (2019年9月30日)	当事業年度 (2020年9月30日)
(繰延税金資産)		
賞与引当金	96,027千円	105,845千円
受注損失引当金	138,100	102,636
貸倒引当金	26,776	21,060
退職給付引当金	216,263	207,840
P C B 処理引当金	867	535
未払事業税	9,119	10,714
投資有価証券	3,242	3,348
関係会社株式	50,238	50,238
有形固定資産	147,405	141,701
たな卸資産	136,589	79,556
その他	31,068	34,012
繰延税金資産小計	855,700	757,489
評価性引当額	△523,267	△471,791
繰延税金資産合計	332,432	285,697
(繰延税金負債)		
その他有価証券評価差額金	△81,544	△39,303
繰延税金負債合計	△81,544	△39,303
繰延税金資産の純額	250,887	246,394

2. 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった主要な項目別の内訳

	前事業年度 (2019年9月30日)	当事業年度 (2020年9月30日)
法定実効税率	30.6%	30.6%
(調整)		
交際費等永久に損金に算入されない項目	2.6	2.0
受取配当金等永久に益金に算入されない項目	△0.3	△0.2
住民税均等割	2.4	1.5
評価性引当額の増減	△59.5	△5.5
その他	0.1	△0.5
税効果会計適用後の法人税等の負担率	△24.2	27.9

(重要な後発事象)

該当事項はありません。

④【附属明細表】

【有形固定資産等明細表】

(単位：千円)

区分	資産の種類	当期首残高	当期増加額	当期減少額	当期償却額	当期末残高	減価償却累計額
有形 固定資産	建物	468,900	40,649	5	38,264	471,279	1,775,270
	構築物	11,068	4,786	—	1,354	14,499	350,035
	機械及び装置	457,607	127,782	5,614	117,645	462,129	4,364,067
	車両運搬具	313	2,100	0	514	1,899	41,299
	工具、器具及び備品	48,133	41,034	113	41,157	47,896	903,707
	土地	261,363	—	—	—	261,363	—
	リース資産	74,027	16,314	—	20,089	70,252	45,166
	建設仮勘定	29,208	199,359	216,352	—	12,215	—
	計	1,350,623	432,026	222,086	219,026	1,341,536	7,479,547
無形 固定資産	特許実施権	2,790	—	—	840	1,950	—
	ソフトウェア	188,556	52,321	—	61,508	179,369	—
	リース資産	68,395	16,057	—	23,266	61,186	—
	その他	9,105	52,321	52,460	—	8,966	—
	計	268,847	120,700	52,460	85,615	251,472	—

注) 表示方法は、帳簿価額による記載方式により作成しております。

【引当金明細表】

(単位：千円)

科目	当期首残高	当期増加額	当期減少額	当期末残高
貸倒引当金	87,561	—	18,691	68,869
賞与引当金	314,019	346,125	314,019	346,125
役員賞与引当金	39,799	59,179	39,799	59,179
受注損失引当金	451,605	335,631	451,605	335,631
P C B 処理引当金	2,838	—	1,087	1,751

(2) 【主な資産及び負債の内容】

連結財務諸表を作成しているため、記載を省略しております。

(3) 【その他】

該当事項はありません。

第6【提出会社の株式事務の概要】

事業年度	10月1日から9月30日まで
定時株主総会	12月中
基準日	9月30日
剰余金の配当の基準日	3月31日 9月30日
1単元の株式数	100株
単元未満株式の買取り・買増し 取扱場所 株主名簿管理人 取次所 買取・買増手数料	(特別口座) 大阪市中央区伏見町三丁目6番3号 三菱UFJ信託銀行株式会社 大阪証券代行部 (特別口座) 東京都千代田区丸の内一丁目4番5号 三菱UFJ信託銀行株式会社 証券代行部 無料
公告掲載方法	電子公告により行う。ただし、電子公告によることができない事故その他やむをえない事由が生じたときは、日本経済新聞に掲載して行う。 公告掲載URL https://www.toavalve.co.jp
株主に対する特典	該当事項はありません。

(注) 当社定款の定めにより、単元未満株主は、会社法第189条第2項各号に掲げる権利、会社法第166条第1項の規定による請求をする権利、株主の有する株式数に応じて募集株式の割当て及び募集新株予約権の割当てを受ける権利並びに単元未満株式の売渡請求をする権利以外の権利を有しておりません。

第7【提出会社の参考情報】

1【提出会社の親会社等の情報】

当社には、親会社等はありません。

2【その他の参考情報】

当事業年度の開始日から有価証券報告書提出日までの間に、次の書類を提出しております。

(1) 有価証券報告書及びその添付書類並びに確認書

事業年度（第20期）（自 2018年10月1日 至 2019年9月30日）2019年12月24日近畿財務局長に提出

(2) 内部統制報告書及びその添付書類

2019年12月24日近畿財務局長に提出

(3) 四半期報告書及び確認書

（第21期第1四半期）（自 2019年10月1日 至 2019年12月31日）2020年2月13日近畿財務局長に提出

（第21期第2四半期）（自 2020年1月1日 至 2020年3月31日）2020年5月14日近畿財務局長に提出

（第21期第3四半期）（自 2020年4月1日 至 2020年6月30日）2020年8月7日近畿財務局長に提出

(4) 臨時報告書

2019年12月26日近畿財務局長に提出

企業内容等の開示に関する内閣府令第19条第2項第9号の2（株主総会における議決権行使の結果）の規定に基づく臨時報告書であります。

2020年4月23日近畿財務局長に提出

企業内容等の開示に関する内閣府令第19条第2項第4号（主要株主の異動）の規定に基づく臨時報告書であります。

2020年8月27日近畿財務局長に提出

企業内容等の開示に関する内閣府令第19条第2項第4号（主要株主の異動）の規定に基づく臨時報告書であります。

第二部【提出会社の保証会社等の情報】

該当事項はありません。

株式会社TVE

取締役会 御中

有限責任監査法人トーマツ

神戸事務所

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 西方 実 印

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 安場 達哉 印

<財務諸表監査>

監査意見

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている株式会社TVE（旧会社名 東亜バルブエンジニアリング株式会社）の2019年10月1日から2020年9月30日までの連結会計年度の連結財務諸表、すなわち、連結貸借対照表、連結損益計算書、連結包括利益計算書、連結株主資本等変動計算書、連結キャッシュ・フロー計算書、連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項、その他の注記及び連結附属明細表について監査を行った。

当監査法人は、上記の連結財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、株式会社TVE（旧会社名 東亜バルブエンジニアリング株式会社）及び連結子会社の2020年9月30日現在の財政状態並びに同日をもって終了する連結会計年度の経営成績及びキャッシュ・フローの状況を、全ての重要な点において適正に表示しているものと認める。

監査意見の根拠

当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準における当監査法人の責任は、「連結財務諸表監査における監査人の責任」に記載されている。当監査法人は、我が国における職業倫理に関する規定に従って、会社及び連結子会社から独立しており、また、監査人としてのその他の倫理上の責任を果たしている。当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

連結財務諸表に対する経営者及び監査等委員会の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して連結財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない連結財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

連結財務諸表を作成するに当たり、経営者は、継続企業の前提に基づき連結財務諸表を作成することが適切であるかどうかを評価し、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に基づいて継続企業に関する事項を開示する必要がある場合には当該事項を開示する責任がある。

監査等委員会の責任は、財務報告プロセスの整備及び運用における取締役の職務の執行を監視することにある。

連結財務諸表監査における監査人の責任

監査人の責任は、監査人が実施した監査に基づいて、全体としての連結財務諸表に不正又は誤謬による重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得て、監査報告書において独立の立場から連結財務諸表に対する意見を表明することにある。虚偽表示は、不正又は誤謬により発生する可能性があり、個別に又は集計すると、連結財務諸表の利用者の意思決定に影響を与えると合理的に見込まれる場合に、重要性があると判断される。

監査人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に従って、監査の過程を通じて、職業的専門家としての判断を行い、職業的懐疑心を保持して以下を実施する。

・不正又は誤謬による重要な虚偽表示リスクを識別し、評価する。また、重要な虚偽表示リスクに対応した監査手続を立案し、実施する。監査手続の選択及び適用は監査人の判断による。さらに、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手する。

- ・連結財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、監査人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、監査に関連する内部統制を検討する。
- ・経営者が採用した会計方針及びその適用方法の適切性、並びに経営者によって行われた会計上の見積りの合理性及び関連する注記事項の妥当性を評価する。
- ・経営者が継続企業を前提として連結財務諸表を作成することが適切であるかどうか、また、入手した監査証拠に基づき、継続企業の前提に重要な疑義を生じさせるような事象又は状況に関して重要な不確実性が認められるかどうか結論付ける。継続企業の前提に関する重要な不確実性が認められる場合は、監査報告書において連結財務諸表の注記事項に注意を喚起すること、又は重要な不確実性に関する連結財務諸表の注記事項が適切でない場合は、連結財務諸表に対して除外事項付意見を表明することが求められている。監査人の結論は、監査報告書日までに入手した監査証拠に基づいているが、将来の事象や状況により、企業は継続企業として存続できなくなる可能性がある。
- ・連結財務諸表の表示及び注記事項が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠しているかどうかとともに、関連する注記事項を含めた連結財務諸表の表示、構成及び内容、並びに連結財務諸表が基礎となる取引や会計事象を適正に表示しているかどうかを評価する。
- ・連結財務諸表に対する意見を表明するために、会社及び連結子会社の財務情報に関する十分かつ適切な監査証拠を入手する。監査人は、連結財務諸表の監査に関する指示、監督及び実施に関して責任がある。監査人は、単独で監査意見に対して責任を負う。

監査人は、監査等委員会に対して、計画した監査の範囲とその実施時期、監査の実施過程で識別した内部統制の重要な不備を含む監査上の重要な発見事項、及び監査の基準で求められているその他の事項について報告を行う。

監査人は、監査等委員会に対して、独立性についての我が国における職業倫理に関する規定を遵守したこと、並びに監査人の独立性に影響を与えると合理的に考えられる事項、及び阻害要因を除去又は軽減するためにセーフガードを講じている場合はその内容について報告を行う。

<内部統制監査>

監査意見

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第2項の規定に基づく監査証明を行うため、株式会社TVE（旧会社名 東亜バルブエンジニアリング株式会社）の2020年9月30日現在の内部統制報告書について監査を行った。

当監査法人は、株式会社TVE（旧会社名 東亜バルブエンジニアリング株式会社）が2020年9月30日現在の財務報告に係る内部統制は有効であると表示した上記の内部統制報告書が、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して、財務報告に係る内部統制の評価結果について、全ての重要な点において適正に表示しているものと認める。

監査意見の根拠

当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の監査の基準に準拠して内部統制監査を行った。財務報告に係る内部統制の監査の基準における当監査法人の責任は、「内部統制監査における監査人の責任」に記載されている。当監査法人は、我が国における職業倫理に関する規定に従って、会社及び連結子会社から独立しており、また、監査人としてのその他の倫理上の責任を果たしている。当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

内部統制報告書に対する経営者及び監査等委員会の責任

経営者の責任は、財務報告に係る内部統制を整備及び運用し、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して内部統制報告書を作成し適正に表示することにある。

監査等委員会の責任は、財務報告に係る内部統制の整備及び運用状況を監視、検証することにある。

なお、財務報告に係る内部統制により財務報告の虚偽の記載を完全には防止又は発見することができない可能性がある。

内部統制監査における監査人の責任

監査人の責任は、監査人が実施した内部統制監査に基づいて、内部統制報告書に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得て、内部統制監査報告書において独立の立場から内部統制報告書に対する意見を表明することにある。

監査人は、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の監査の基準に従って、監査の過程を通じて、職業的専門家としての判断を行い、職業的懐疑心を保持して以下を実施する。

- ・内部統制報告書における財務報告に係る内部統制の評価結果について監査証拠を入手するための監査手続を実施する。内部統制監査の監査手続は、監査人の判断により、財務報告の信頼性に及ぼす影響の重要性に基づいて選択及び適用される。
- ・財務報告に係る内部統制の評価範囲、評価手続及び評価結果について経営者が行った記載を含め、全体としての内部統制報告書の表示を検討する。
- ・内部統制報告書における財務報告に係る内部統制の評価結果に関する十分かつ適切な監査証拠を入手する。監査人は、内部統制報告書の監査に関する指示、監督及び実施に関して責任がある。監査人は、単独で監査意見に対して責任を負う。

監査人は、監査等委員会に対して、計画した内部統制監査の範囲とその実施時期、内部統制監査の実施結果、識別した内部統制の開示すべき重要な不備、その是正結果、及び内部統制の監査の基準で求められているその他の事項について報告を行う。

監査人は、監査等委員会に対して、独立性についての我が国における職業倫理に関する規定を遵守したこと、並びに監査人の独立性に影響を与えると合理的に考えられる事項、及び阻害要因を除去又は軽減するためにセーフガードを講じている場合はその内容について報告を行う。

利害関係

会社及び連結子会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以上

-
- (注) 1. 上記は監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は当社（有価証券報告書提出会社）が別途保管しております。
2. XBR Lデータは監査の対象には含まれていません。

独立監査人の監査報告書

2020年12月17日

株式会社TVE

取締役会 御中

有限責任監査法人トーマツ

神戸事務所

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 西方 実 印

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 安場 達哉 印

監査意見

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている株式会社TVE（旧会社名 東亜バルブエンジニアリング株式会社）の2019年10月1日から2020年9月30日までの第21期事業年度の財務諸表、すなわち、貸借対照表、損益計算書、株主資本等変動計算書、重要な会計方針、その他の注記及び附属明細表について監査を行った。

当監査法人は、上記の財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、株式会社TVE（旧会社名 東亜バルブエンジニアリング株式会社）の2020年9月30日現在の財政状態及び同日をもって終了する事業年度の経営成績を、全ての重要な点において適正に表示しているものと認める。

監査意見の根拠

当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準における当監査法人の責任は、「財務諸表監査における監査人の責任」に記載されている。当監査法人は、我が国における職業倫理に関する規定に従って、会社から独立しており、また、監査人としてのその他の倫理上の責任を果たしている。当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

財務諸表に対する経営者及び監査等委員会の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

財務諸表を作成するに当たり、経営者は、継続企業の前提に基づき財務諸表を作成することが適切であるかどうかを評価し、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に基づいて継続企業に関する事項を開示する必要がある場合には当該事項を開示する責任がある。

監査等委員会の責任は、財務報告プロセスの整備及び運用における取締役の職務の執行を監視することにある。

財務諸表監査における監査人の責任

監査人の責任は、監査人が実施した監査に基づいて、全体としての財務諸表に不正又は誤謬による重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得て、監査報告書において独立の立場から財務諸表に対する意見を表明することにある。虚偽表示は、不正又は誤謬により発生する可能性があり、個別に又は集計すると、財務諸表の利用者の意思決定に影響を与えると合理的に見込まれる場合に、重要性があると判断される。

監査人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に従って、監査の過程を通じて、職業的専門家としての判断を行い、職業的懐疑心を保持して以下を実施する。

・不正又は誤謬による重要な虚偽表示リスクを識別し、評価する。また、重要な虚偽表示リスクに対応した監査手続を立案し、実施する。監査手続の選択及び適用は監査人の判断による。さらに、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手する。

・財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、監査人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、監査に関連する内部統制を検討する。

・経営者が採用した会計方針及びその適用方法の適切性、並びに経営者によって行われた会計上の見積りの合理性及び関連する注記事項の妥当性を評価する。

・経営者が継続企業を前提として財務諸表を作成することが適切であるかどうか、また、入手した監査証拠に基づき、継続企業の前提に重要な疑義を生じさせるような事象又は状況に関して重要な不確実性が認められるかどうか結論付ける。継続企業の前提に関する重要な不確実性が認められる場合は、監査報告書において財務諸表の注記事項に注意を喚起すること、又は重要な不確実性に関する財務諸表の注記事項が適切でない場合は、財務諸表に対して除外事項付意見を表明することが求められている。監査人の結論は、監査報告書日までに入手した監査証拠に基づいているが、将来の事象や状況により、企業は継続企業として存続できなくなる可能性がある。

・財務諸表の表示及び注記事項が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠しているかどうかとともに、関連する注記事項を含めた財務諸表の表示、構成及び内容、並びに財務諸表が基礎となる取引や会計事象を適正に表示しているかどうかを評価する。

監査人は、監査等委員会に対して、計画した監査の範囲とその実施時期、監査の実施過程で識別した内部統制の重要な不備を含む監査上の重要な発見事項、及び監査の基準で求められているその他の事項について報告を行う。

監査人は、監査等委員会に対して、独立性についての我が国における職業倫理に関する規定を遵守したこと、並びに監査人の独立性に影響を与えると合理的に考えられる事項、及び阻害要因を除去又は軽減するためにセーフガードを講じている場合はその内容について報告を行う。

利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以上

-
- (注) 1. 上記は監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は当社（有価証券報告書提出会社）が別途保管しております。
2. XBR Lデータは監査の対象には含まれていません。

【表紙】

【提出書類】 内部統制報告書

【根拠条文】 金融商品取引法第24条の4の4第1項

【提出先】 近畿財務局長

【提出日】 2020年12月24日

【会社名】 株式会社TVE
(旧会社名 東亜バルブエンジニアリング株式会社)

【英訳名】 TVE Co., Ltd.
(旧英訳名 Toa Valve Engineering Inc.)
(注) 2019年12月24日開催の第20回定時株主総会の決議により、2020年10月1日から会社名及び英訳名を上記のとおり変更いたしました。

【代表者の役職氏名】 代表取締役 笹野 幸明

【最高財務責任者の役職氏名】 該当事項はありません。

【本店の所在の場所】 兵庫県尼崎市西立花町五丁目12番1号

【縦覧に供する場所】 株式会社東京証券取引所
(東京都中央区日本橋兜町2番1号)

1 【財務報告に係る内部統制の基本的枠組みに関する事項】

代表取締役 笹野 幸明は、当社の財務報告に係る内部統制の整備及び運用に責任を有しており、企業会計審議会の公表した「財務報告に係る内部統制の評価及び監査の基準並びに財務報告に係る内部統制の評価及び監査に関する実施基準の改訂について（意見書）」に示されている内部統制の基本的枠組みに準拠して財務報告に係る内部統制を整備及び運用し、当社の財務報告における記載内容の適正性を担保し、その信頼性を確保しております。

なお、財務報告に係る内部統制は、内部統制の各基本的要素が有機的に結びつき、一体となって機能することにより、その目的を合理的な範囲で達成しようとするものであります。このため、財務報告に係る内部統制により財務報告の虚偽の記載を完全には防止又は発見することができない可能性があります。

2 【評価の範囲、基準日及び評価手続に関する事項】

財務報告に係る内部統制の評価は、当事業年度の末日である2020年9月30日を基準日として行われており、評価に当っては、一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠しております。

本評価においては、連結ベースでの財務報告全体に重要な影響を及ぼす内部統制（以下、全社的な内部統制）の評価を行った上で、その結果を踏まえて、評価対象とする業務プロセスを選定いたしました。当該業務プロセスの評価においては、選定された業務プロセスを分析した上で、財務報告の信頼性に重要な影響を及ぼす統制上の要点を識別し、当該統制上の要点について整備及び運用状況を評価することによって、内部統制の有効性に関する評価を行いました。

財務報告に係る内部統制の評価の範囲は、会社及び連結子会社について、財務報告の信頼性に及ぼす影響の重要性の観点から必要な範囲を決定いたしました。財務報告の信頼性に及ぼす影響の重要性は、金額的及び質的影響の重要性を考慮して決定しており、会社及び連結子会社を対象として行った全社的な内部統制の評価結果を踏まえ、業務プロセスに係る内部統制の評価範囲を合理的に決定いたしました。

業務プロセスに係る内部統制の評価範囲については、各事業拠点の前連結会計年度の売上高（連結会社間取引消去後）の金額が高い拠点から合算していき、前連結会計年度の連結売上高全体の概ね3分の2に達している事業拠点を「重要な事業拠点」といたしました。選定した重要な事業拠点においては、企業の事業目的に大きく関わる勘定科目として売上高、売掛金、仕入高、買掛金及び棚卸資産に至る業務プロセス評価の対象といたしました。さらに、個々に追加すべき評価の対象として重要な虚偽記載の発生の可能性が高く、見積りや予測を伴う重要な勘定科目に係る業務プロセスやリスクが大きい取引を行っている事業等に係る業務プロセスについても検討の対象としてきました。業務プロセスの評価に当っては、財務報告の信頼性に重要な影響を及ぼす統制上の要点を識別し、当該統制上の要点について整備及び運用状況を内部監査による独立的評価を行うことによって、内部統制の有効性に関する評価を行いました。

3 【評価結果に関する事項】

上記評価の結果、2020年9月30日時点において、当社の財務報告に係る内部統制は有効であると判断いたしました。

4 【付記事項】

付記すべき事項はありません。

5 【特記事項】

特記すべき事項はありません。

【表紙】

【提出書類】 確認書

【根拠条文】 金融商品取引法第24条の4の2第1項

【提出先】 近畿財務局長

【提出日】 2020年12月24日

【会社名】 株式会社TVE
(旧会社名 東亜バルブエンジニアリング株式会社)

【英訳名】 TVE Co., Ltd.
(旧英訳名 Toa Valve Engineering Inc.)
(注) 2019年12月24日開催の第20回定時株主総会の決議により、2020年10月1日から会社名及び英訳名を上記のとおり変更いたしました。

【代表者の役職氏名】 代表取締役 笹野 幸明

【最高財務責任者の役職氏名】 該当事項はありません。

【本店の所在の場所】 兵庫県尼崎市西立花町五丁目12番1号

【縦覧に供する場所】 株式会社東京証券取引所
(東京都中央区日本橋兜町2番1号)

1 【有価証券報告書の記載内容の適正性に関する事項】

当社代表取締役 笹野 幸明は、当社の第21期（自2019年10月1日 至2020年9月30日）の有価証券報告書の記載内容が金融商品取引法令に基づき適正に記載されていることを確認しました。

2 【特記事項】

特記すべき事項はありません。